宮永坊の森遺跡

1989

石川県立埋蔵文化財センター

宮永坊の森遺跡

1989

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は石川県松任市宮永、宮永市町地内に所在する宮永坊の森遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、松任市旭地区宮永工区の県営圃場整備事業に係るもので、耕地整備課長の依頼に基づき、昭和61年（1986年）に石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．遺跡の調査期間、面積および発掘担当（補助）者は次のとおりである。

昭和61年６月16日（月）～８月25日（月）　面積1,500㎡

石川県立埋蔵文化財センター主事　藤田邦雄

石川県立埋蔵文化財センター調査員　横山貴広（現野々市町教育委員会）

石川県立埋蔵文化財センター調査員　石田和彦（現小松市教育委員会）

4．本遺跡出土の遺物整理作業は社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託した。

5．本書の編集、図版作成は藤田が担当した。

6．出土遺物の写真撮影は田畑　弘（石川県立埋蔵文化財センター調査員）が担当した。

7．本書の執筆は、「Ⅰ　遺跡の位置と環境」を小嶋芳孝（石川県立埋蔵文化財センター主査）、弥生時代前・中期の土器および石器を久田正弘（石川県立埋蔵文化財センター主事）が当たり、それ以外は藤田が担当した。

8．本書で扱う方位は磁北を示しており、レベルの数値は絶対高である。

9．図版中の土器の縮尺は1／3であり、番号は本文挿図中の遺物番号に一致する。

10．本調査によって得られた資料は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保存管理に当たっている。

目　　次

例　　言

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
　1．位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査に至る経緯と経過 …… 6
　1．調査に至る経緯 …… 6
　2．調査の経過（日誌抄）…… 9

Ⅲ　遺構と遺物 …… 11
　1．概　要 …… 11
　2．遺構と遺物 …… 17
　　A区の遺構と遺物 …… 17
　　B区の遺構と遺物 …… 24
　　C区の遺構と遺物 …… 32
　　D区の遺構と遺物 …… 50

Ⅳ　ま　と　め …… 59

挿図目次

第１図　宮永坊の森遺跡周辺の旧地形図 …… 2
第２図　宮永坊の森遺跡周辺の遺跡分布図 …… 3・4
第３図　旭地区宮永工区分布調査位置図 …… 7
第４図　分布調査試掘坑層序模式図 …… 8
第５図　調査区グリッド位置図 …… 12
第６図　Ａ区全体図 …… 13
第７図　Ｂ区全体図 …… 14
第８図　Ｃ区全体図 …… 15
第９図　Ｄ区全体図 …… 16
第10図　Ａ区遺構実測図１ …… 18
第11図　Ａ区遺構実測図２ …… 19
第12図　Ａ区遺構実測図３ …… 20
第13図～15図　Ａ区出土遺物実測図 …… 21～23
第16図　Ｂ区遺構実測図１ …… 25
第17図　Ｂ区遺構実測図２ …… 26
第18図～21図　Ｂ区出土遺物実測図 …… 27～30
第22図　Ｃ区遺構実測図１ …… 33・34
第23図　Ｃ区遺構実測図２ …… 35
第24図　Ｃ・Ｄ区遺構実測図３ …… 37・38
第25図～36図　Ｃ区出土遺物実測図 …… 39～48
第37図　Ｄ区遺構実測図１ …… 51
第38図　Ｄ区遺構実測図２ …… 52
第39図～44図　Ｄ区出土遺物実測図 …… 53～56

表目次

第１表　周辺遺跡地名表 …… 5
第２表　打製石斧計測表 …… 58
第３表　遺物観察表 …… 60～65

図版目次

図版１　調査区周辺の航空写真
図版２　遺構完掘状況・遺物出土状況
図版３　遺跡周辺の航空写真
図版４～34　遺構写真
図版35～45　遺物写真

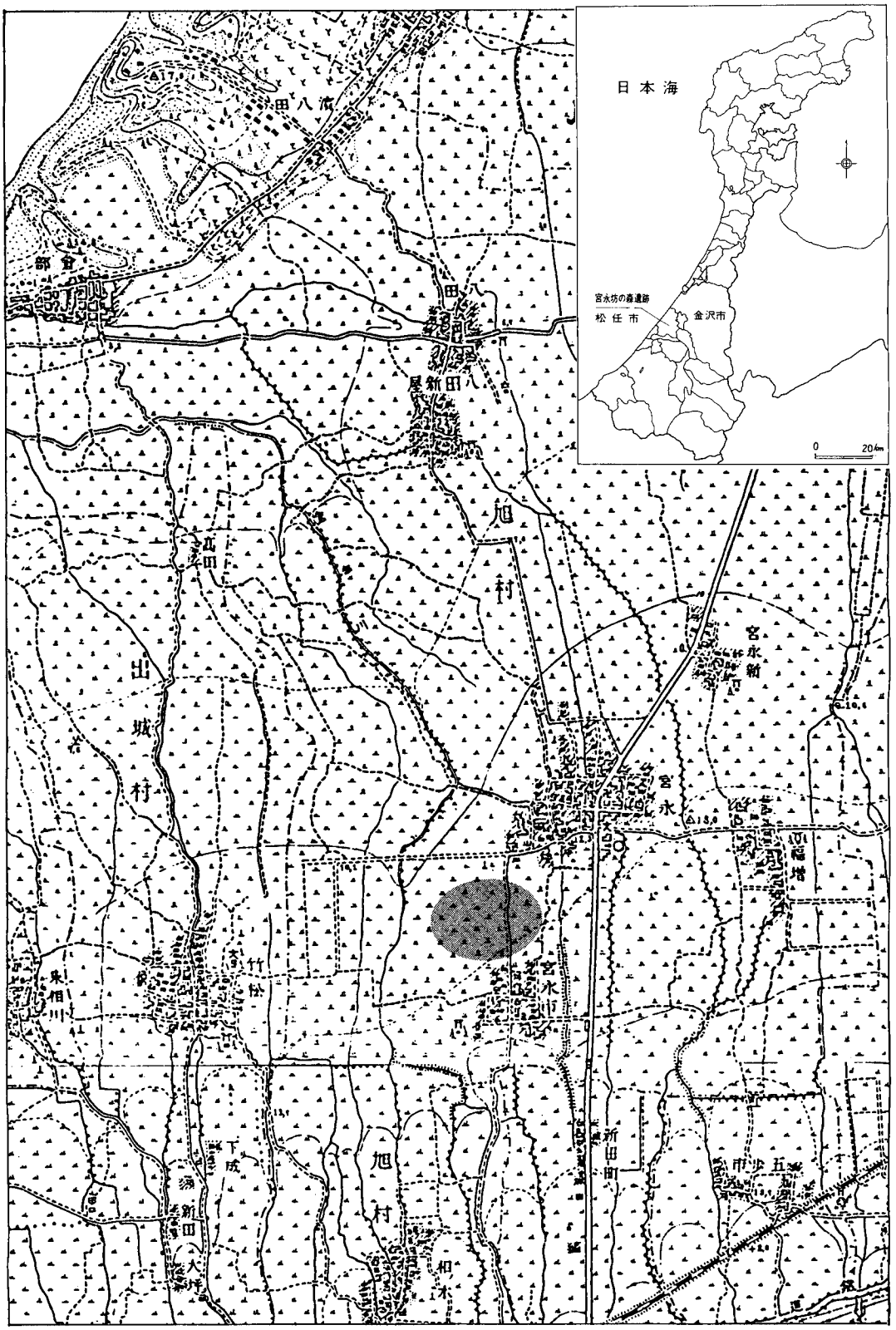
Ⅰ　遺跡の位置と環境

1．位置と環境

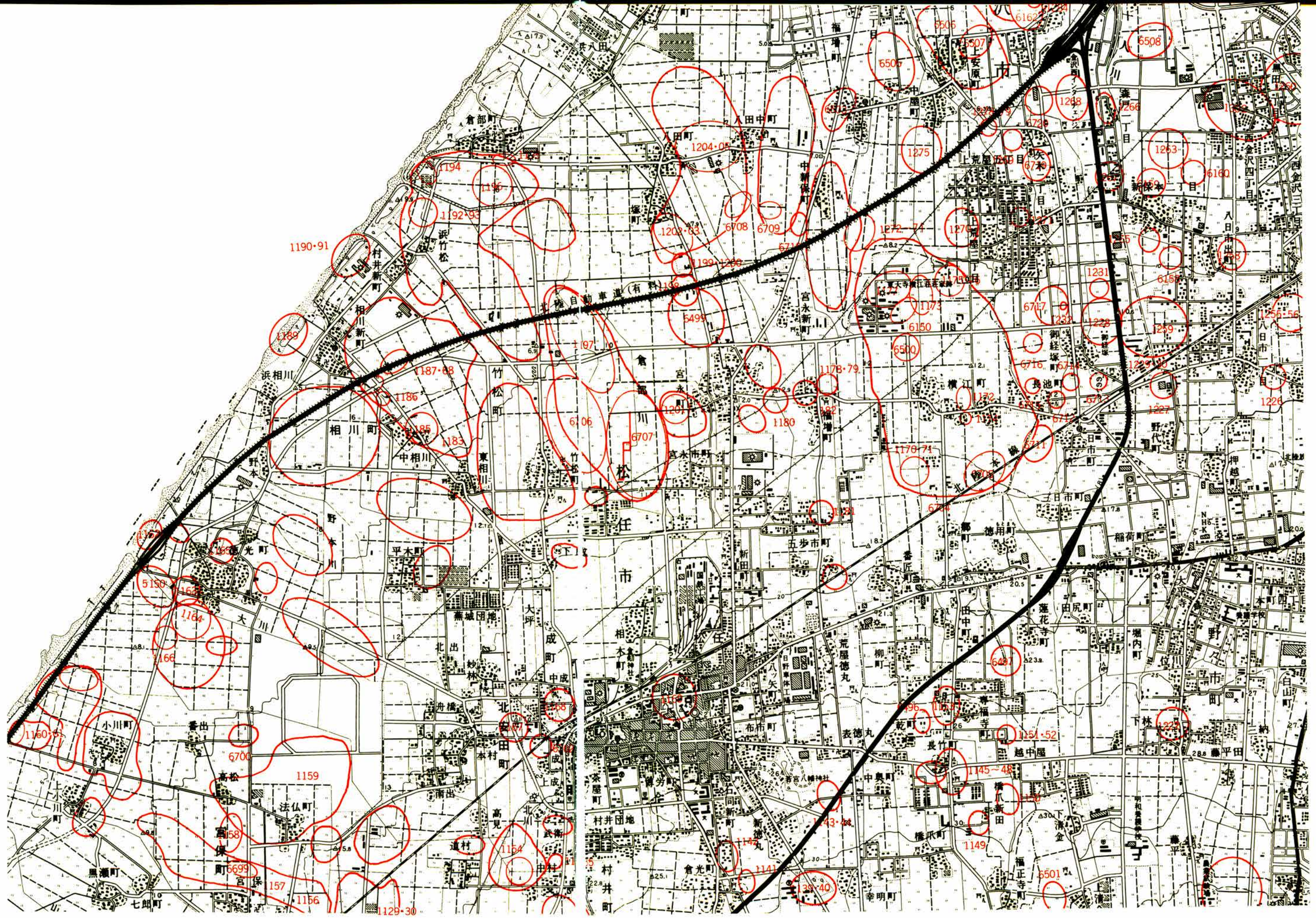
宮永坊の森遺跡は、石川県松任市の西北部に位置している。松任市は、石川県の県都金沢市の南郊に位置し、人口が約55,000人・面積は59.75㎢で、耕地面積は3,880ｈａである。近年は、金沢市のベッドタウンとして住宅地の開発や、工場の建設が盛んであるが、元来は手取扇状地に広がる農地を生活基盤とした穀倉地帯である。扇状地を流れる手取川の分流を利用した用水を網の目のように張り巡らした七ヶ用水の建設や、耕地整理の実施など、近代以降の農地開発事業によって水田経営の生産性が飛躍的に増大している。

手取扇状地は、白山に源を発する手取川が形成した大規模な扇状地である。現在の手取川の流路は、手取谷の出口の鶴来町を出ると大きく南にカーブして扇状地の南端を流れている。しかし、文献資料などの検討では鶴来町から真っ直ぐに流れる現在の大慶寺用水が、中世以前の流路であったと指摘されており、宮永坊の森に遺跡が営まれていた当時は手取川が現在よりも近いところを流れていたようである。

宮永坊の森遺跡は、海抜10m前後の扇状地に位置している。第２図は、周辺の遺跡分布図である。野々市町御経塚遺跡に代表されるように、縄文時代後期から晩期の大型遺跡が、海抜10m前後の低地に点々と営まれている。本遺跡の周辺では、八田中遺跡周辺に縄文晩期から弥生前期の遺跡が集中して調査されている。弥生時代中期の遺跡は、前期と同じように八田中遺跡の周辺で比較的多く検出されている。宮永坊の森遺跡に人々が足跡を残した弥生時代後期～古墳時代前期は、手取扇状地でも最も遺跡の数が増えた時代であった。周辺の宮永市遺跡・竹松遺跡など、土器散布地の調査を実施するとほとんどの遺跡から当該時期の土器が出土しており、現在の集落密度と近似していたようである。宮永町と宮永市町から東南側は松任市の市街化調整区域に入り、遺跡の分布状態が十分に把握されていないが、松任市の東側の野々市町末松周辺では、本遺跡周辺に見られるような高密度分布は見られない。宮永坊の森遺跡では、奈良・平安時代の遺物はほとんど検出されておらず、また中世や近世の土器量もそう多くはない。周辺遺跡の竹松遺跡では、1986年度の県営圃場整備事業に伴う調査で、奈良時代の竪穴式建物を検出している。また松任市横江町では東大寺領の荘園関係の遺跡と推定できる横江遺跡がある。横江遺跡では弥生時代中期から平安時代中期の間に断続的に遺跡が営まれ、特に東大寺の荘園が設定された奈良時代末から平安時代前半に大型の建物群や倉庫群が多数建てられていた事が近年の調査で明らかになってきた。中世には、宮永坊の森遺跡周辺に寺院があったという伝承があるが、松任市周辺の扇状地には寺院や館跡の伝承地が多数確認されている。しかし、これらの伝承地が考古学的に確認された遺跡は無い。松任市徳光町の聖興寺跡伝承地が、1987年の調査で中世の遺物や遺構を検出しているので、今後の検討次第では聖興寺跡と推定できることになるかも知れない。



第１図　宮永坊の森遺跡周辺の旧地形図（S＝1/20,000）



— 3・4 —

第2図　宮永地方の森遺跡周辺の遺跡地区（S＝1：25,000）

番号	名称	所在地	時代
1143	幸明経塚	松任市幸明	不詳
1158	鶴丸館跡	松任市宮保	不詳
1163	御光遺跡	松任市御光	不詳
1164	アベノ廻証寺跡	松任市御光	不詳
1165	大和牟人館跡	松任市御光	不詳
1167	安田三郎惟光館跡	松任市成	不詳
1172	横江館跡	松任市横江	不詳
8498	乾町遺跡	松任市乾	不詳
8503	福増遺跡	金沢市福増	不詳
8704	横江D遺跡	松任市横江	不詳
8708	竹松C遺跡	松任市竹松	不詳
1145	長竹遺跡	松任市長竹	縄文
1150	楯爪遺跡	松任市楯爪	縄文
1151	高田遺跡	松任市専福寺	縄文
1162	御光遺跡	松任市御光	縄文
1170	ゴクラク寺跡	松任市横江	縄文
1175	ジョウガンジ遺跡	松任市横江	縄文
1178	福増遺跡	松任市福増	縄文
1204	八田中雁田川遺跡	松任市八田中	縄文
1227	野代遺跡	野々市町野代	縄文
1228	御経塚遺跡	野々市町御経塚	縄文
1263	新保本チカモリ遺跡	金沢市新保本	縄文
1266	森戸本町遺跡	金沢市森戸	縄文
1267	森戸住宅遺跡	金沢市森戸	縄文
1269	矢木本町遺跡	金沢市矢木	縄文
1270	上荒屋遺跡	金沢市上荒屋	縄文
1272	下福増遺跡	金沢市下福増	縄文
1275	中屋遺跡	金沢市中屋	縄文
1302	古府遺跡	金沢市古府	縄文
6161	南塚遺跡	金沢市新保本	縄文
6712	長池キタバシ遺跡	野々市町長池	縄文

番号	名称	所在地	時代
6499	宮永B遺跡	松任市宮永	縄文・古墳・中世
6709	八田中ヒエモンダ遺跡	松任市八田	縄文・中世
1173	横江A遺跡	松任市横江	縄文・奈良・平安
6500	横江アズキダ遺跡	松任市横江	縄文・弥生・古代・中世
1202	一塚遺跡	松任市一塚	縄文・弥生・古墳
6717	御経塚シンデン遺跡	野々市町御経塚	縄文・弥生・古墳
1146	長竹遺跡	松任市長竹	弥生
1179	福増遺跡	松任市福増	弥生
1189	浜相川相川新遺跡	松任市相川新	弥生
1190	相川新雁田川遺跡	松任市相川新	弥生
1199	旭小学校遺跡	松任市宮永	弥生
1255	押野西遺跡	野々市町押野	弥生
1265	新保本町塚田遺跡	金沢市新保本	弥生
1271	上荒屋住宅遺跡	金沢市上荒屋	弥生
1273	下福増遺跡	金沢市下福増	弥生
1278	上安原陸橋遺跡	金沢市上安原	弥生
8699	宮保遺跡	松任市宮保	弥生
6710	八田中アレチ遺跡	松任市八田中	弥生
6714	御経塚ヤトメ遺跡	野々市町御経塚	弥生
6715	長池ニシタンボ遺跡	野々市町長池	弥生
6716	御経塚オッソ遺跡	野々市町御経塚	弥生
6719	矢木マノツノキ遺跡	金沢市矢木	弥生
6720	矢木ジワリ遺跡	金沢市矢木	弥生
5150	御光ヨノキヤマ遺跡	松任市御光	弥生・中世
6707	宮永市遺跡	松任市宮永市	弥生・中世
6708	ハクサンダ遺跡	松任市八田	弥生・中世
1177	横江庄庄家跡	松任市横江	弥生・奈良・平安
1139	三浦遺跡	松任市三浦	古墳
1147	長竹遺跡	松任市長竹	古墳
1160	小川新遺跡	松任市小川	古墳
1183	中相川古墳群	松任市相川	古墳

番号	名称	所在地	時代
1186	御手洗川遺跡	松任市相川	古墳
1187	相川新A遺跡	松任市相川新	古墳
1188	相川新B遺跡	松任市相川新	古墳
1191	相川新雁田川遺跡	松任市相川新	古墳
1192	浜竹松遺跡	松任市竹松	古墳
1195	倉部出戸遺跡	松任市倉部	古墳
1197	竹松遺跡	松任市宮永	古墳
1198	宮永遺跡	松任市宮永	古墳
1200	旭小学校遺跡	松任市宮永	古墳
1203	一塚古墳	松任市一塚	古墳
1205	八田中雁田川遺跡	松任市八田中	古墳
1229	御経塚B遺跡	野々市町御経塚	古墳
1231	御経塚C遺跡	野々市町御経塚	古墳
1256	押野西遺跡	野々市町押野	古墳
1258	八日市ヤスマル遺跡	金沢市八日市	古墳
1268	森戸バイパス遺跡	金沢市森戸	古墳
1274	下福増遺跡	金沢市下福増	古墳
1279	上安原陸橋遺跡	金沢市上安原	古墳
1284	びわ塚古墳	金沢市南塚	古墳
6159	新保東遺跡	金沢市新保本	古墳
6160	新保西遺跡	金沢市新保本	古墳
6162	南塚B遺跡	金沢市新保本	古墳
8497	田中ノダ遺跡	松任市田中	古墳
8507	上安原カナワリ遺跡	金沢市上安原	古墳
1280	黒田遺跡	金沢市黒田	古墳・平安
1180	福増東川遺跡	松任市福増	奈良
1181	あさひ荘園遺跡	松任市福増	奈良
1193	浜竹松遺跡	松任市竹松	奈良
8505	中屋ヘシダ遺跡	金沢市中屋	奈良・中世
1140	三浦遺跡	松任市三浦	奈良・平安
1259	八日市B遺跡	金沢市八日市	奈良・平安

番号	名称	所在地	時代
8506	上安原遺跡	金沢市上安原	奈良・平安
6713	御経塚ボンサンマイ遺跡	野々市町御経塚	奈良・平安
1129	北出遺跡	松任市米永	平安
1152	高田遺跡	松任市専福寺	平安
1159	法仏遺跡	松任市法仏	平安
1174	横江B遺跡	松任市横江	平安
1176	ジョウガンジ遺跡	松任市横江	平安
1230	御経塚B遺跡	野々市町御経塚	平安
1155	中村遺跡	松任市村井	平安・中世
8501	滑金アガトウ遺跡	野々市町滑金	平安・中世
8508	松島ナカオサ遺跡	金沢市松島	平安・中世
6700	番出・高松遺跡	松任市宮保	平安・中世
1130	北出遺跡	松任市米永	中世
1141	若林長門館跡	松任市倉光	中世
1142	倉光館跡	松任市倉光	中世
1144	西方寺跡	松任市幸明	中世
1148	長竹遺跡	松任市長竹	中世
1149	松の木遺跡	松任市楯爪	中世
1153	専福寺跡	松任市専福寺	中世
1154	村井備中守館跡	松任市村井	中世
1156	光明寺跡	松任市宮保	中世
1157	赤松次郎宮保本陣跡	松任市宮保	中世
1161	小川白山神社遺跡	松任市小川	中世
1166	願興寺跡	松任市御光	中世
1168	出城城跡	松任市成	中世
1171	ゴクラク寺跡	松任市横江	中世
1182	宿上市左ェ門館跡	松任市福増	中世
1185	相川館跡	松任市相川	中世
1194	倉部川遺跡	松任市倉部	中世
1198	倉部館跡	松任市倉部	中世
1201	宮永坊の森遺跡	松任市宮永	弥生・古墳・中世

第１表　周辺遺跡地名表

Ⅱ　調査に至る経緯と経過

1．調査に至る経緯

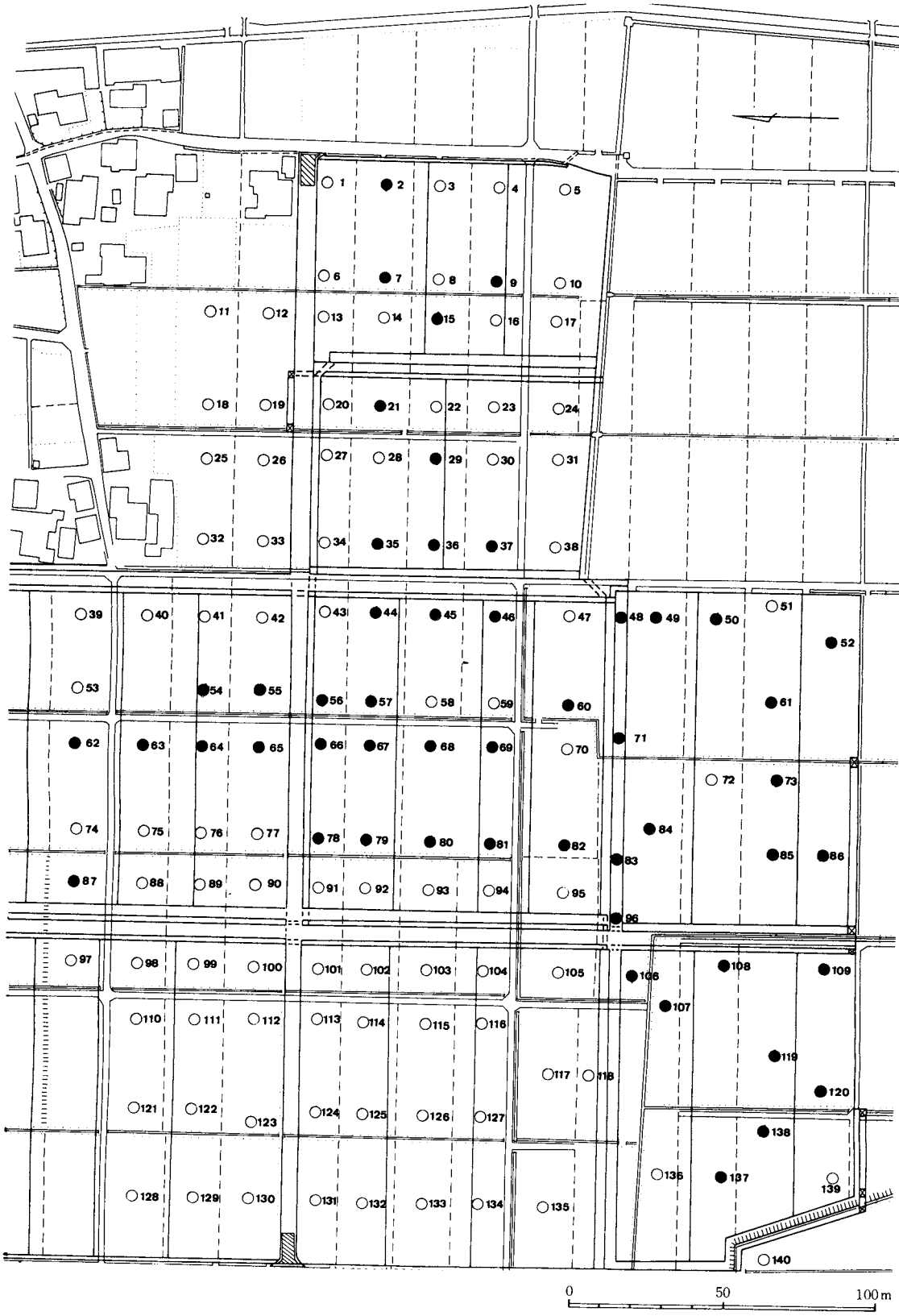
宮永坊の森遺跡の調査は、県営圃場整備事業旭地区宮永工区に係る緊急発掘調査によるものである。

当地は旭将軍義仲が平氏追撃の際に宿陣して軍勢を指揮した地と伝えられ、また天台宗極楽寺の宿坊跡との推測もなされている。“旭”および“坊の森”の地名はこれらの伝承に由来するものであり、明治５年に金属製仏器が出土した宮永町集落の南西部は室町期の“坊の森寺跡”として周知の遺跡となっている。

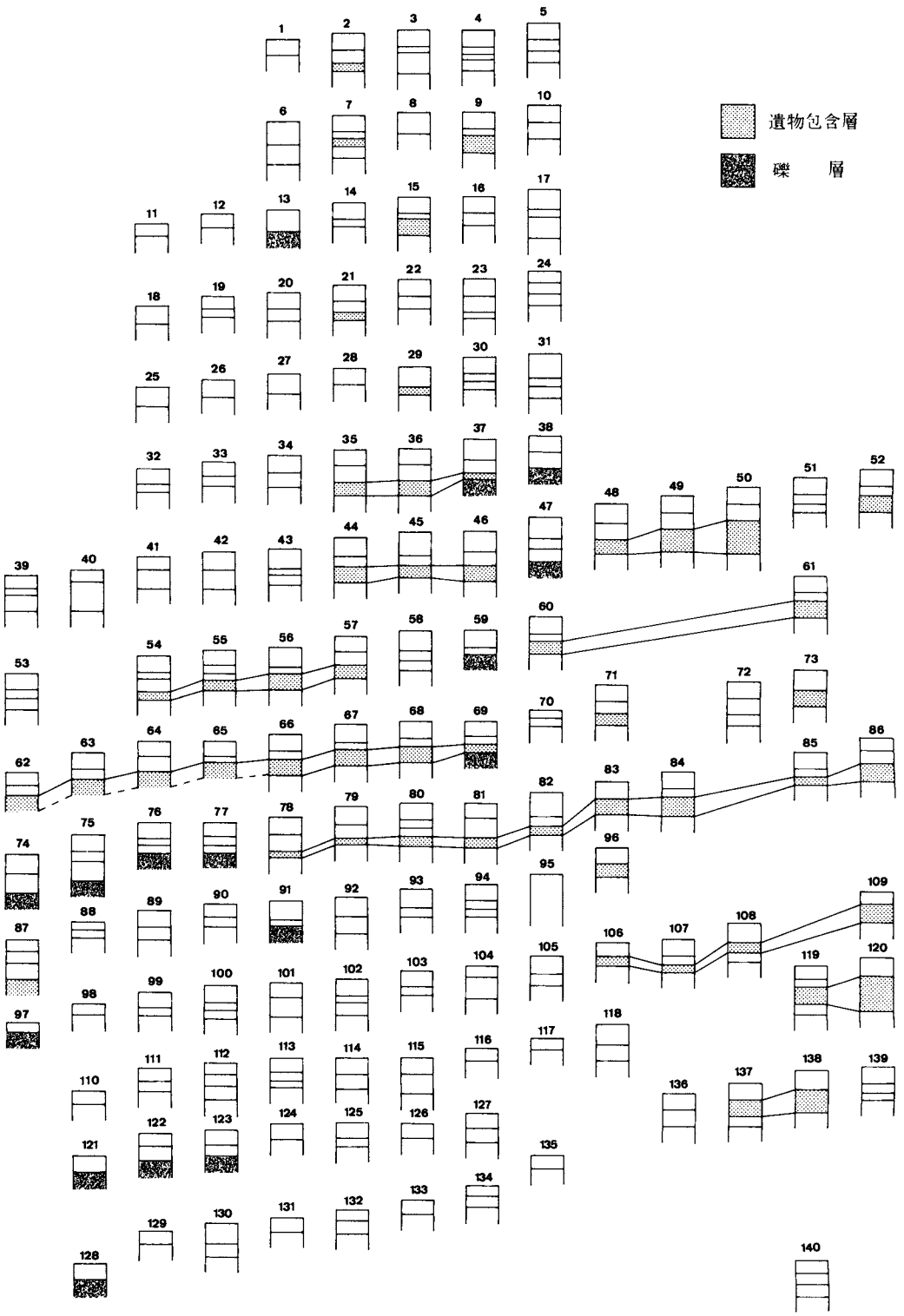
県立埋蔵文化財センターでは県営圃場整備事業において、毎年事業計画策定時に担当課である耕地整備課と打ち合わせを行い、分布調査箇所を決定している。本来分布調査は遺跡の有無を確認すると共に、工事中の遺跡の不時発見による混乱を防止するために行われるものであり、方法には現地踏査と試掘調査が一般的に用いられている。宮永工区は昭和61年度以降に施工が予定されていた区域であるが、分布調査依頼はそれより３年早く昭和58年９月７日に耕地整備課長より出されている。当センターではその依頼を受けて昭和58年11月21日～29日にかけて１回目の分布調査を実施している。調査対象面積は15ｈａであり、各田面に１×１ｍの試掘坑を設けて土層観察を行った。その結果16箇所の試掘坑で遺物包含層および遺構が確認され、坊の森寺跡の範囲がある程度押さえられている。加えて昭和60年10月に宮永市工区の分布調査が実施され、宮永町集落の南側にも遺跡の伸びがあることが確認された。その後当センターと松任土地改良事務所間でこの成果をもとにして遺跡の保存策が協議されたが、設計の段階で田面の一部と排水路部分に関して遺跡に影響を及ぼす可能性が出てきたため、再度の分布調査が昭和61年４月30日～５月１日にかけて実施された。調査方法は前回と同じ試掘坑を設けての土層観察であり、合計34箇所で遺物包含層を確認することができた。

第３、４図はその３回の分布調査結果をまとめたものである。調査区域は全体に南東部から北西部へ傾斜しており、田面高は10～12ｍを測る。遺物包含層は標高11ｍ前後に最も多く、主に宮永町集落の南西部に集中するようである。また明治45年の耕地整理の際かなりの切り盛りが行われたらしく、耕土直下に遺物包含層が見られる試掘坑も標高の高い南側を中心に何ケ所か認められた。当センターではこれらの結果を踏まえ、遺跡の存在する田面部分においては盛り土工法を用いると共に、耕土を除去する際には接地圧の少ないバック・ホーを使用することで遺跡の保存を図り、排水路部分に関してはやむを得ず発掘調査を行うこととした。現地調査は昭和61年６月16日～８月25日にかけて実施され、調査面積は約1,500㎡を測る。

なお遺跡の名称は、周知の坊の森寺跡に比べ範囲が南方向に広がったことと、分布調査によって室町期以外の弥生～古墳時代の遺物が得られたことから、坊の森寺跡を含む復合遺跡であるという認識で宮永坊の森遺跡とすることにした。



第３図　旭地区宮永工区分布調査位置図（●…遺物・包含層検出坑、S＝1/2,000）



第４図　分布調査試掘坑層序模式図

2．調査の経過（日誌抄）

6月16日（月）　曇

プレハブ設営。松任土地改良事務所で今後の日程を協議する。

6月19日（木）～21日（土）　曇

A～D区、バック・ホーによる表土除去作業

6月25日（水）　曇のち雨

A区遺構検出および掘り下げ作業開始。数条の溝とピット群が確認される。

6月28日（土）　曇時々晴

A区平面、断面図実測作業開始。

7月1日（火）～2日（水）　曇時々晴

A区3、4号溝掘り下げ作業。共に最上層に白黄色粘土層が認められる。全形は明らかではないが、方形周溝墓の可能性も考えられる。

7月3日（木）　曇

B区遺構検出および掘り下げ作業開始。

7月9日（水）　曇のち雨

A区1号井戸掘り下げ作業。覆土は全体に柔らかく、大変深い。

7月10日（木）　曇一時雨

B区平面、断面図実測作業開始。

7月15日（火）　曇時々雨

B区15号溝掘り下げ作業。壁面で石臼が検出される。

7月28日（月）　晴

C区遺構検出および掘り下げ作業開始。

7月30日（水）　晴

C区平面、断面図実測作業開始。

8月1日（金）　晴

C区21号溝掘り下げおよび一括遺物実測作業。

8月7日（木）　曇一時雨

C区1、2号住居跡掘り下げ作業開始。上層部分からも多量の遺物が検出される。

8月8日（金）　晴

D区遺構検出および掘り下げ作業開始。

8月12日（火）　晴時々曇

D区　平面、断面図実測作業開始。

8月25日（月）　晴

発掘機材搬出作業。本日をもって宮永坊の森遺跡の現地調査を終了する。

宮永坊の森遺跡の現地作業においては、6～8月の暑いさなか多くの人々が参加され、終始和やかな雰囲気の中で調査を行うことができた。以下ご芳名を記して感謝申し上げる次第である。

宮永町　・得田隆、井上利雄、勝田哲夫、前田慧、森井道夫、井上秀喜、宮本紀代子、前田文子、西本百合子、手井芙美子

宮永市町・津田作二、作田信吉、舟渡とし、松江久江、宮川美智子、前田一枝、中川千代子

中新保町・林歆子、八田町・宮西康信、成町・宮川茂雄、吉田謙三、東一番町・宮本直哉

十三間町・都築信昭、飯田茂幸、桂町・能村知恵、春日町・小賀清隆、高尾町・番匠信夫

Ⅲ　遺構と遺物

1．概　要

宮永坊の森遺跡の発掘調査は昭和61年（1986年）の６～８月にかけて行われた。調査範囲は数度の分布調査によって確認された集落の南西部を中心としている。調査幅は２ｍ前後で、排水路によって遺跡が破壊される部分のみを対象としている。調査面積は約1,500㎡を測る。調査区は集落に近い東側からＡ区（南北方向）、Ｂ区（東西方向）、Ｃ区（南北方向）、Ｄ区（東西方向）とした。また各調査区内のグリッドは10ｍ単位で設定したが、農道で区切られた場合はその限りではない。なおＡ、Ｃ区では北から、Ｂ、Ｄ区では東から原則として遺物の出土した遺構に番号を付けていった。現況は水田であり、水捌けは良好。地山面は黄色系、遺構は灰褐色系の粘質土であることが多く、遺構の検出および掘り下げは順調に進められた。

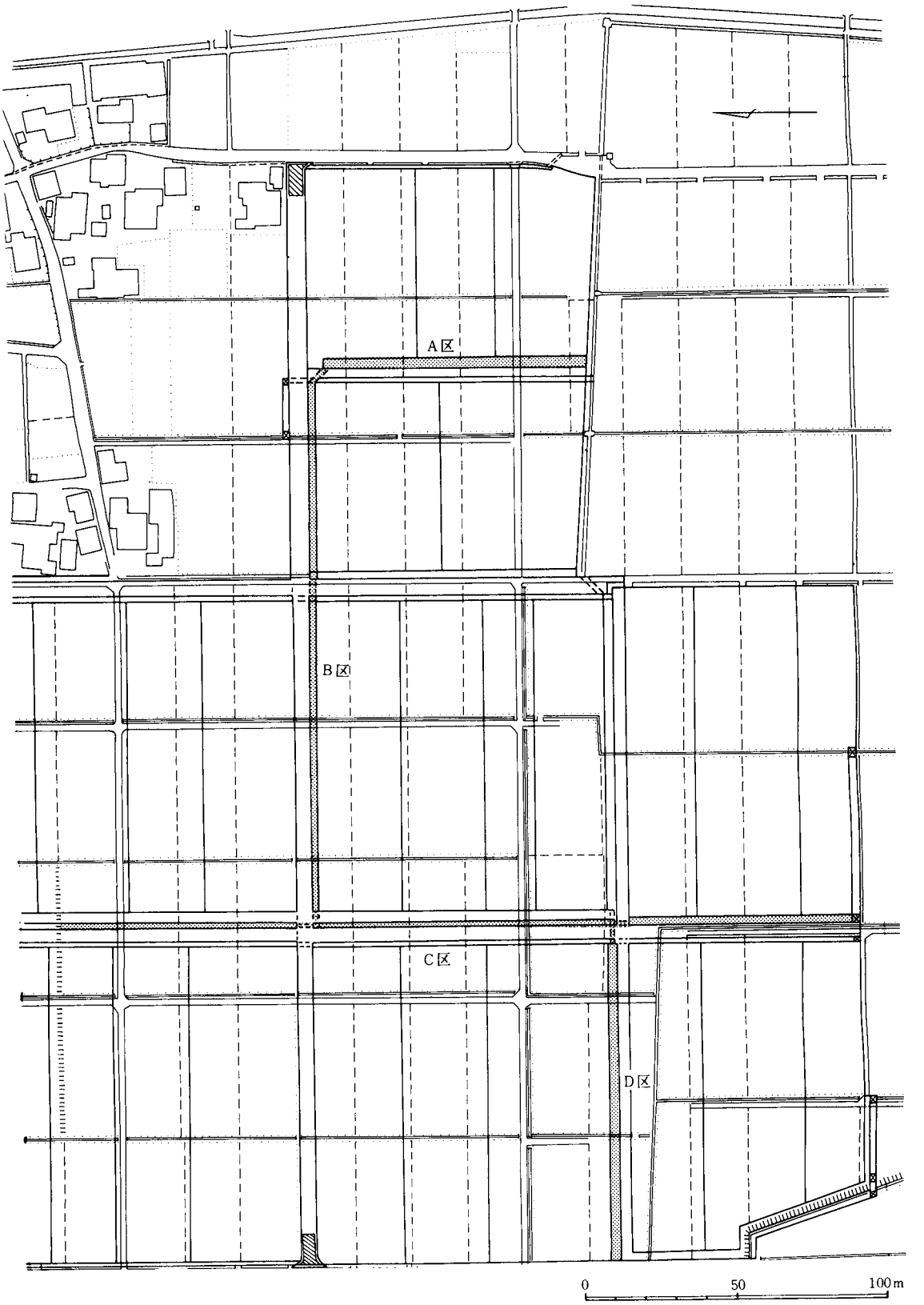
Ａ区からは１～３号土坑、１～９号溝、１号井戸、ピット１等が検出されている。土層は基本的には４層で、上から耕土、床土、淡黄灰色粘質土、濁灰色粘質土（遺物包含層）となっている。調査区地山面の標高は最北端の１区で11.50ｍ、最南端の８区で11.56ｍを測り、ほぼ水平であることが窺われる。

Ｂ区からは４、５号土坑、10～18号溝、２号井戸等が検出されている。土層は３層からなることが多く、上から耕土、床土、濁灰色粘質土（遺物包含層）となっている。地山面の標高は最東端の１区で11.50ｍ、最西端の20区で10.80ｍを測り、東から西に向かって約70㎝の比高差で傾斜していることが分かる。また西側の18～20区は礫層に被われている。

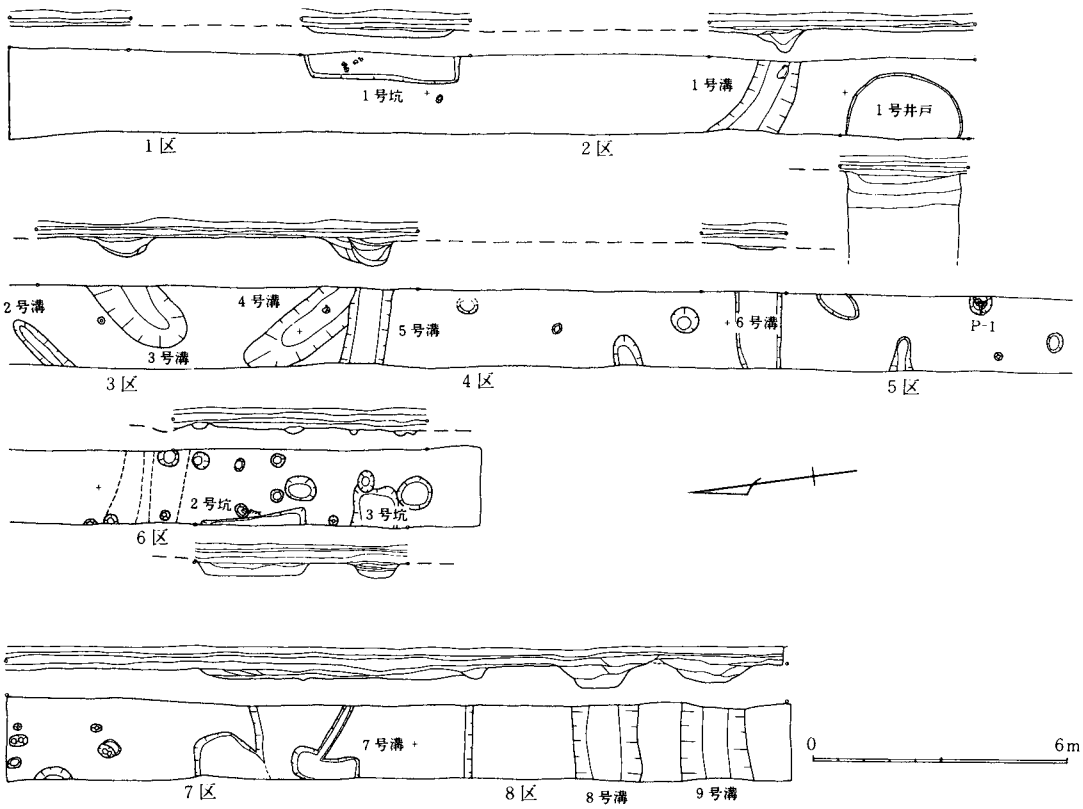
Ｃ区からは６～９号土坑、19～25号溝、１、２号住居跡、ピット２～24等が検出されている。土層はＢ区と同じように３層で、上から耕土、床土、濁灰色粘質土（遺物包含層）となっている。当区はＢ区との接合地点である９区より実測を始めているが、８区以北は重機による表土除去の際、地山が一面の礫層であることが確認されている。この礫層はＢ－18～20区に繋がるものであろう。地山面の標高は９区で10.80ｍ、最南端の25区で12.40ｍを測り、旧地形で実に1.6ｍもの落差が認められる。

Ｄ区からは10、11号土坑、26～39号溝、２号住居跡、ピット25～38等が検出されている。土層は２層からなることが多く、上から耕土、床土となっている。これはおそらく、以前の耕地整理による包含層の削平を示しているのであろう。地山面の標高は最東端の１区で11.40ｍ、最西端の10区で10.80ｍを測り、60㎝の比高差が認められる。また７～10区はほとんど礫に被われている。

出土遺物は弥生時代前期～後期、古墳時代前期、室町時代のものを幅広く包含しており、周知の遺跡として室町期に位置付けられている坊の森寺跡の存在を再確認することになった。ただ遺物量では古墳時代のものが最も多く、遺跡の主体は弥生～古墳時代にあたると考えたほうが妥当なのであろう。

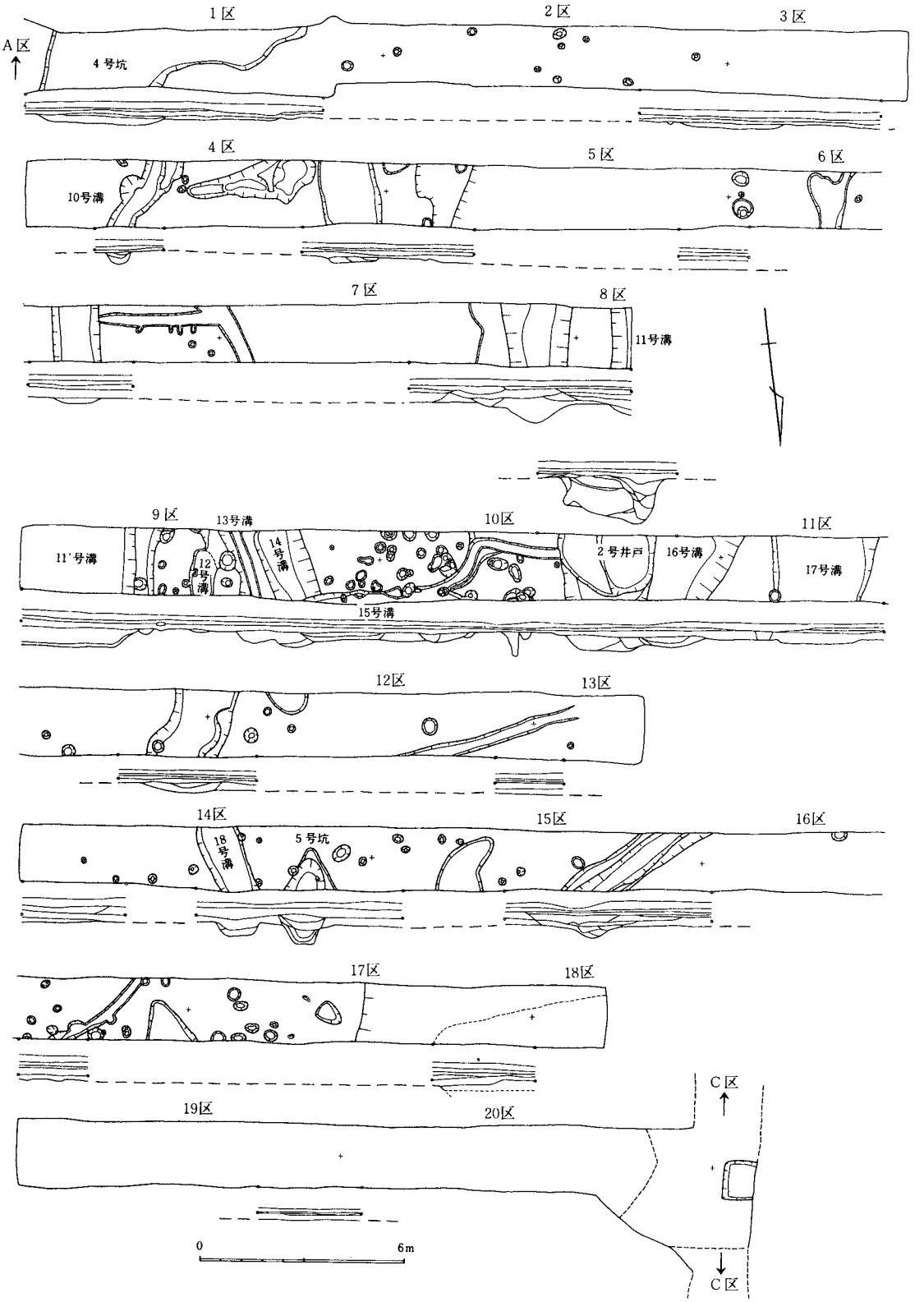


第５図　調査区グリッド位置図（Ｓ＝1/2,000）

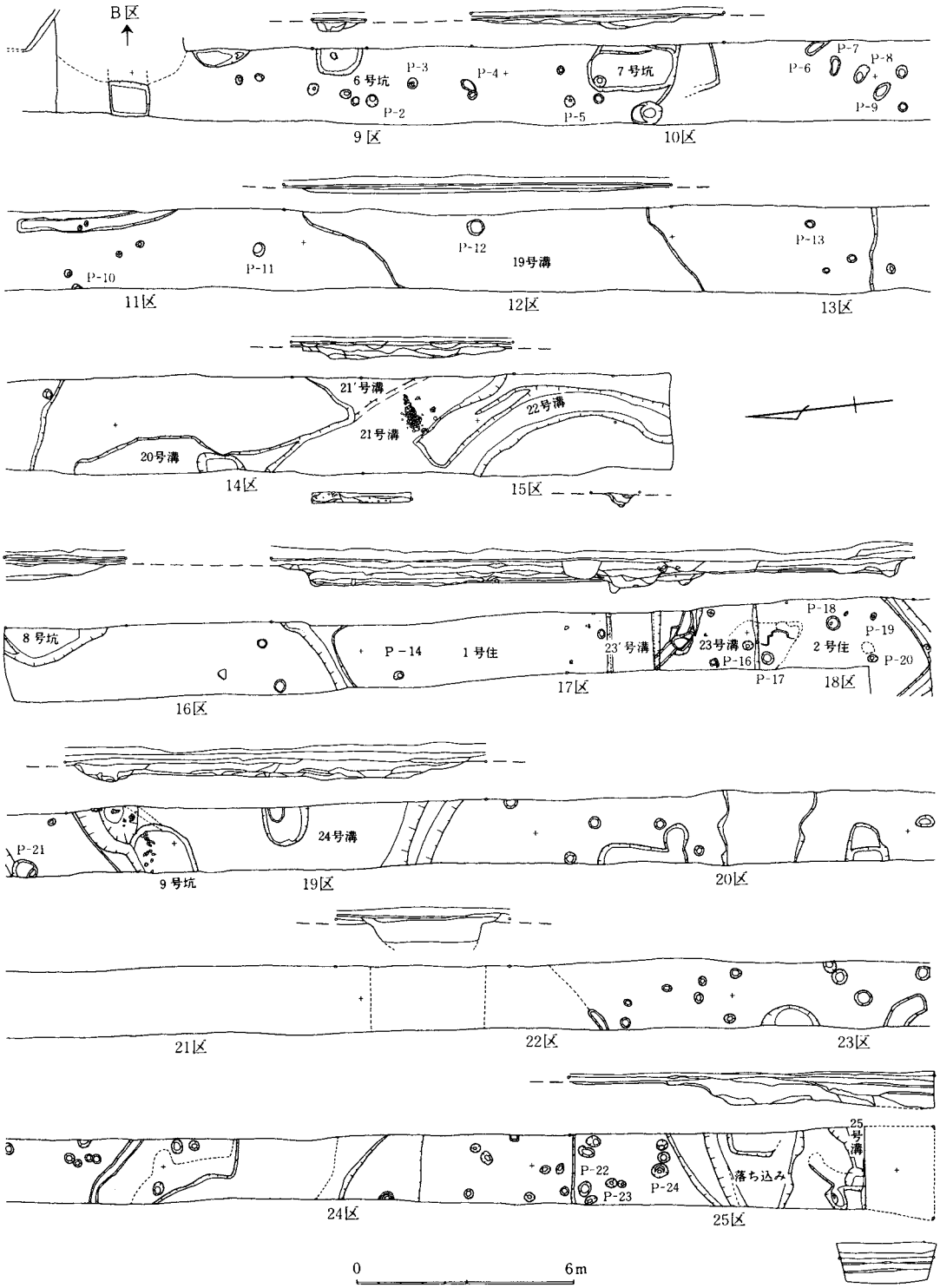


第6図　A区全体図（S＝1/180）

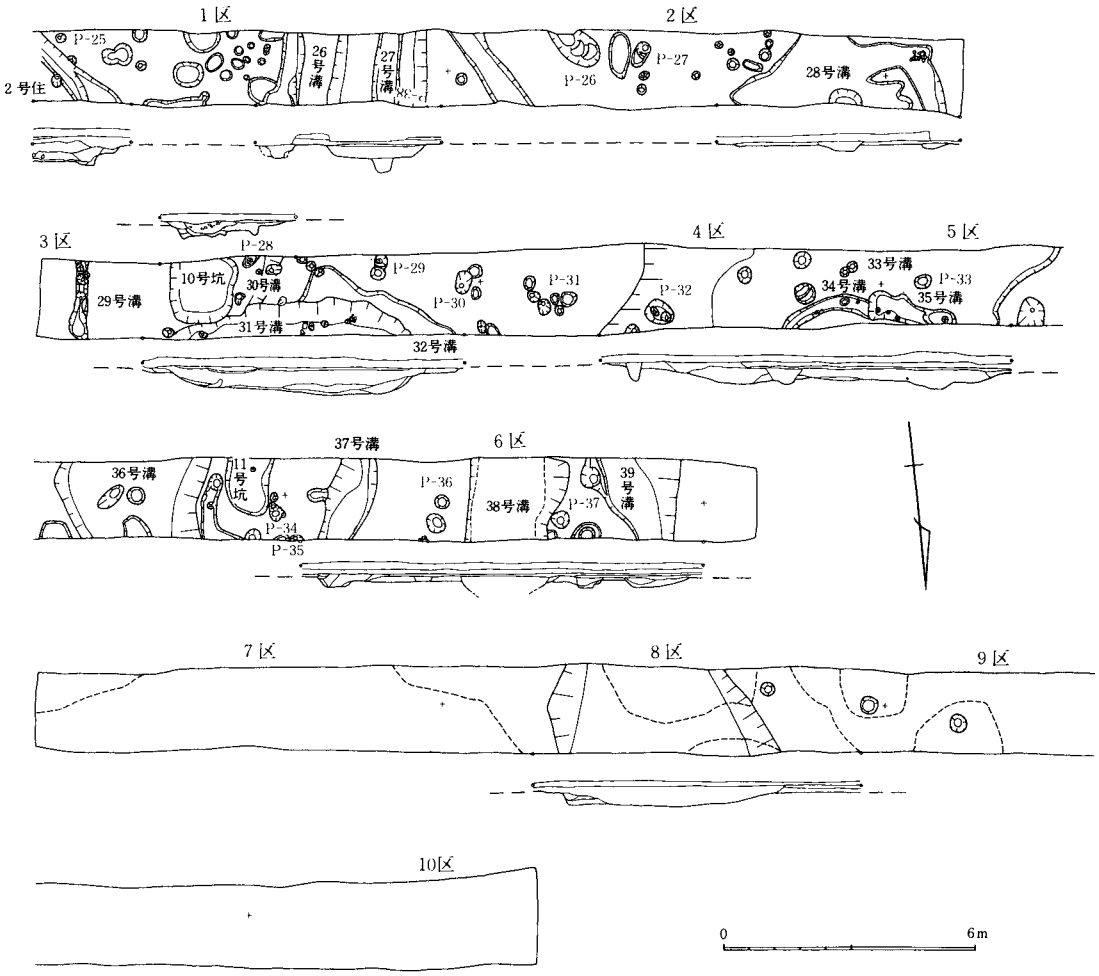
A区土層断面実測作業状況



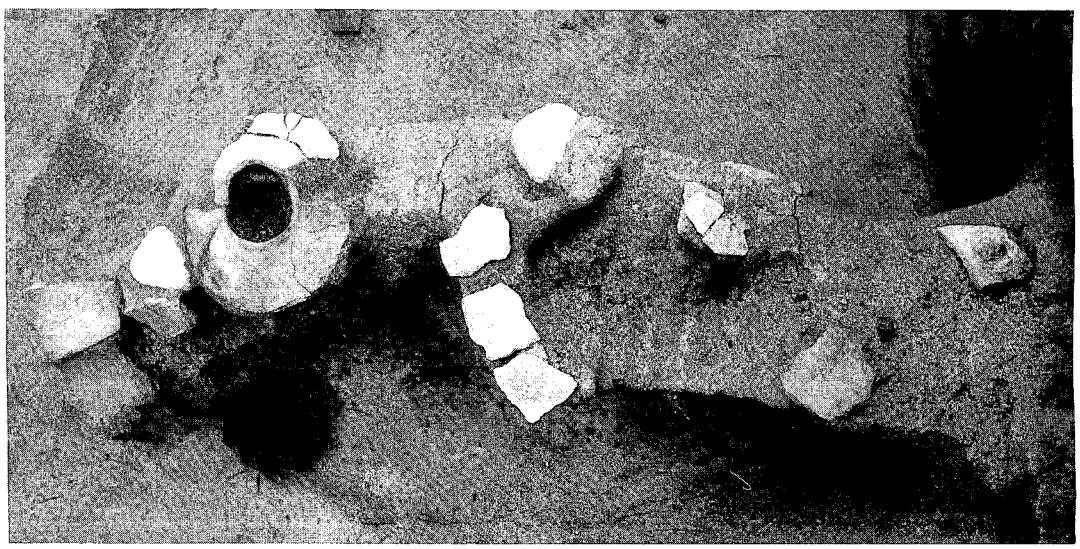
第７図　Ｂ区全体図（Ｓ＝1/180）



第8図　C区全体図(S＝1/180)



第９図　Ｄ区全体図（Ｓ＝1/180）



Ｃ区24号溝遺物出土状況

2．遺構と遺物

遺構、遺物は土坑、溝、住居跡、井戸、ピット、包含層の順で説明し、出土遺物などにより時期の推定できる遺構は、時代区分も付け加える。

A区の遺構と遺物

1号土坑（第10、13－5図・図版6、35）

B区に最も近いA－1、2区に位置する。調査幅に制限があるため、全形を知ることはできないが、南北に軸を持つ方形の土坑と思われ、長軸3.7m、深さは最深部で20cmを測る。遺構掘り込みレベルは約11.5mである。5は全体に摩耗が著しい底部片であり、調整は不明。胎土には1～2mm大の砂粒およびシャーモットが含まれる。その他の遺物は細片が多いため実測することはできなかったが、土坑北側の床面近くから口縁および底部を除く38点の同一個体片が検出されている。焼成は柔らかく、胎土中には砂粒を多く含み海綿骨片も少量認められる。色調は橙色系で、内外面の調整は摩耗のために確認できない。またB－1区4号土坑出土の壺（第18－1図）に類似する口縁部が1片、器種不明の土師器15片が出土している。土坑の時期としては、弥生時代中期頃の可能性が考えられる。

2号土坑（第11図・図版11）

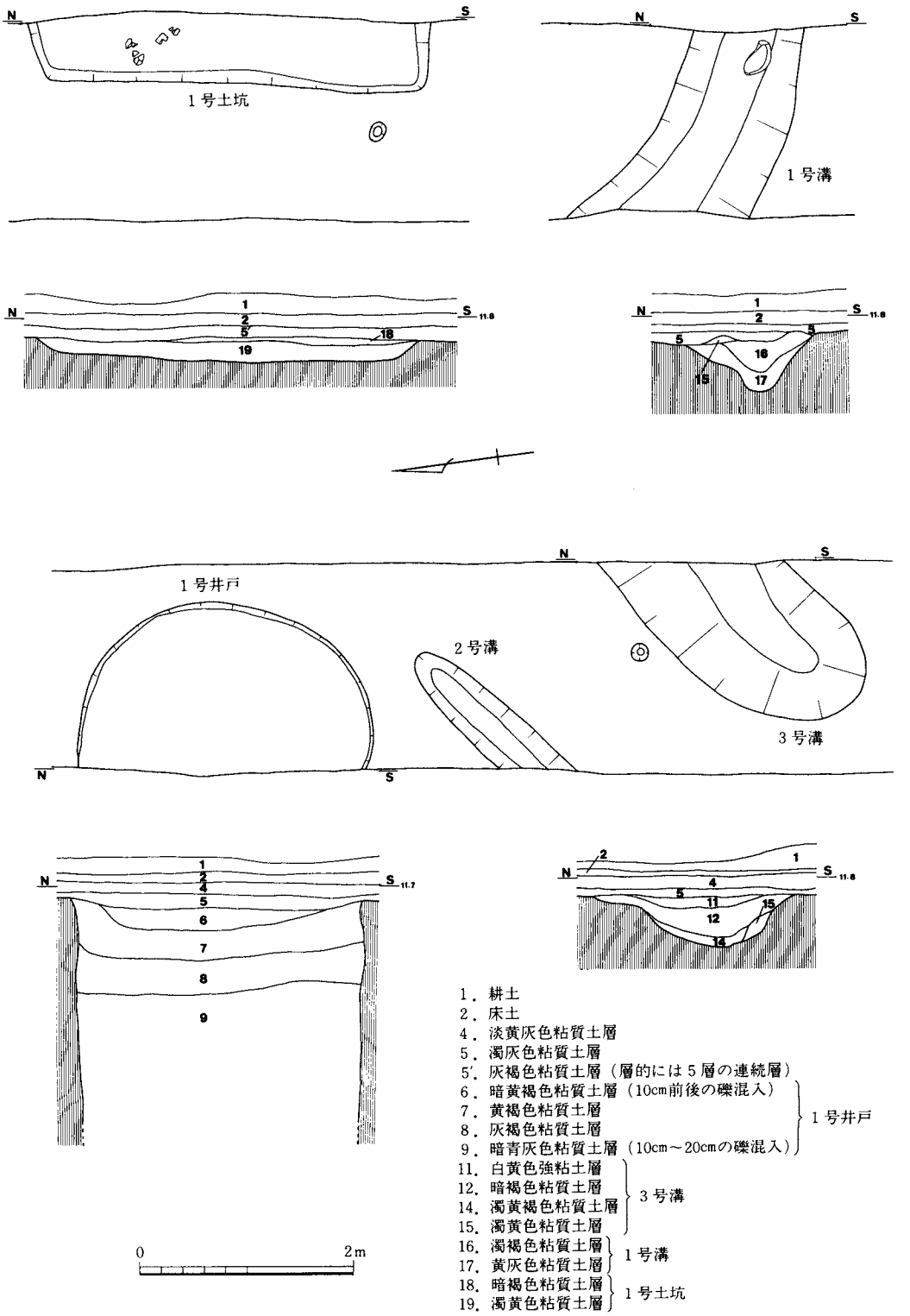
調査区に見える範囲は僅かだが、1号土坑のように南北に軸を持つ方形の土坑と思われる。深さは30cmを測り、下層には10～15cm大の礫の混入が目立つ。周辺にはピットが点在するが、2号土坑との関連は不明である。遺物は2か所に面取り部分を残したレンガ状の土製品が1点出土している。一見石製品にも見えるが、砂粒を多く含み表面は加熱のため黒褐色に変色している。時期は不明。

3号土坑（第11図・図版11）

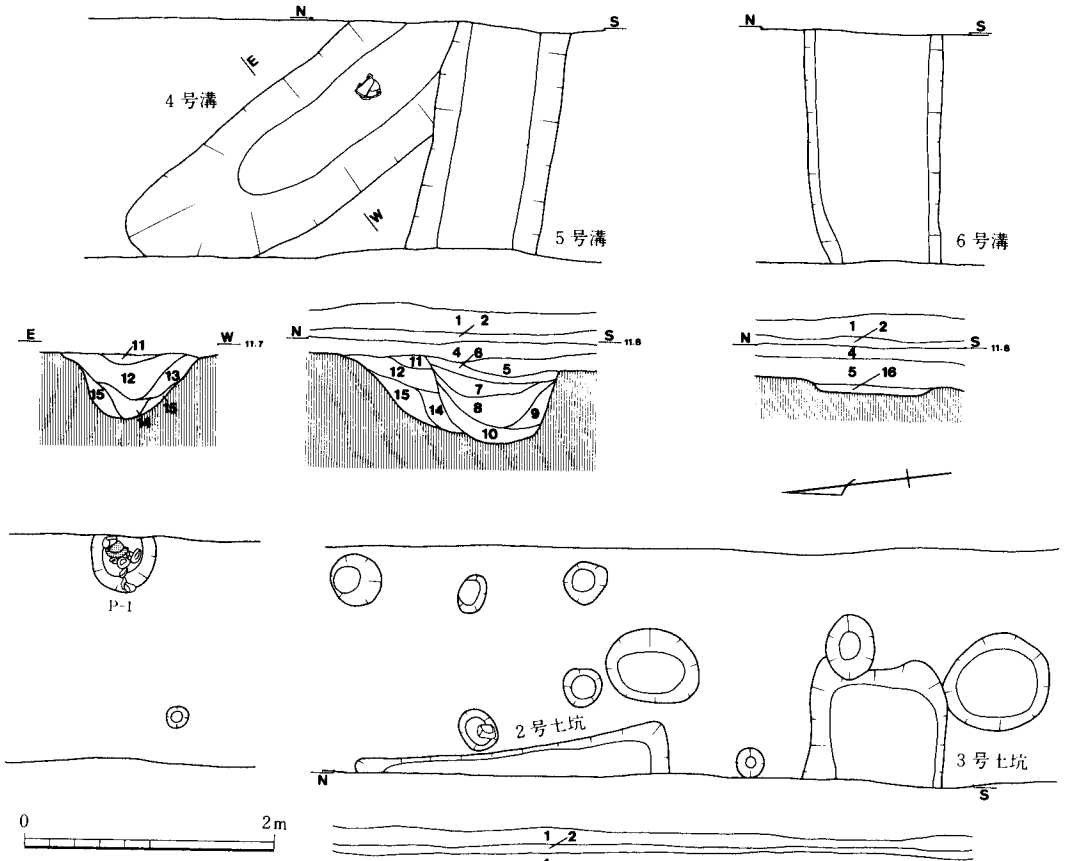
全形を知ることはできないが、2号土坑の南に位置する方形状の土坑と思われる。幅は約1m、深さは最深部で35cmを測る。出土遺物として、外面が灰褐色を呈する越前焼の破片4点を検出しているが、おそらく同一個体の甕片と思われる。また土坑の南側に接する径80cm、深さ50cmを測るピットからは、長さ3cm、幅1cm余りの断面三角形を呈する骨片が出土している。何の骨かは定かではないが、白く乾燥しており、火葬骨の可能性も捨てきれない。なお土坑の年代は中世に比定されるが、詳しい時期は分からない。

1号溝（第10図・図版7）

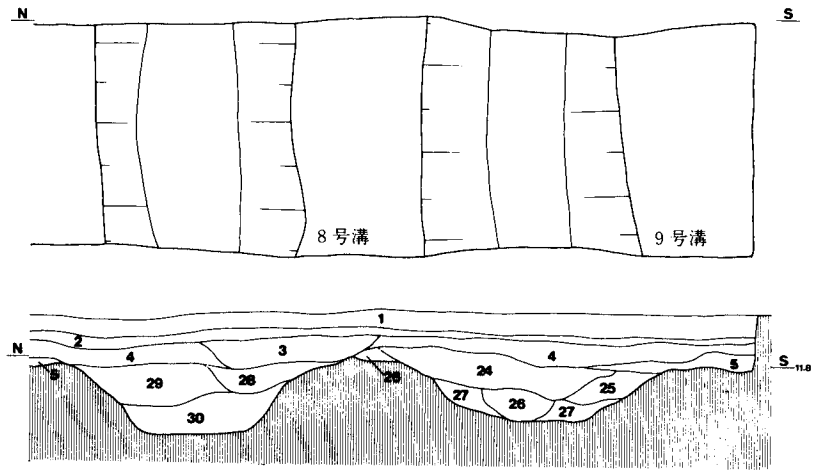
A－2区に位置する。幅および深さは調査区東側で1m、35cm、西側で1.7m、60cmを測り、西側に傾斜した溝であることが分かる。層序は2層で、断面は緩いV字型を呈している。出土遺物はくの字口縁を持つ土師器甕片1点と、器種不明の土師器片10点が確認されているがいずれも細片である。



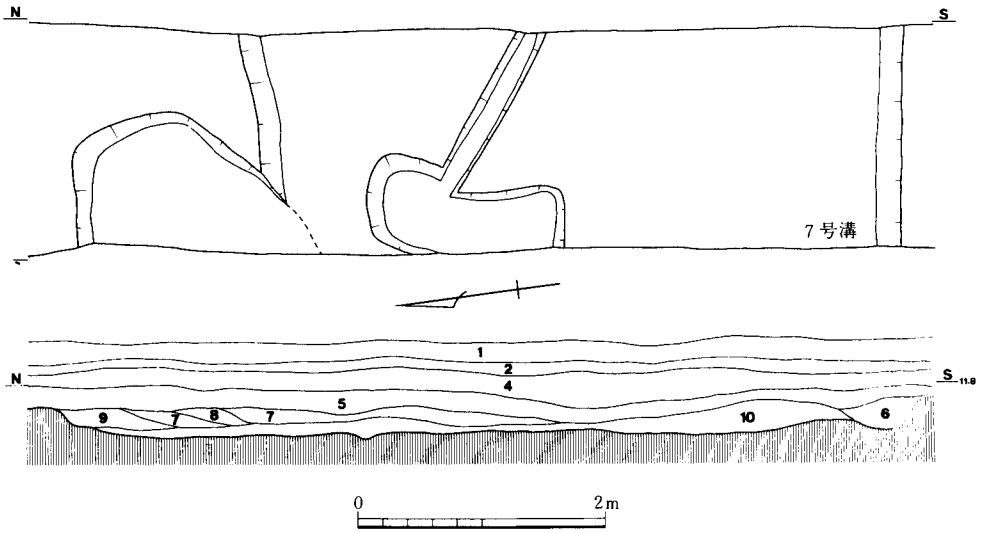
第10図　A区遺構実測図1（S＝1/60）



1．耕土
2．床土
3．オリーブ灰色粘質砂層
4．淡黄灰色粘質土層
5．濁灰色粘質土層
6．黄灰色粘質土層
7．濁黄灰色粘質土層
8．濁灰色粘質土層
9．濁灰黄色粘質土層
10．暗灰色粘質土層
} 5 号溝
11．白黄色強粘土層
12．暗褐色粘質土層
13．濁黄灰色粘質土層
14．濁黄褐色粘質土層
15．濁黄色粘質土層
} 4 号溝
16．灰黄色粘質土層　－6 号溝
17．濁灰色粘質土層（炭粒混入）
18．暗灰色粘質土層（10～15cmの礫混入）
} 2 号土坑
19．黄灰色粘質土層
20．灰色粘質土層
21．黄色粘質土層
22．濁黄色粘質土層
23．濁灰黄色粘質土層
} 3 号土坑
24．濁黄色強粘土層
25．暗灰褐色強粘土層
26．灰褐色礫層
27．オリーブ灰色強粘土層
} 9 号溝
28．濁白灰色粘質砂層
29．暗灰色粘土層
30．暗灰色粘質土層
} 8 号溝



第11図　A区遺構実測図 2（S＝1/60）



1．耕土　2．床土　4．淡黄灰色粘質土層　5．濁灰色粘質土層　6．濁褐色礫層　7．濁黄色粘土質（地山質）　8．褐色粘質土層
8．濁灰褐色粘質土層　10．濁黄褐色粘質土層（地山質）　6～10・7号溝

第12図　A区遺構実測図3（S＝1/60）

2号溝（第10図）

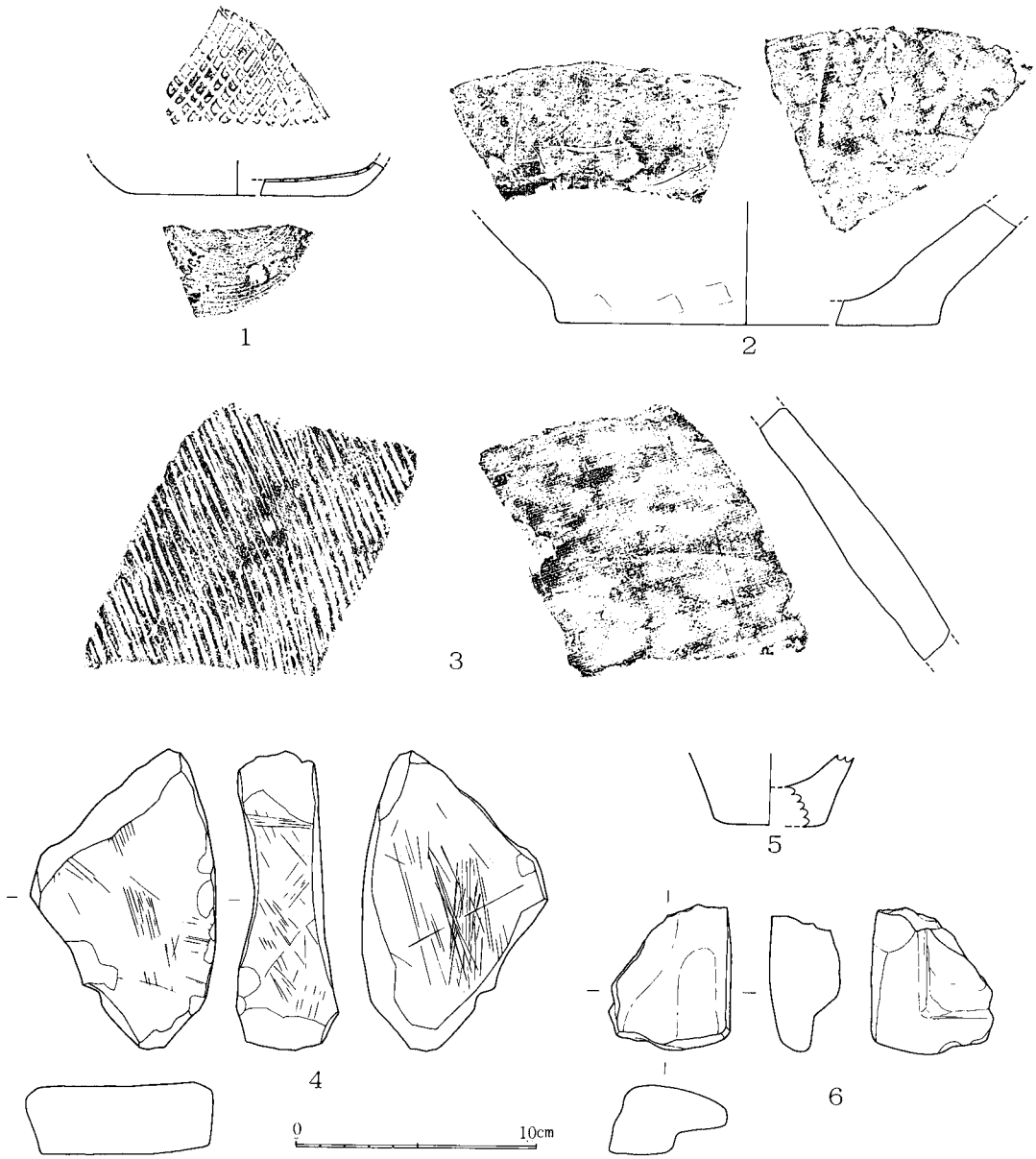
1号井戸の南に位置する幅50cm程の溝である。深さは最深部で20cmを測る。遺物は外面にハケ調整を残した土師器細片が1点出土しているだけである。

3号溝（第10図・図版9）

幅1.3m、深さ40cm近くを測り、南側の4号溝と対をなすように並んでいる。断面は半円形を呈し、層はレンズ状に堆積している。その中でも最上層の11は特徴的であり、白黄色の強粘土層を覆土としている。現状では後世の削平を受けて溝の中央部だけに残っているが、本来は溝全体を覆うような形になっていたのかもしれない。なお出土遺物破片数は12点あるがいずれも土師器状の細片であり、器種が分かるのは小型の鉢片と思われるもの1点だけである。

4号溝（第11、14図－1・図版10、35）

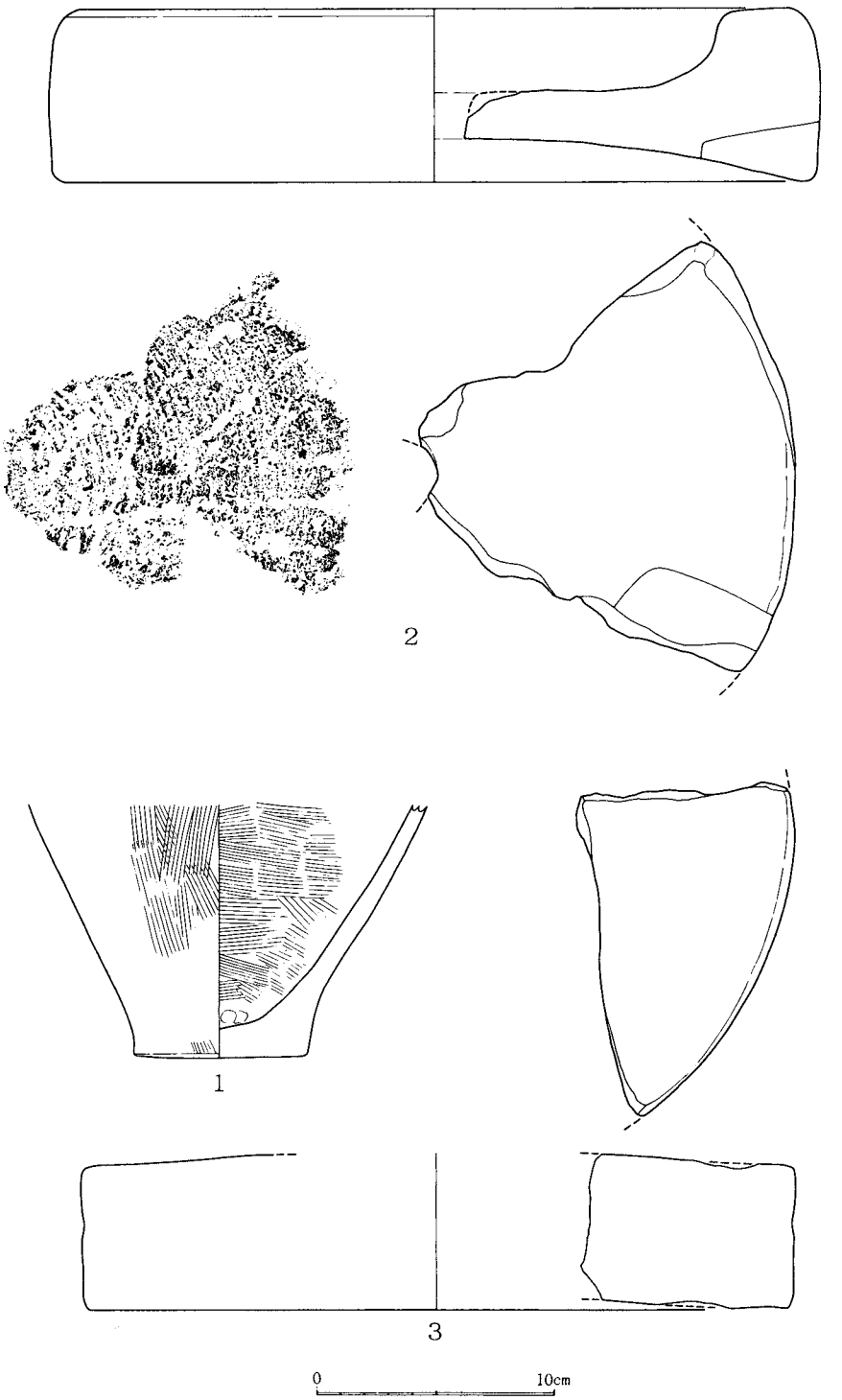
南に接する5号溝に切られる遺構であり、幅1.1m、深さは東側の最深部で60cmを測る。層序は3号溝とほぼ等しく、最上層にはやはり白黄色の強粘土層が認められる。遺構の全体像は不明であるが、3、4号溝の位置関係からは、方形周溝墓の可能性も考えられる。1は下層から出土した立ち上がりの強い底部である。外面は縦方向のハケを施し、体部下半にはナデを加えている。内面は螺旋状にハケ調整が入る。胎土中には1mm以下の砂粒を多量に、また2mm大の小石を少量含む。なお体部から底部にかけて内外面に黒斑が見られる。その他にも底径3.3cmを測る底部細片1点、器種不明の土師器39片、また白黄色層からは口唇部にキザミ目を持つ甕の口縁部片が1点出土している。おそらく3、4号溝は同時期のものであり、弥生時代中期頃の年代を与えることができよう。



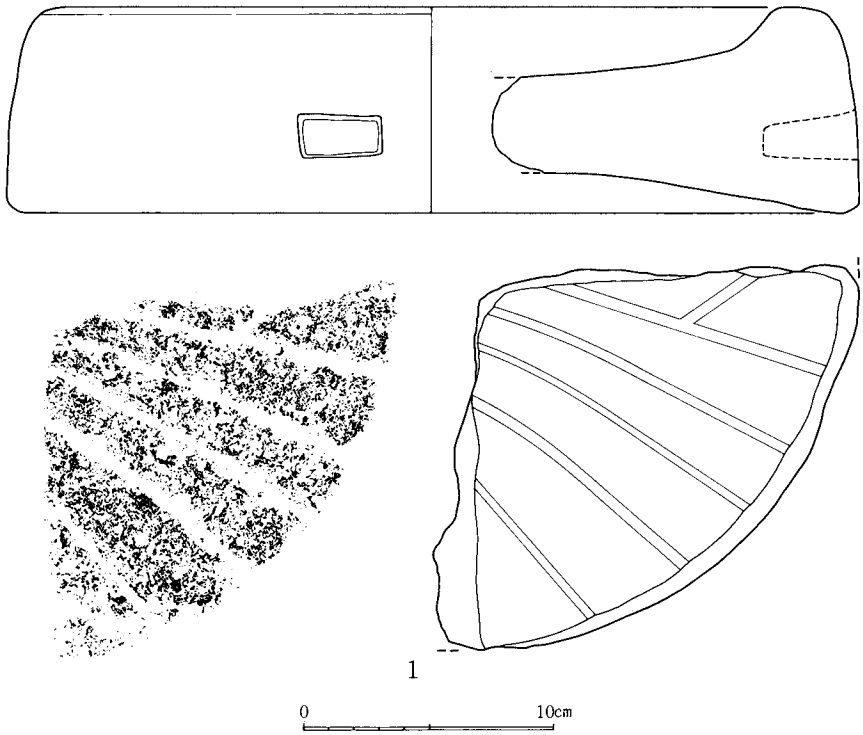
第13図　A区1号土坑(5)、1号井戸(1～4)、包含層(6)出土遺物実測図(S＝1/3)

5号溝（第11図・図版10）

4号溝が機能を失った後に構築された遺構と思われる。幅1m、深さ60cmを測るU字型のしっかりとした溝である。しかし遺物量は4号溝に比べ極端に少なく、器種不明の土師器細片がわずかに2点出土しているにすぎない。



第14図　A区4号溝(1)、7号溝(2、3)出土遺物実測図(S＝1/3)



第15図　A区P-1出土遺物実測図(S＝1/3)

6号溝（第11図）

A－5区に位置する単層の溝であり、幅1m、深さ5cm程度を測る。遺物は外面赤褐色を呈する越前焼の甕の一部と思われる細片が1点出土している。

7号溝（第12、14－2、3図・図版35）

幅5.2m、深さ20cm前後の溝状遺構であるが、北側と中央部に溝よりやや深い土坑状の落ち込みがあり、実際の溝として機能していたかどうかは不明である。出土遺物では火山礫凝灰岩質の粉挽き臼が2点出土している。2は復元径29.5cmを測る上臼である。上部のくぼみ、下部のふくみはそれぞれ3.4cm、1.8cmとやや深い。側面には挽き木を入れる方形の穴が穿たれていた痕跡が残るが、下面の擦り合わせ部に接触するほどであり、また目跡も僅かに見えるだけである。相当使い込まれた後に廃棄されたのであろう。3は下臼であるが、復元径も目の擦り減り具合も1に近く、おそらく一組の製品として使用されていたものと思われる。

8号溝（第11図・図版12）

A－8区に位置する。幅1.6m、深さ50cmを測る。全体に灰色の強い覆土であり、一部に粘質砂も混じる。遺物は細片ばかりであるが数点出土している。まず越前焼片が4点。赤褐色から灰褐色まで4片とも色調は異なるが、いずれも胎土が層状を成している。珠州焼片1点。外

面の打圧具幅は3㎝に9本程度とやや粗い。胎土中には黒細粒と海綿骨片が見られる。また内外面に褐色釉を施した天目碗の一部と思われる破片も1点確認されている。

9号溝（第11図・図版13）

8号溝に平行して流れるA区最南端の溝であり、幅1.6m、深さ40㎝を測る。遺物は須恵器、土師器の細片がそれぞれ1点ずつ出土している。8号溝との関係は不明である。

1号井戸（第10、13－1～4図・図版8、35）

A－3区に位置する中世の井戸である。円形に近く、径2.7mを測る。断面の形状は筒型。そのために2m近く掘り下げた時点で壁が崩落し、完掘することはできなかった。覆土は全体に締まりがなく、下層部分には10～20㎝の礫が混入していたため、廃棄の際意図的に埋められた可能性も考えられる。1は瀬戸系陶器卸し皿の底部である。内面には粗い格子状の切り込みが入り、底部に糸切り痕を残す。2は加賀焼の甕と思われる底部片。内外面共に自然釉の痕跡は見られず、胎土は粘り気の強そうな白灰色を呈する。また内側面には、成形痕と思われる縦に走る筋状の圧痕がほぼ等間隔に認められる。3は珠洲焼の甕胴部片である。全体に角が丸く擦り減っており、打圧具幅は3㎝で7～8本。胎土はぼそぼそで締まりがなく、海綿骨片を多量に含んでいる。4は現形が扇型を呈する砥石である。表裏に仕様面があり、凹レンズ状に擦り減っている様子がよく分かる。他に土師器の細片が7点出土しているが、年代を確定できるものはない。

ピット1（第11、15－1図・図版11・36）

A－5区に位置する。径約50㎝、深さ20㎝を測る。ピット内からは円礫に混じって火山礫凝灰岩質の石臼片が1点出土している。1は原型の約¼を残す粉挽上臼である。側面にはL字型の挽き木を打ち込む穴が台形状に穿たれている。目の刻みははっきりと認められるが、どの目もまっすぐではなくやや歪んでいる。柱の根固めか、礎石用に廃棄転用されたものであろう。

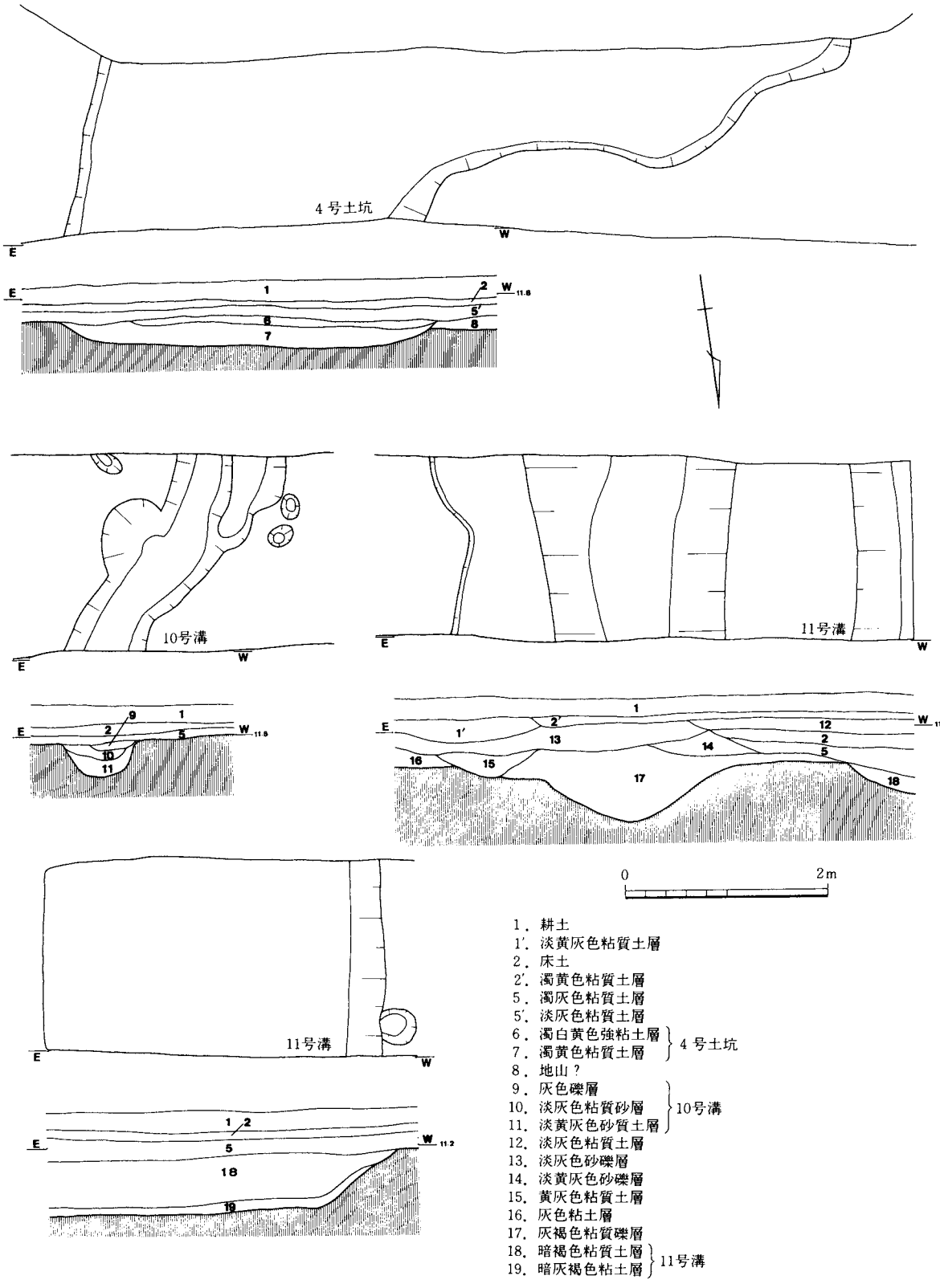
包含層（第13－6図・図版35）

A区は包含層からの出土遺物は少なく、土師器および中世陶器の細片が僅かに確認されたにすぎない。6は暖房用具として使用された行火の蓋である。きめの細かい凝灰岩を用いており、四隅の一角を残している。

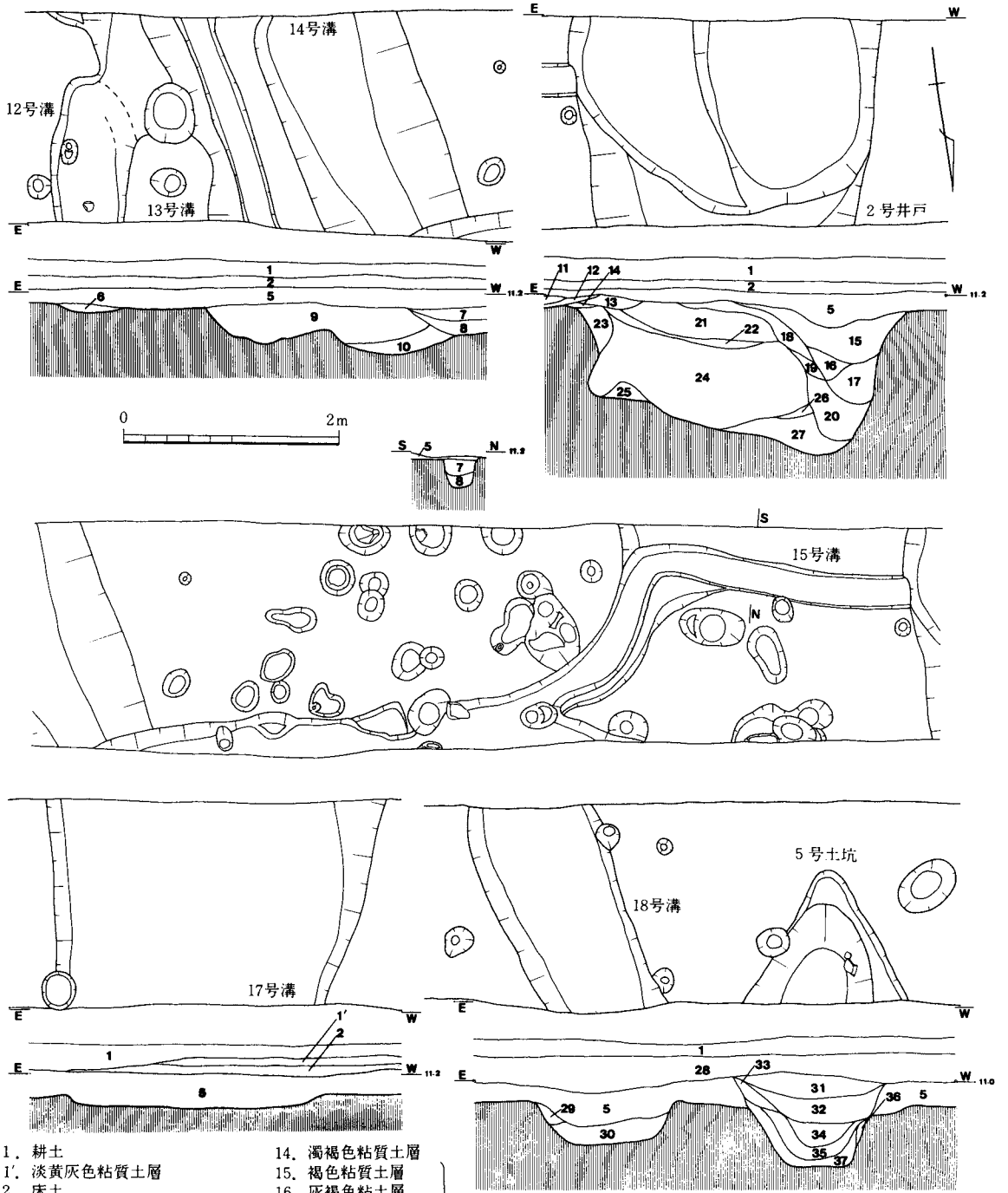
B区の遺構と遺物

4号土坑（第16、18図・図版14、36）

A区に最も近いB－1区に位置する。形状は不定形で、土坑と言うよりも溝状遺構に近い。覆土は上層に濁白黄色強粘土層を持ち、A区の3、4号溝の覆土とも共通性があるようである。遺物の量は多いがほとんどが細片で、形となるものは少ない。1は広口壷である。口唇部にはクシ状具による刺突を持ち、胴部には左周りの簾状文が施されている。調整は全体に摩耗しており不明。胎土には1～4㎜大の砂粒を多量に含んでいる。2も1と同様の広口壺である。口

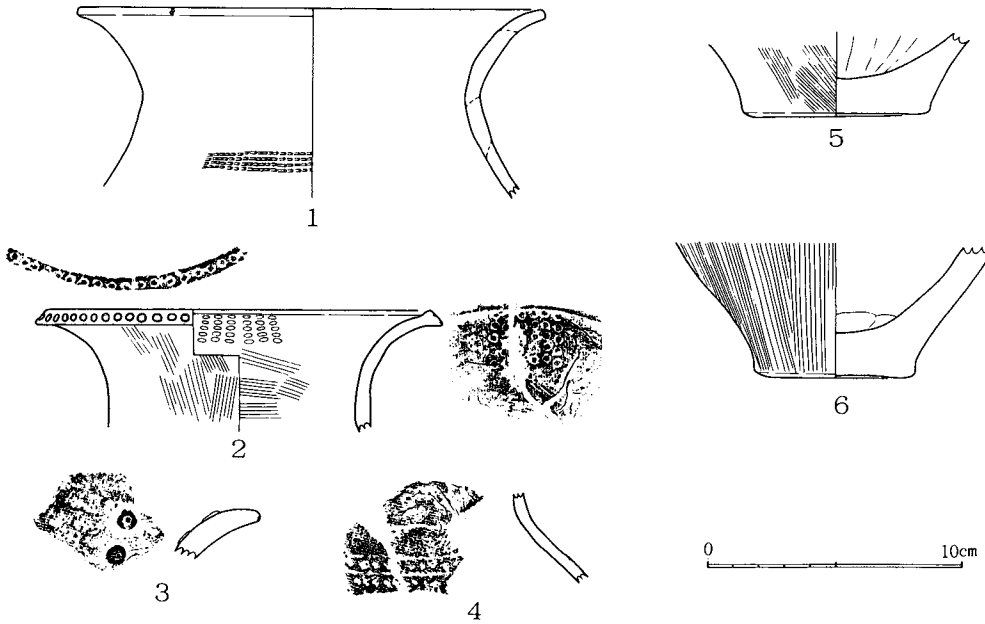


第16図　B区遺構実測図1（S＝1/60）



1．耕土
1′．淡黄灰色粘質土層
2．床土
5．褐灰色粘質土層
6．黄灰色粘質土層　－12号溝
7．黄褐色粘質土層
8．暗灰褐色粘質土層　15号溝
9．暗褐色粘質土層　－13号溝
10．暗黄褐色粘質土層　－14号溝
11．濁黄灰色粘質土層
12．黄色粘質土層
13．灰褐色粘質土層
14．濁褐色粘質土層
15．褐色粘質土層
16．灰褐色粘土層
17．暗灰色粘土層
18．濁黄褐色粘質土層
19．黄色粘質土層
20．濁黄灰色粘土層
21．褐色粘質土層
22．暗黄褐色粘質土層
23．黄色粘質土層
24．褐色粘質土層
25．黄褐色粘質土層
26．濁黄褐色粘質土層
27．暗灰色粘土層　2号井戸
28．暗灰褐色粘質土層
29．黄褐色粘質土層
30．暗灰色粘質土層　18号溝
31．濁白黄色粘土層
32．暗褐色粘質土層
33．黄褐色粘質土層
34．黄灰色粘質土層
35．濁黄色粘質土層
36．黄褐色粘質土層
37．暗灰褐色粘質土層　5号土坑

第17図　B区遺構実測図2（S＝1/60）



第18図　B区4号土坑出土土器実測図(S＝1/3)

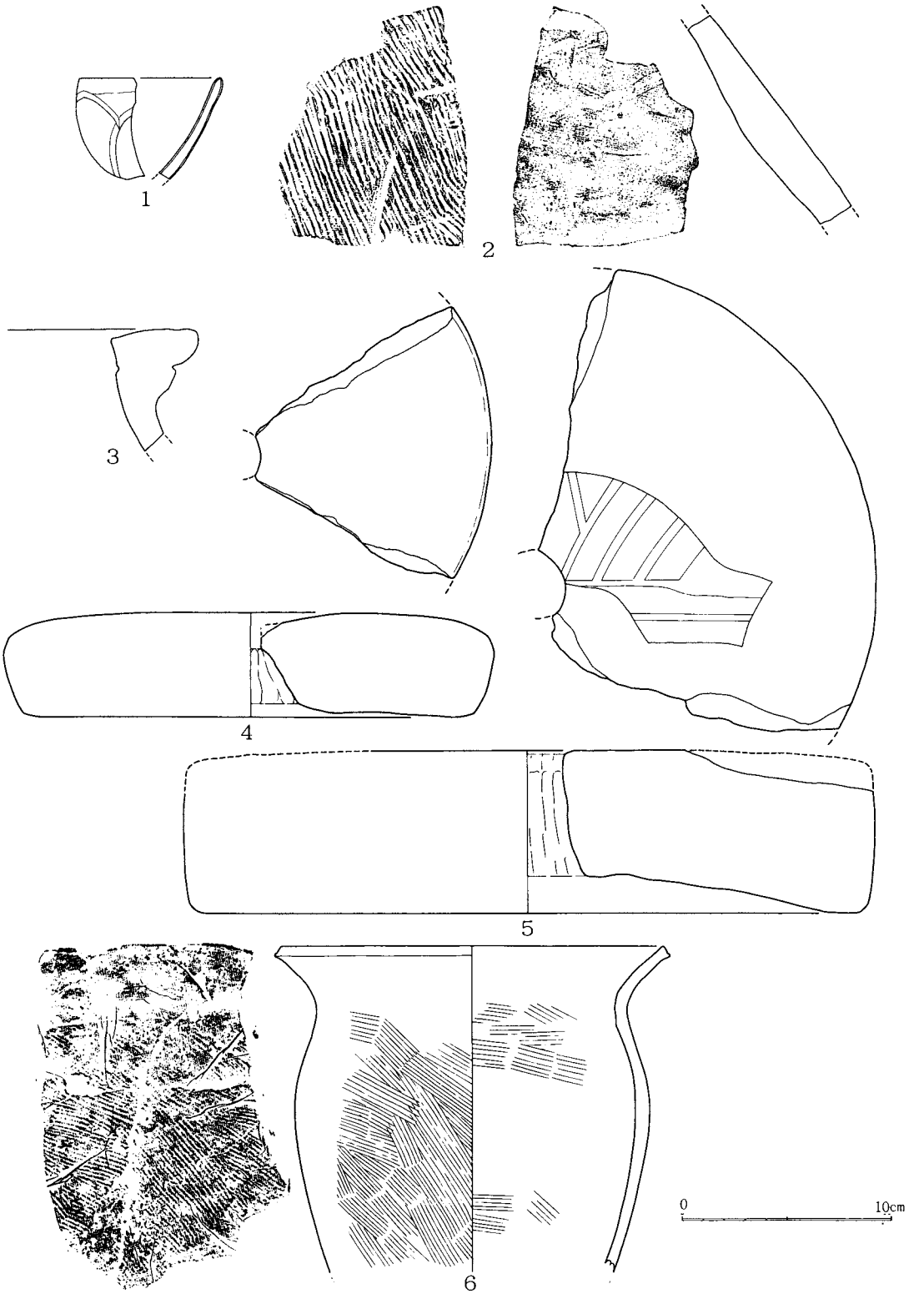
縁部内面に段を持ち、段より下には竹管を利用した円文を5個6列に配している。また口唇部にも円文を施す。調整は外面縦ハケ、内面横ハケで、口縁部は横ナデのようである。3は口唇部外面に刻みを施し、口縁部内面には2個の円形浮文が認められる。調整は不明。広口壺と思われる。4は沈線間に斜行の刺突文が2本のクシ歯状具によって等間隔に施されている。胎土には2～3㎜大の砂粒が目立ち、海綿骨片も少量含まれている。5、6は外面ハケ、内面ナデ調整を持つ底部である。他にも190点余りの土師器片が出土しているが、いずれも端面が丸くなっており、周辺からの流れ込みの可能性も十分に考えられる。土坑の時期はA区1号土坑と同様、弥生時代中期中葉が想定されよう。

5号土坑（第17、19－6図・図版20・37）

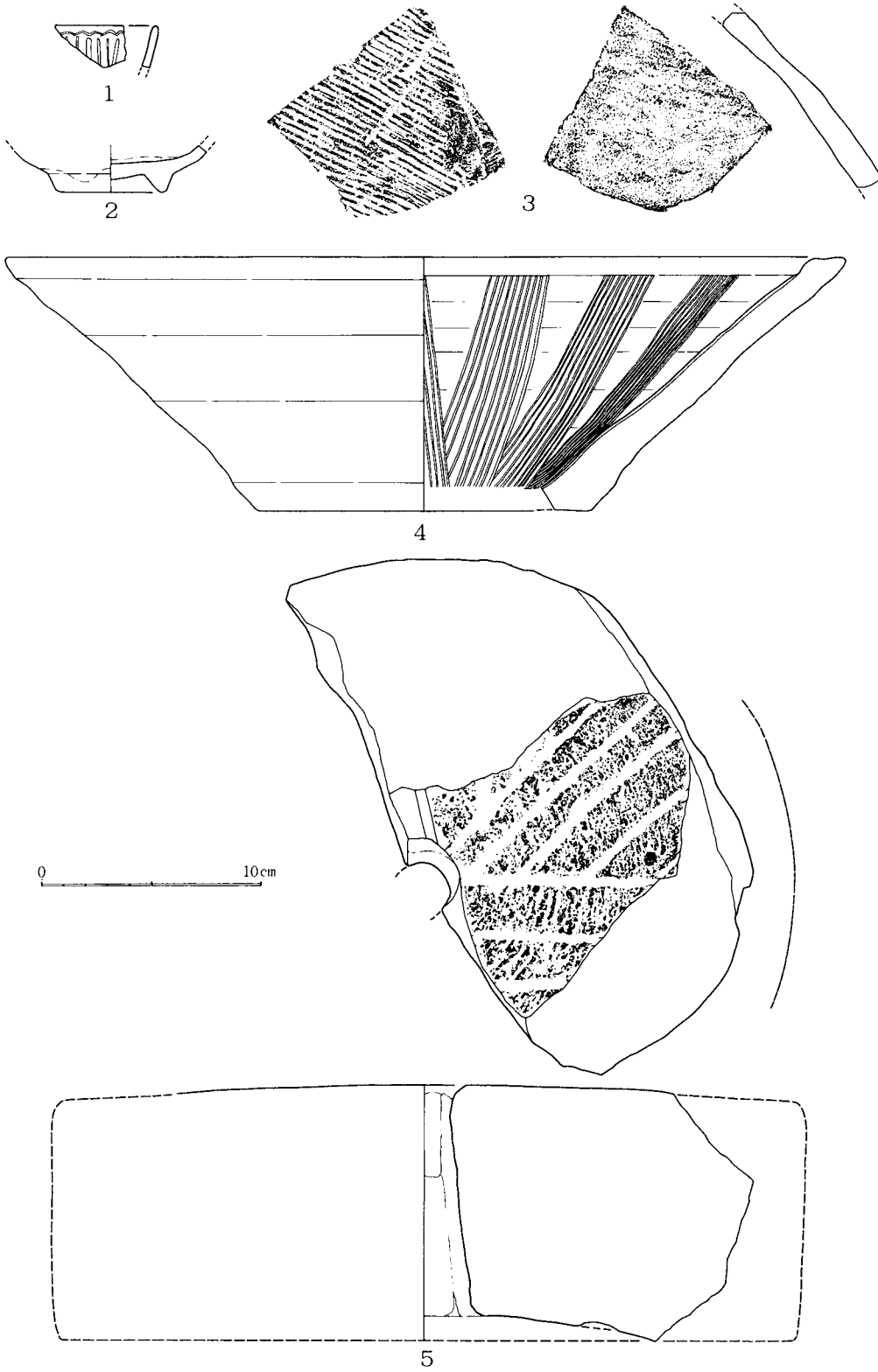
調査区内で検出された最大幅は1.5m、最深部は80cmを測り、断面は台形状を呈するしっかりとした遺構である。6は口唇部に浅い不規則な沈線を施した甕である。口縁部は横ナデ、胴部内外面にはハケ調整が見られる。また外面全体に煤が付着し、胎土には海綿骨片が多量に含まれている。他に44点の土師器片が出土している。時期的には弥生時代中期後半に属する土坑と考えられる。

10号溝（第16図・図版16）

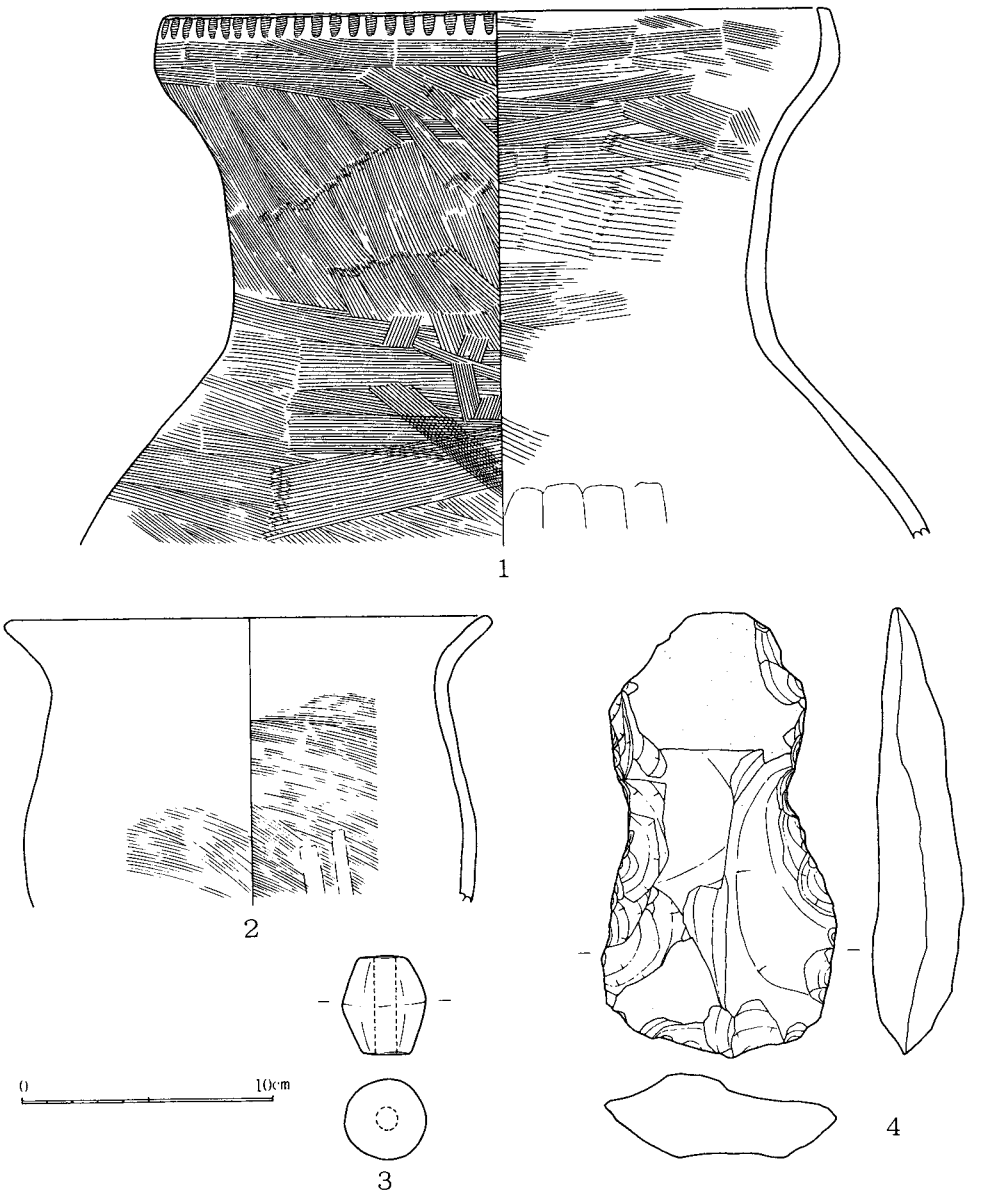
南北に走る溝状遺構で、幅50～60cm、深さ30cm近くを測る。覆土は全体に砂っぽく、灰色を主体とした淡い色となっている。遺物は越前焼の同一個体と思われるる甕片が2点出土している。



第19図　B区11号溝(1、2)、12号溝(3、4)、15号溝(5)、5号土坑(6)出土遺物実測図(S＝1/3)



第20図　B区2号井戸出土遺物実測図（S＝1/3）



第21図　B区包含層出土遺物実測図（S＝1/3）

11号溝（第16、19－1、2図・図版37）

B－8、9区に位置する。農道によって調査区が区切られるため、実際に遺構のつながりがあるかどうかは不明であるが、覆土が共通するため同一の遺構とした。落ち込みは直線的で、深さも50～60cmと一定している。遺物は須恵器片2点、珠洲焼片4点、青磁片1点、土師器片13点が出土している。1は外面に重なりを持つ蓮弁を削り出した青磁碗である。2は珠洲焼の

甕胴部片。外面の打圧具幅は3㎝で9～10本とやや粗く、胎土には多量の海綿骨片が認められる。青磁碗から見ると、溝の上限は14世紀代に比定できよう。

12号溝（第17、19－3、4図・図版37）

不定形で、深さ10㎝前後の浅いくぼみのような溝状遺構である。出土遺物は実測された2点のみである。3は大甕の口縁部片である。口縁上端に幅の広い水平面を持ち、内外面には沈線が巡っている。塗り鉄等は確認できないが、近世でも新しい時期の越前焼と思われる。4は復元径23.3㎝を測る小型の粉挽き臼である。火山礫凝灰岩質の下臼であるが、摩滅が激しく目跡を確認することはできない。

13・14号溝（第17図・図版17）

共にB－9区に位置する。異なった溝番号が付いているが、層的に上下があるだけで同一の溝である可能性が高い。遺物は器種不明の土師器細片が14点出土している。

15号溝（第17、19－5図・図版15・37）

13・14号溝を切り、2号井戸へとつながる変則的な溝状遺構である。深さは25㎝前後を測るが比高差はあまりなく、どのような機能を持ち、水がどちらへ流れたかは不明である。また周囲にピットが点在するが、建物跡となるかは定かではない。5は火山礫凝灰岩質の粉挽き下臼である。下面はアーチ状にせり上がり、中央には芯棒孔が貫通している。その他に、消費地で15世紀代によく見られる胎土の柔らかい白磁皿の細片も1点出土している。

17・18号溝（第17図・図版19）

それぞれB－11、B－14区に位置し、共に南北に流れを持つ溝状遺構である。遺物量は少なく、両溝合わせて30点余りの土師器片を見るだけである。

2号井戸（第17、20図・図版18、37）

B－10区に位置する。東側で15号溝と接続するが、その時期的な前後関係は明らかではない。最大幅2.8m、最深部1.3mを測るが、層序は21～27層と15～20層の二つに大きく分かれる。西側の小規模な掘り込み（15～20層）は、後世での再利用を示しているのだろうか。遺物は木炭などを含め、割合多く出土している。1は青磁碗の口縁部片。外面にはヘラ先によって細線蓮弁文が描かれている。蓮弁と剣頭が一つの単位として余り意識されておらず、蓮弁文の最終期の文様に近い。2は高台断面が三角形を呈する白磁碗。見込および高台周辺は無釉であり、胎土は柔らかく釉色は灰色に近い。また見込の周囲には沈線状の段を有している。3は珠洲焼の胴部片である。右下がりに打たれたタタキ痕の打圧具幅は3㎝で10本程度、胎土中の海綿骨片の量はやや少なめである。4は内外面赤褐色を呈する越前焼の鉢である。口唇部に内傾する水平面を作り、その下方に沈線を巡らす。10本単位で反時計回りに施されている卸し目は沈線を越えず、内側面は使用されて平滑になっている。また内面下方の僅かな段は、重ね焼きの痕跡のようにも思われる。5は幅が10㎝を越える凝灰岩質の粉挽き下臼である。2号井戸からはこの他にも珠洲焼片1点、越前焼片2点、加賀焼片1点、土師器片23点等が出土している。珠洲

焼は口唇部を嘴状に引き出す第Ⅰ期に近い製品であり、年代的には2の白磁碗の消費時期とも近く、12世紀後半頃に比定できる。また1、4の遺物からはそれよりずっと遅れた15世紀後半代が想定され、前述した層序の前後関係を裏付けているように思われる。

包含層（第21図・図版38）

B区包含層からは土師器片を中心に砥石、肥前陶磁器等幅広い遺物が出土しているが、形になるものは少ない。1は受口状口縁を持つ広口壺である。口縁部の屈曲は弱い。口唇部外面にはハケ状具による刻目を密に入れている。調整はハケで、胴部内面はナデ調整を施してある。時期的には弥生時代中期中葉と考えられる。2は口唇部に緩い面を持つ「く」の字口縁の甕である。胴部の張り出しは弱く、内外面にはハケ調整が見られる。3は胴部中央が鋭角的に張り出した土錘である。4は火山礫凝灰岩質の打製石斧であり、表面には一部自然面を残している。

C区の遺構と遺物

6号土坑（第22図・図版23）

B区との接合部に近いC－9区に位置する。調査区内での形状は半円形を呈し、深さは20cm前後を測る。62点の土師器片が出土しているが、いずれも胴部のため実測されていない。

7号土坑（第22図）

隅円方形状をなしており、覆土は6号土坑とよく似た黄褐色系を呈する。遺物では外面にハケ調整を持つ土師器片が6点出土している。

8号土坑（第23、28図・図版39）

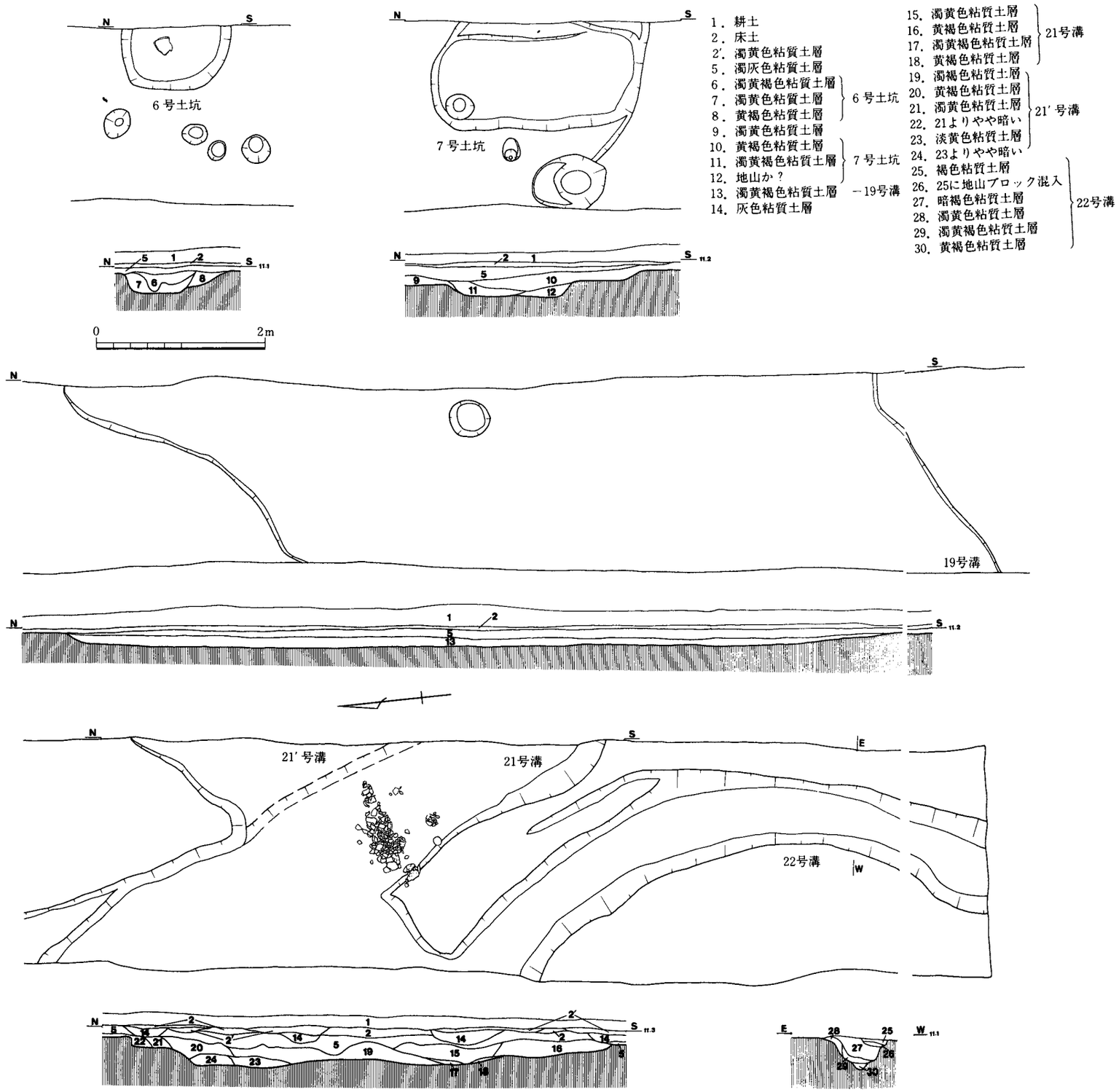
農道を挟んで調査区が新たに始まるC－16区に位置する。平面プランの一部しか明らかではないが、深さ50cm近くを測るしっかりとした遺構である。1は口唇部を肥厚させた布留系甕である。口唇部上端を一部欠損するが、丸く外傾する端面を持つようである。口縁部内外面は横ナデ、体部内面にはヘラケズリ調整が認められる。また胎土には海綿骨片が多量に含まれている。2も1と同器種である。口唇部の肥厚はやや小さめで、内傾する端面を持つ。頸部外面には縦方向のハケ調整が見られるが、顕著ではない。3は口縁部に擬凹線文と二列の棒状浮文を施した壺である。口縁部内面に一部赤彩痕が残る。この他にも甕、高杯、器台などの細片が、120点余り出土している。時期的には、漆・7、8群土器に近いと考えられる。

9号土坑（第23図・図版28）

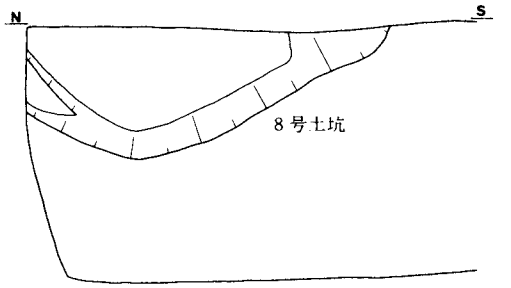
24号溝の北側掘り込み面に接する遺構である。幅1.4m、深さ40cmを測るが、東隣の土坑とつながって一本の溝状遺構になる可能性も持っている。遺物は上層で多数検出されているが、9号土坑独自のものである確証がないため、24号溝の出土遺物として取り扱っている。

19号溝（第22、25－3～5図・図版38）

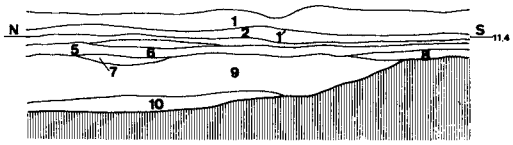
C－12区全体にわたる幅の広い溝状遺構である。しかし深さは20cm足らずであるため、単なる浅い落ち込みに過ぎないのかもしれない。3は19号溝内のピットから出土している。底径が



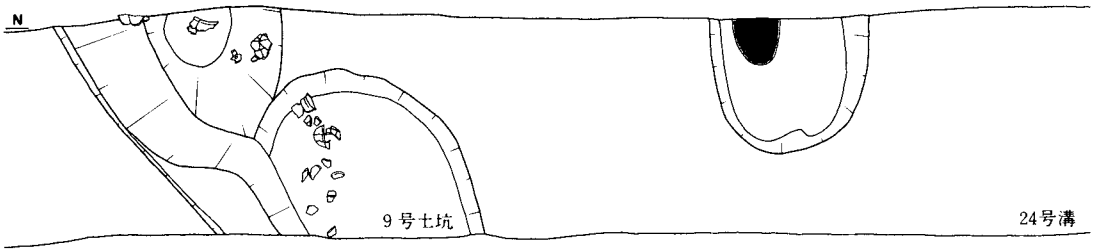
第22図　C区遺構実測図1（S＝1/60）

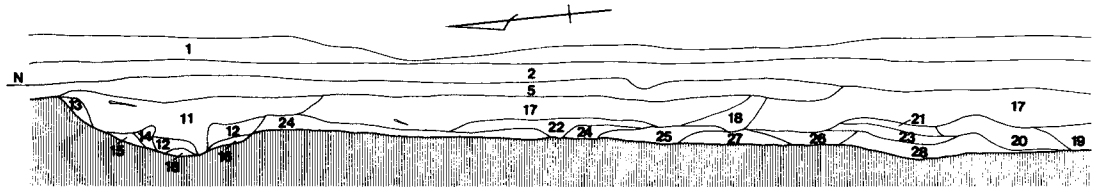


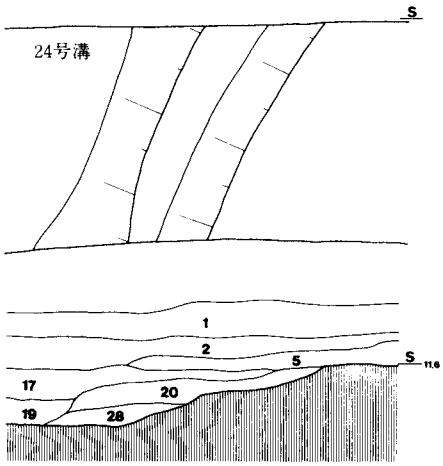
1．耕土
1′．淡黄灰色粘質土層
2．床土
5．濁灰色粘質土層
6．黄灰色粘質土層
7．褐色粘質土層
8．黄褐色粘質土層
9．濁黄褐色粘質土層
10．黄褐色粘質土層（炭化物混入）
} 8号土坑



0　2m







11．褐色粘質土層（遺物多量混入）
12．暗灰褐色粘質土層
13．濁黄色粘質土層
14．褐色粘質土層
15．黄褐色粘質土層
16．濁黄色粘質土層
17．濁黄褐色粘質土層
18．濁灰黄色粘質土層
19．濁黄灰色粘質砂層
20．白黄色粘質砂層
21．黄灰色粘質砂層
22．黄灰色粘質土層
23．濁黄灰色粘質砂層
24．褐色粘質土層（地山土混入）
25．濁黄褐色粘質土層
26．暗灰褐色粗砂層
27．灰褐色粗砂層
28．暗灰褐色粘質砂層
} 24号溝（11～16は？）

第23図　C区遺構実測図2（S＝1/60）

大きく、内外面にナデ調整が認められる。胎土には２～３㎜前後の大粒の砂粒を多量に含んでいる。４は外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を残す甕底部である。内部には若干の炭化した内容物が付着している。胎土には１～２㎜大の砂粒と共に多量の海綿骨片が含まれている。５は頭部をやや欠く火山礫凝灰岩質の打製石斧である。他に75点の土師器片が出土しているが、時期的には混じりがあるようである。

21号溝（第22、26、27図・図版２、24、25、39）

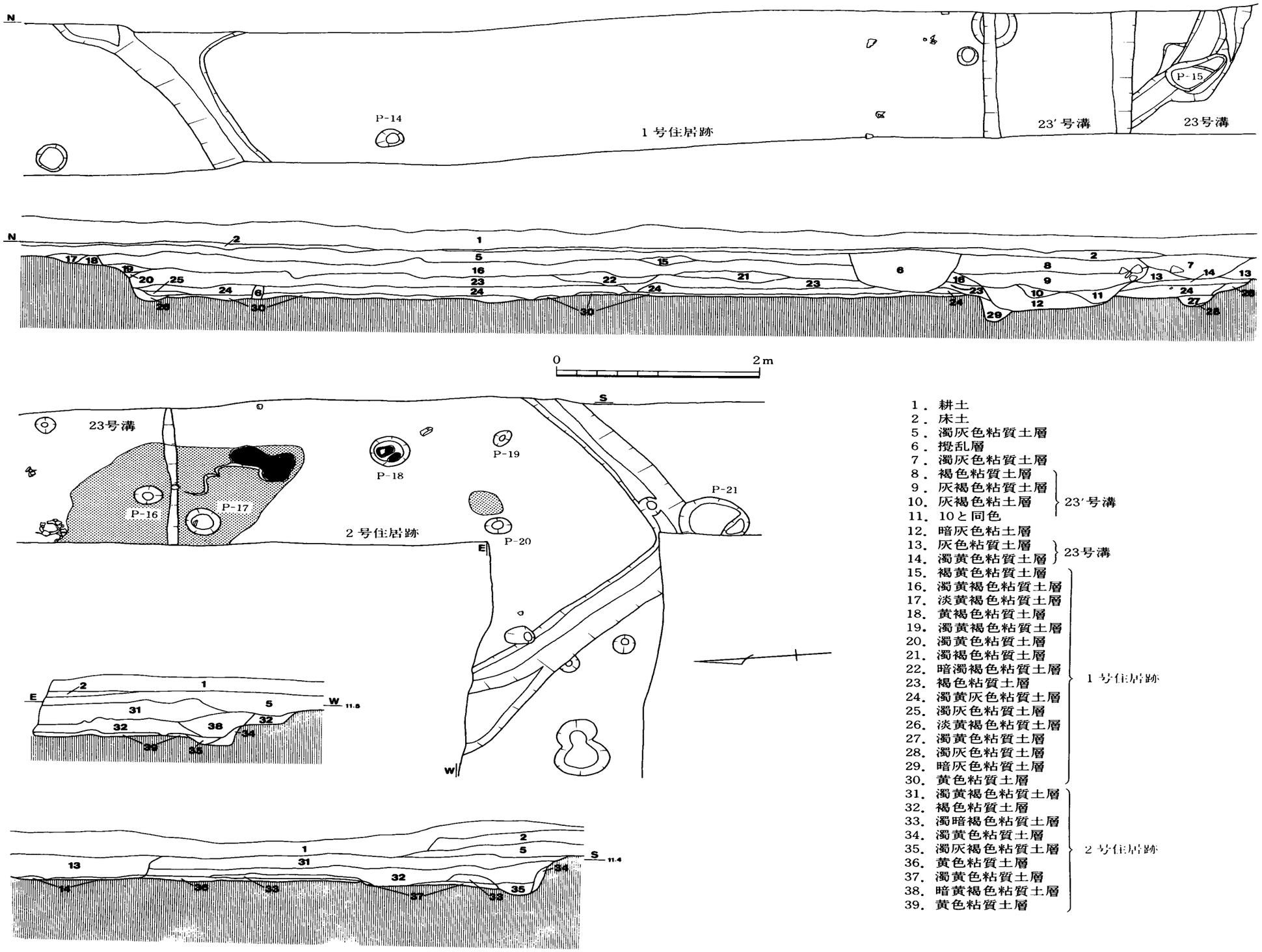
南北方向に伸び幅1.2m、深さ30～40cmを測る。20、22号溝とつながりを持ち、21'号溝を切り込んでいることは確認できるが、その全体像は定かではない。また溝をふさぐような形で、その中央部に幅１m余りの土器溜まりを検出しているが、遺物はそれ以外にも多数出土している。１～６はいずれも土器溜まりからの出土品である。１は幅の狭い外反する受け口状口縁を持つ甕である。肩部外面は格子状にハケ調整が施され、それ以下には縦位のヘラケズリ調整が認められる。内面はナデ調整か。砂粒の含みは少なく、外面には煤の付着が見られる。２は１の底部と思われる。底径は小さく自立は不可能であろう。内部には少量の炭化物を残している。３は全体にやや歪んでいるが、胴部最大径を中位下半に持つ下膨れの形態を有した壺である。口縁部は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面はハケ、内面はヘラケズリ調整が見られ、体部外面には煤が付着する。４は小型器台として総称されている。浅い皿型の受け部と緩やかに外反する脚部を持ち、脚部端には面取りを施す。外面はヘラケズリ、脚部内面には波状のハケ調整が見られる。５は受け部上方と脚部下方で大きく外反屈曲する器台である。作りは丁寧で、受け部に４個、脚部に３個の透かし孔が穿たれている。また受け部から脚部へ抜ける孔は径１cmという小ささである。６は小型の鉢である。口縁部は緩く内湾して立ち上がり、平底状の底部を持つ。器壁は薄く、調整は摩耗のため確認できない。他に甕、壺、高杯、器台等の細片が500点近く出土しているが、器形を復元できる遺物は少ない。なお組成としては在地色が薄れ、外来系土器が主体を占めはじめる漆・６群土器に近いと思われる。

22号溝（第22、25－１、２図・図版21、25、38）

21号溝とつながり、緩い弧を描いている。幅１m、深さ40cm前後を測り、周溝状になる可能性もある。１は外反度の大きい口縁を持つ甕である。内面の段は弱く、口縁部下端を引き出して有段状に仕上げている。外面に煤の付着が見られる。２は内湾しながら開く杯部を持つ高杯であろうか。浅い皿型で口縁端部は丸くおさめる。他に125点の土師器細片が出土している。

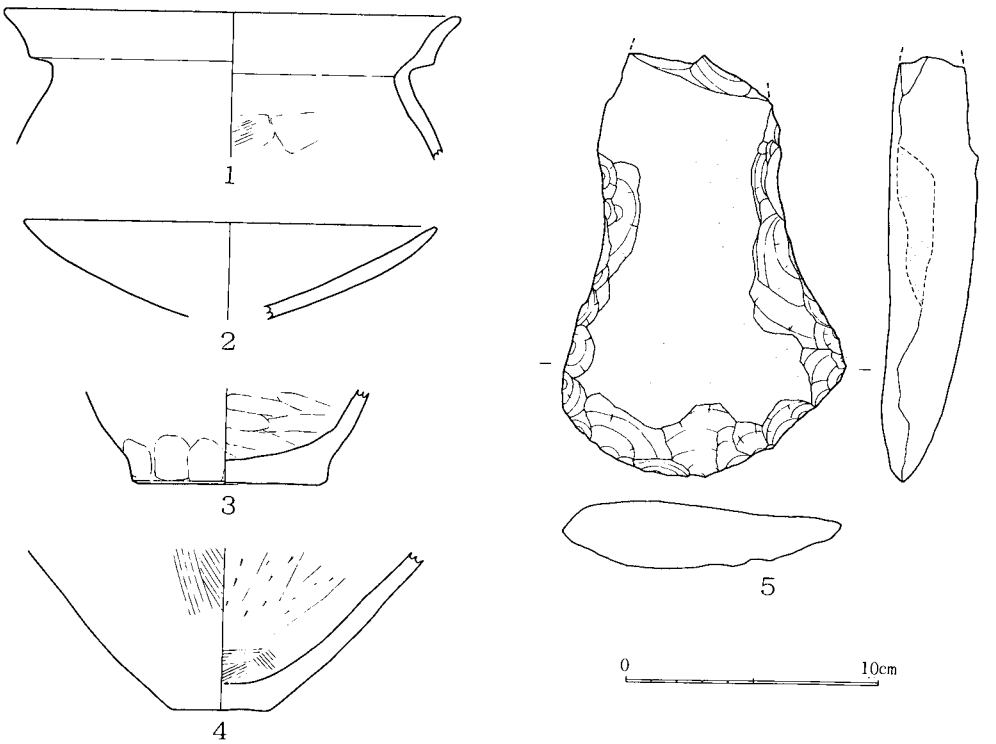
23号溝（第24、33図・図版42）

１号住居跡の上位に位置し、２号住居跡に切り込んでいる遺構である。ただし溝底のレベルが２号住居跡の床面とほとんど変わらないため、遺物の取り扱いに関しては注意を払う必要がある。２号住居跡の床面に広がっていたと思われる炭層もそのまま残存している。１は布留系甕である。全体に摩耗が進んでいるため口唇部の形態ははっきりしないが、肥厚度は小さく、端面は丸みを帯びているようである。２は小型器台。受け部端に弱い面取りを施し、外反して



1．耕土
2．床土
5．濁灰色粘質土層
6．撹乱層
7．濁灰色粘質土層
8．褐色粘質土層
9．灰褐色粘質土層
10．灰褐色粘土層　} 23′号溝
11．10と同色
12．暗灰色粘土層
13．灰色粘質土層
14．濁黄色粘質土層　} 23号溝
15．褐黄色粘質土層
16．濁黄褐色粘質土層
17．淡黄褐色粘質土層
18．黄褐色粘質土層
19．濁黄褐色粘質土層
20．濁黄色粘質土層
21．濁褐色粘質土層
22．暗濁褐色粘質土層
23．褐色粘質土層
24．濁黄灰色粘質土層
25．濁灰色粘質土層
26．淡黄褐色粘質土層
27．濁黄色粘質土層
28．濁灰色粘質土層
29．暗灰色粘質土層
30．黄色粘質土層　} 1号住居跡
31．濁黄褐色粘質土層
32．褐色粘質土層
33．濁暗褐色粘質土層
34．濁黄色粘質土層
35．濁灰褐色粘質土層
36．黄色粘質土層
37．濁黄色粘質土層
38．暗黄褐色粘質土層
39．黄色粘質土層　} 2号住居跡

第24図　C・D区遺構実測図3（S＝1/60）

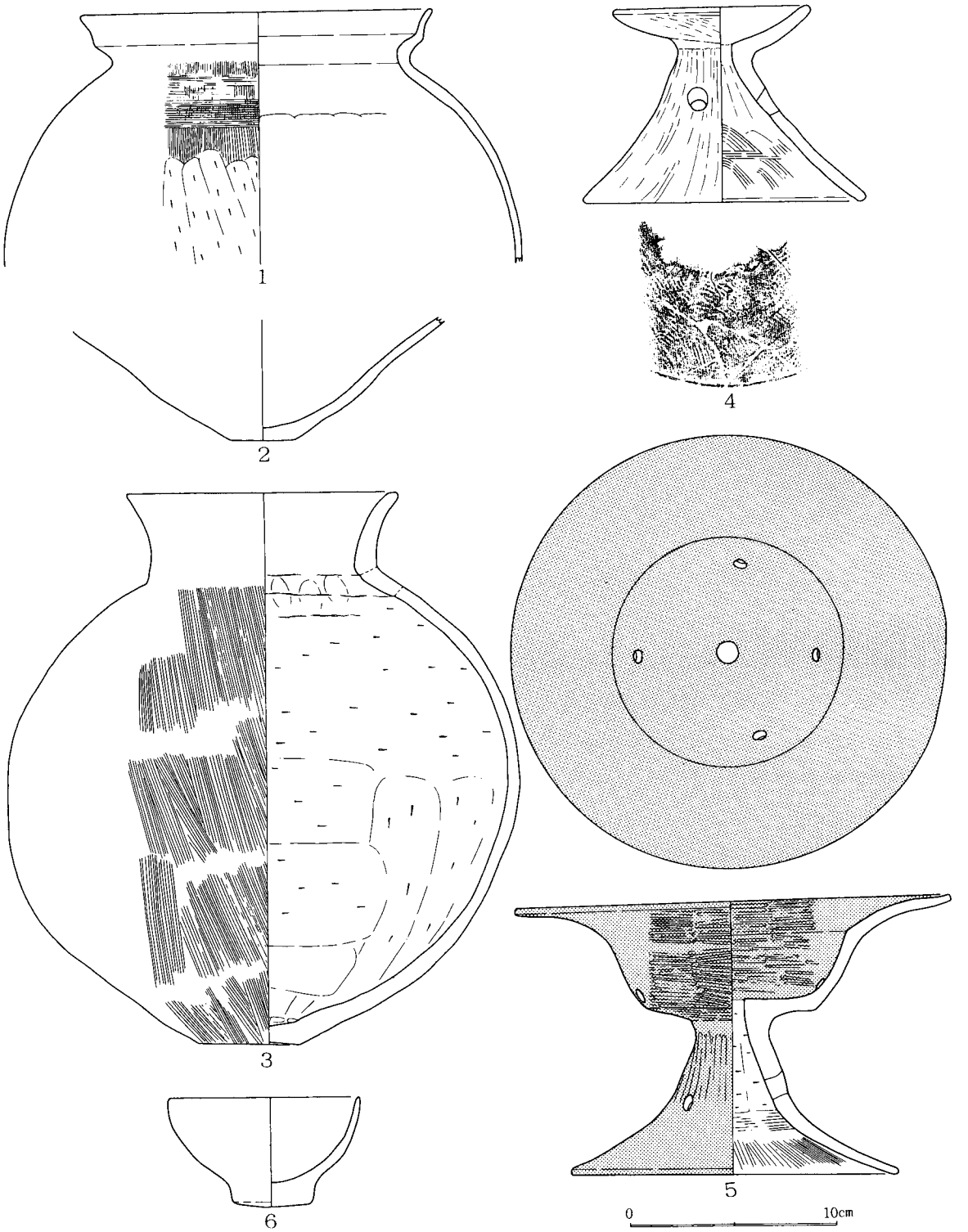


第25図　C区19号溝(3～5)、22号溝(1、2)出土遺物実測図(S＝1/3)

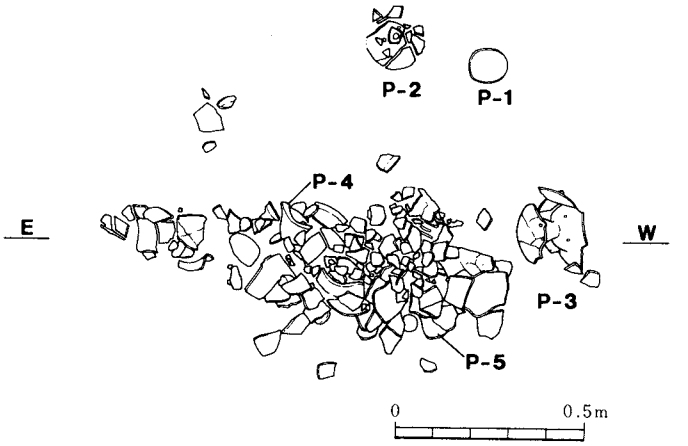
開く脚部をもつ。器壁は厚く、胎度の砂粒の含みは少ない。3は底部穿孔の鉢である。内外面共にヘラケズリ調整が見られる。なお1、2は溝底面直上からの出土遺物であり、2号住居跡に付く可能性も十分考えられる。他には181点の土師器細片が確認されている。また1号住居跡と23号溝を切る23'号溝からも30点余りの土師器片が出土しているが、器形の分かるものはない。

24号溝（第23、34図・図版28、42）

C－18、19区に位置し、幅10.5m、深さ50cm程度を測る。北側には9号土坑があり、南側は緩い二段掘りになっている。ただ両岸は平行に走らず、ハの字状になっているため、溝ではなく一つの完結する遺構になるのかもしれない。中央の浅い落ち込み内には焼土塊が確認されている。1は口縁部下端に稜を持つ山陰系の甕。口縁端部には内傾する弱い面取りが見られる。2も同器種であるが、口縁部下端の稜はより鋭い。3は外反する短い口縁を持ち、面取りされた口縁端部はやや窪んでいる。外面の調整はハケと斜行列点文、内面は粗いハケとヘラケズリ調整が施されている。4は全体に薄い器壁を持つ。口縁部上方には粘土紐の継ぎ跡が筋状に入り、口縁端部は先細りとなる。5、6は口縁端部に面を持つ、「く」の字口縁の甕である。7は外反する頸部に短い直立気味の口縁帯を有する壺である。器壁は厚く、肩部内面にはヘラケズリ調整が認められる。8は大型有段口縁壺。口縁は緩く外反し、端部には弱い面を持つ。9は小型器台。受け部はやや深く、端部には面取りが見られる。調整は内外面共にヘラミガキで



第26図　C区21号溝出土土器実測図（S＝1/3）

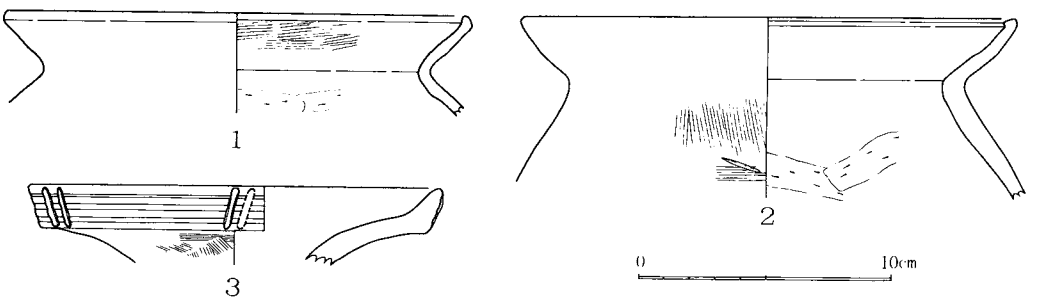


第27図　C区21号溝遺物出土状況実測図(S＝1/20)

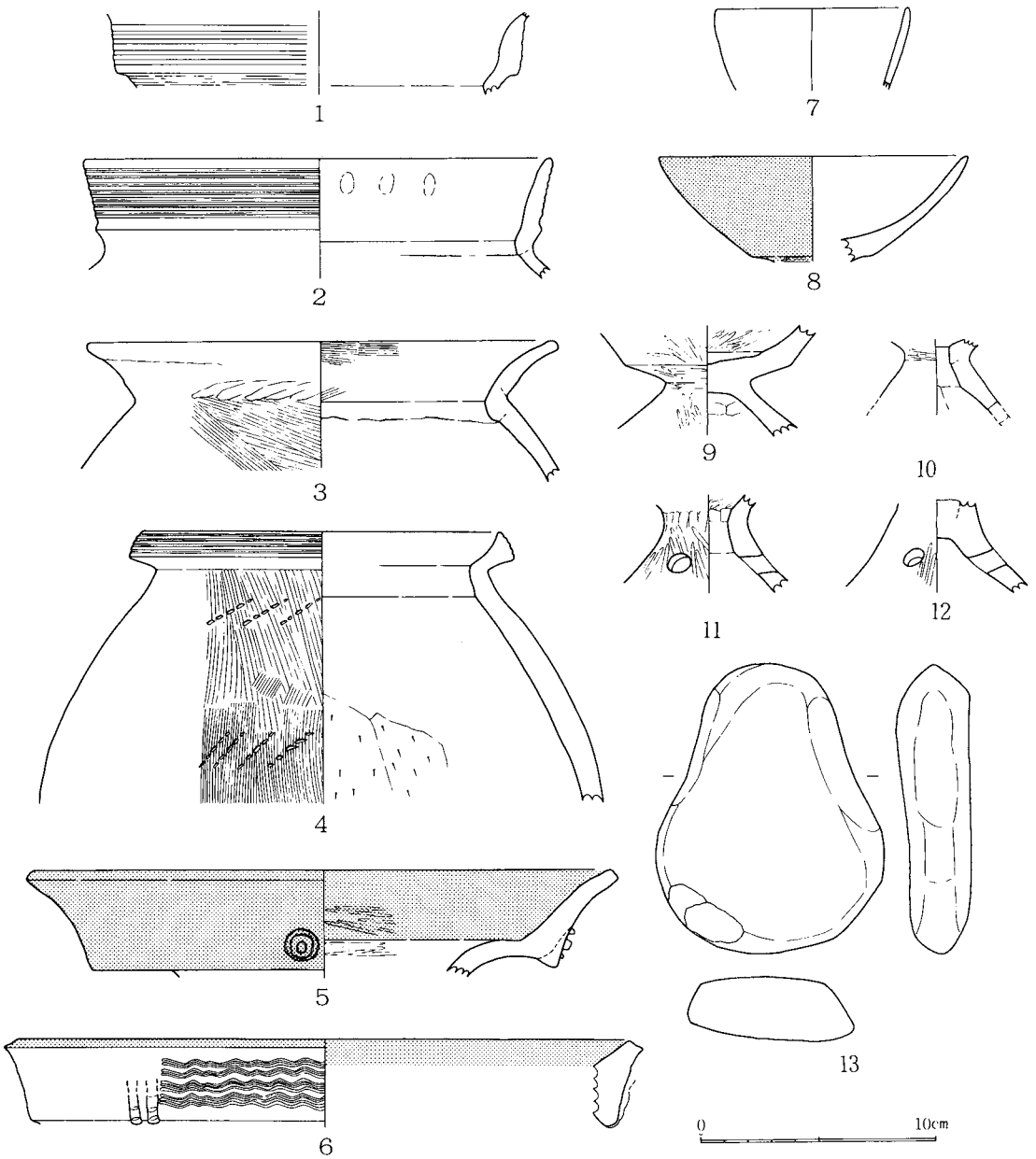
ある。10は高杯の脚部。裾部はラッパ状に広がり、脚端部は丸くおさめる。外面には縦位のヘラミガキ調整が残る。11は外面に煤が付着する底部片であり、胎土には非常に多くの砂粒を含んでいる。遺物はこの他にも520点余り出土しているが、擬凹線を持つ有段口縁部片は1点のみ、布留系甕の口縁部と思われる破片は確認されていない。実測された遺物の内、6～8は9号土坑上層、4、9、10は9号土坑東に接する土坑の下層、それ以外は24号溝の覆土内から検出されている。層位的には9号土坑等と24号溝の間には新旧関係が認められるが、時間的にはそう大きな差はなく、古手の3を除けば、9のような小型器台が出現する漆・5群土器近くに想定できるのではないだろうか。

1号住居跡（第24、29～31図・図版26、40、41）

当初は土器のたくさん出る溝状遺構として認識されていた。調査区の南北で幅30～40cm、深さ10cm程度の周溝を確認しているが、一部23、23'号溝に切り込まれている。ただ周溝間の距離は10mにも及ぶため、形状は確定できないが相当大きな住居跡になるものと思われる。30層

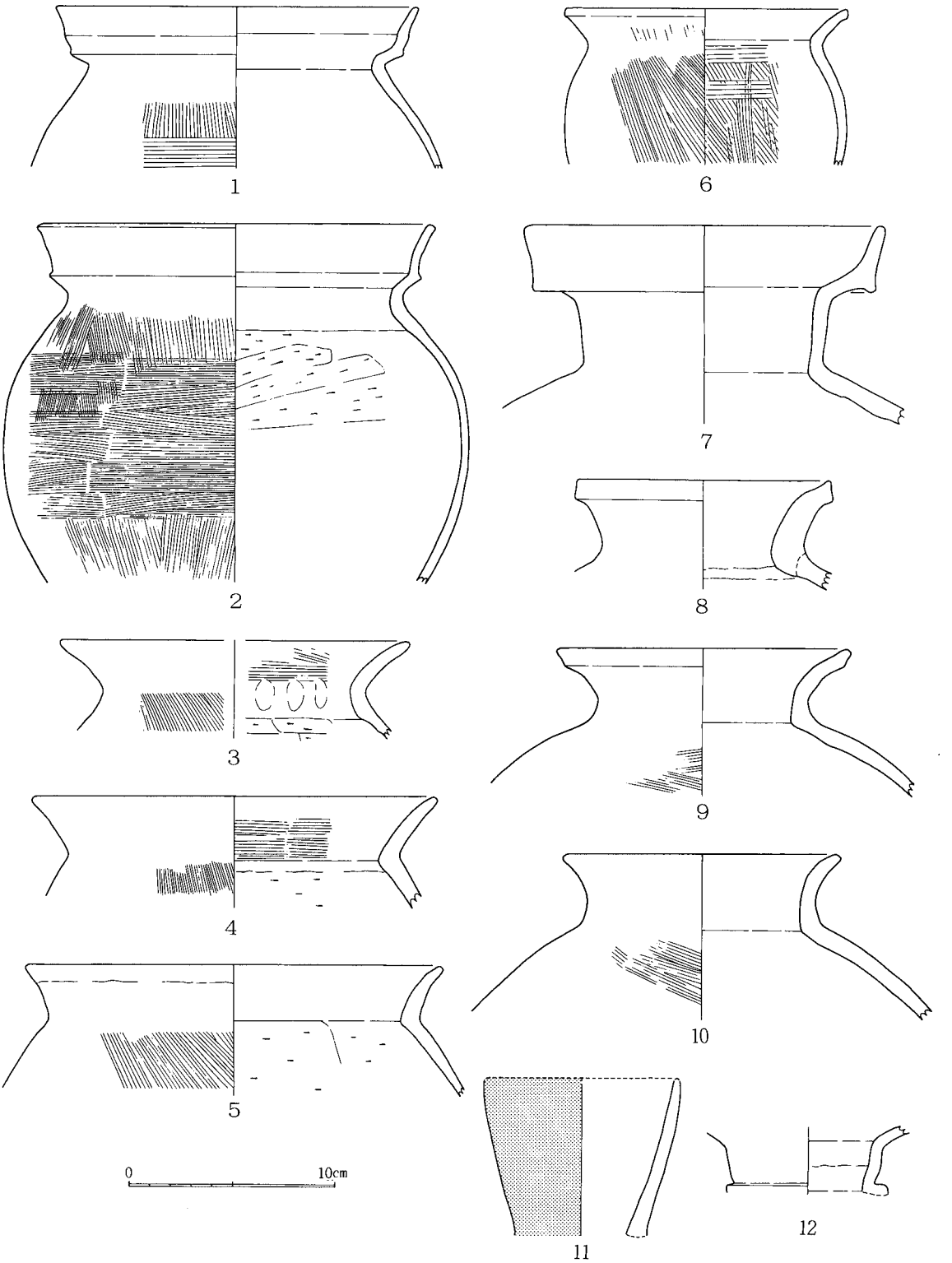


第28図　C区8号土坑出土土器実測図(S＝1/3)

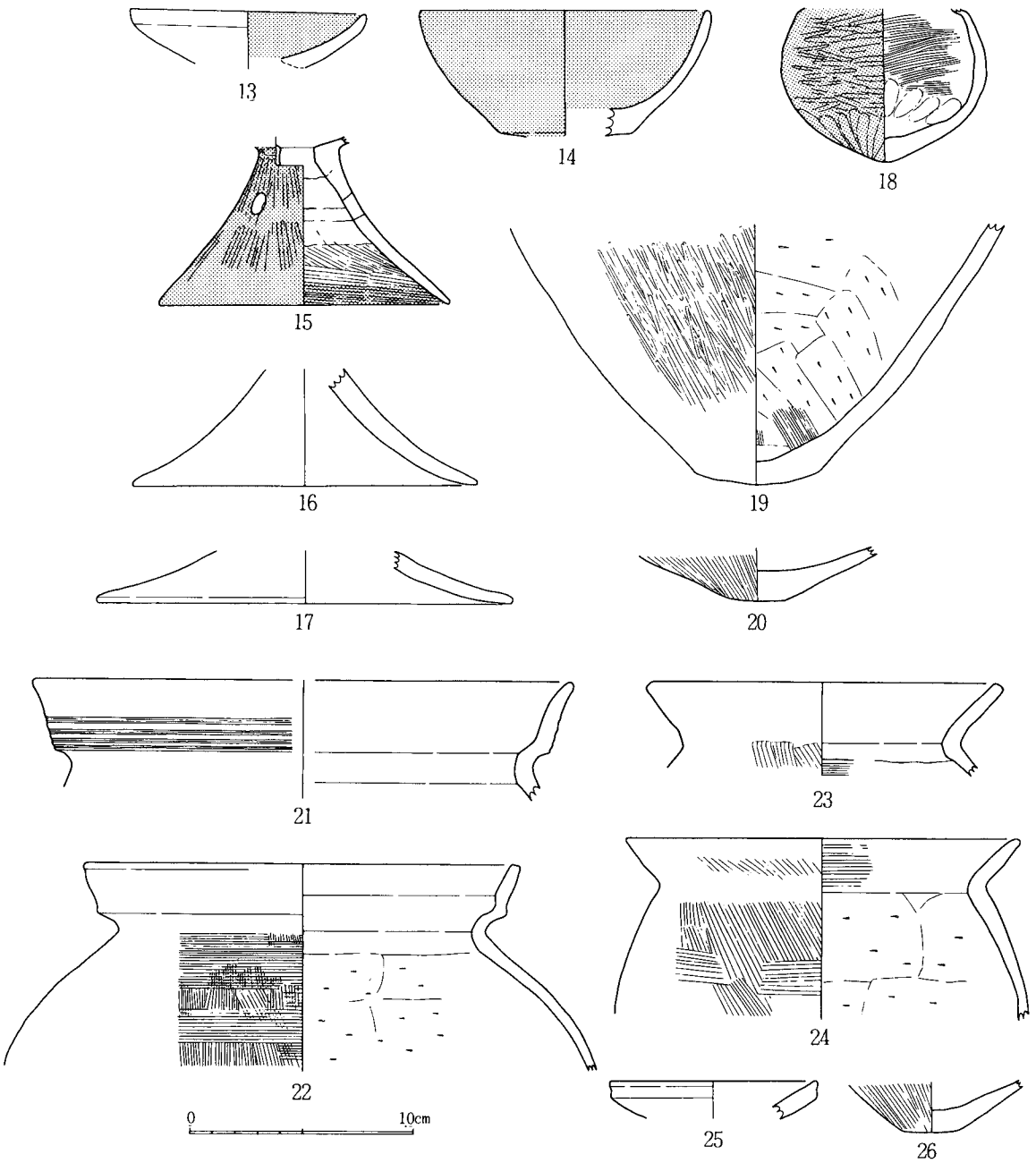


第29図　C区1号住居跡上層出土遺物実測図(S＝1/3)

上面を床面として捉えているが、調査区内では主柱穴の並びや、炉跡等は確認されていない。なお遺物は大まかに上、中、下層に分けて取り上げてあるため、それに従って概観してみたい。第29図1～13は上層から出土している。1、2は有段の口縁部に擬凹線を施した甕である。2は直立気味の口縁部内面に僅かに指頭圧痕を残してはいるが、口縁部は「く」の字状に近く、

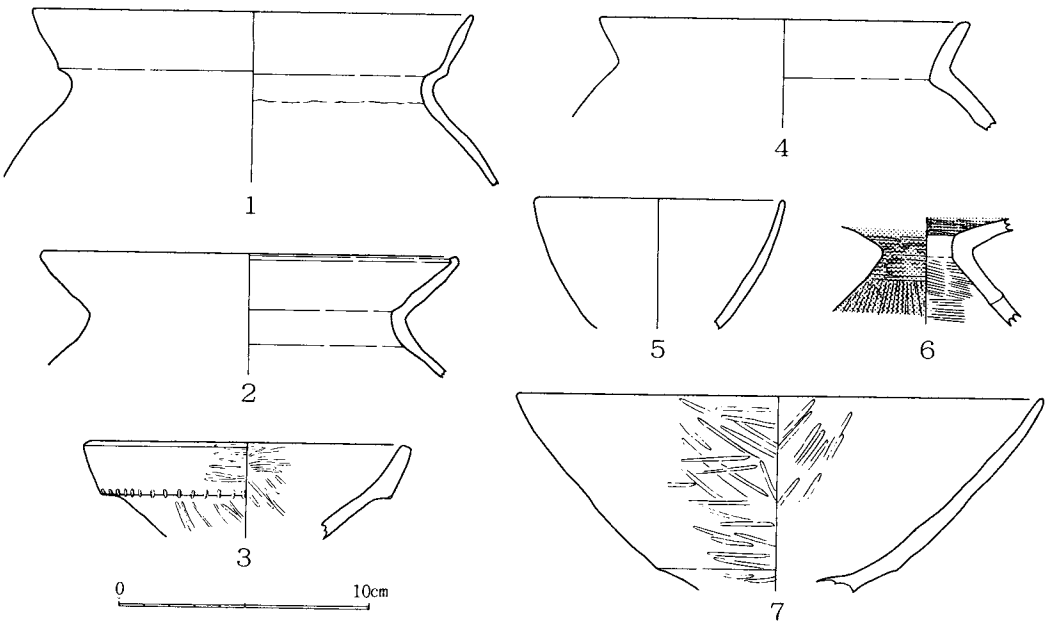


第30図　C区1号住居跡中層出土土器実測図（S＝1/3）



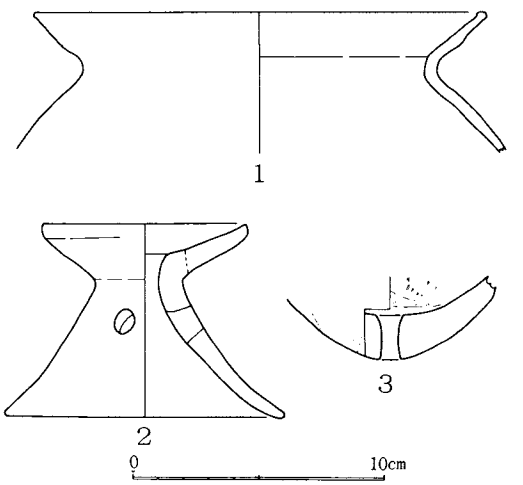
第31図　C区1号住居跡中層(13～20)、下層(21～26)出土土器実測図(S＝1/3)

その下端を引き出して有段状に仕上げているだけである。3は頸部外面に口縁を接合した際の工具痕を残している。頸部の屈曲は強く、口縁は外反して伸びる。外面肩部には右下がりのハケ調整、口縁部内面には横方向のハケ調整が見られる。4は「く」の字口縁を呈する甕。肥厚した口唇部には、四条の擬凹線文が巡る。外面は縦位のハケ調整と二段の斜行列点文、内面は

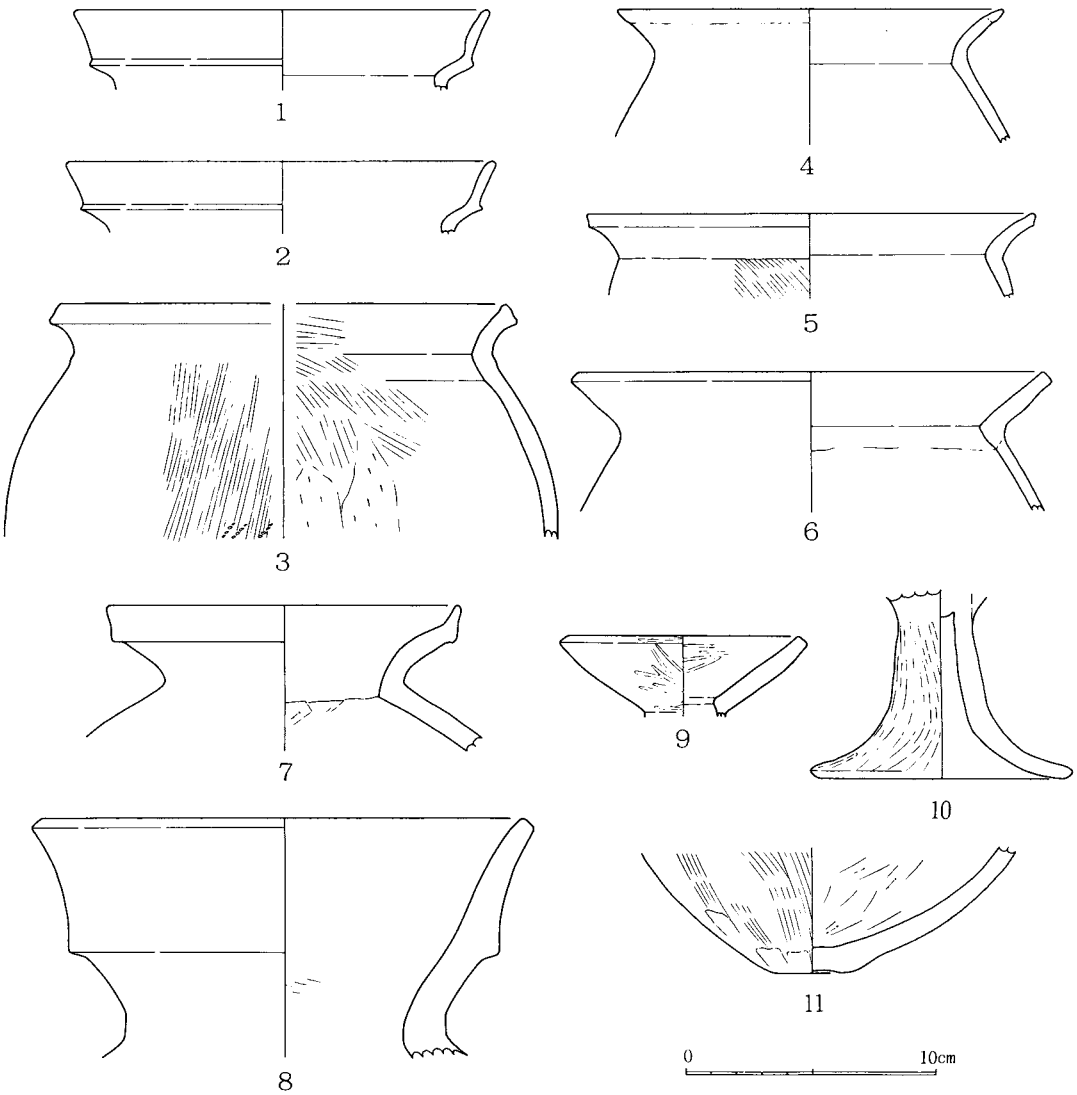


第32図　C区2号住居跡出土土器実測図(S＝1/3)

胴部上半がナデ調整、下半をヘラケズリ調整で仕上げている。5は有段口縁壺である。器壁は全体に厚く、口縁端部には弱い面取りが施されている。また口縁下端部の稜は断面三角形の粘土紐を付加して成型したものであり、その上には1個の竹管文状の浮文が飾られている。内外面には赤彩痕が認められる。6も装飾壺である。赤彩痕の残る口唇部は面取りされ、幅の広い口縁部外面には波状文と刻みを持った二列の棒状浮文が付く。7の口縁部は球形の体部を持つ壺に伴うと思われる。胎土が柔らかいため調整痕は観察できないが、器壁は薄く、砂粒の含みは多くない。8はやや小型の高杯である。脚部を欠くが、杯底部に幅の狭い平面を持ち、杯部は内湾しながら開く。9も杯底部に面を持ち、脚部は接合部分から大きくラッパ状に広がる。外面にはヘラミガキ調整が施されている。10〜12は小型器台である。いずれも部分品であるが、脚部外面にはヘラミガキ調整が見られる。13は用途不明石製品である。火山礫凝灰岩質で両面に平滑面を持つが、自然石の可能性もある。時期的



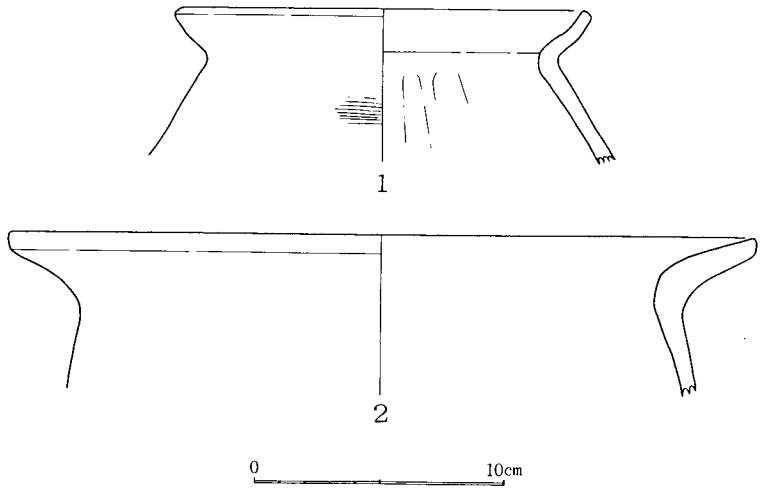
第33図　C区23号溝出土土器実測図(S＝1/3)



第34図　C区24号溝出土土器実測図(S＝1/3)

には4が極端に古く弥生時代中期後半頃に比定されるが、それ以外は在地色の変質、解体によって捉えられる漆・5、6群土器に近い印象を受ける。なお上層からはこの他に800点を越える土師器細片が出土しているが、器形の分かるものは少ない。

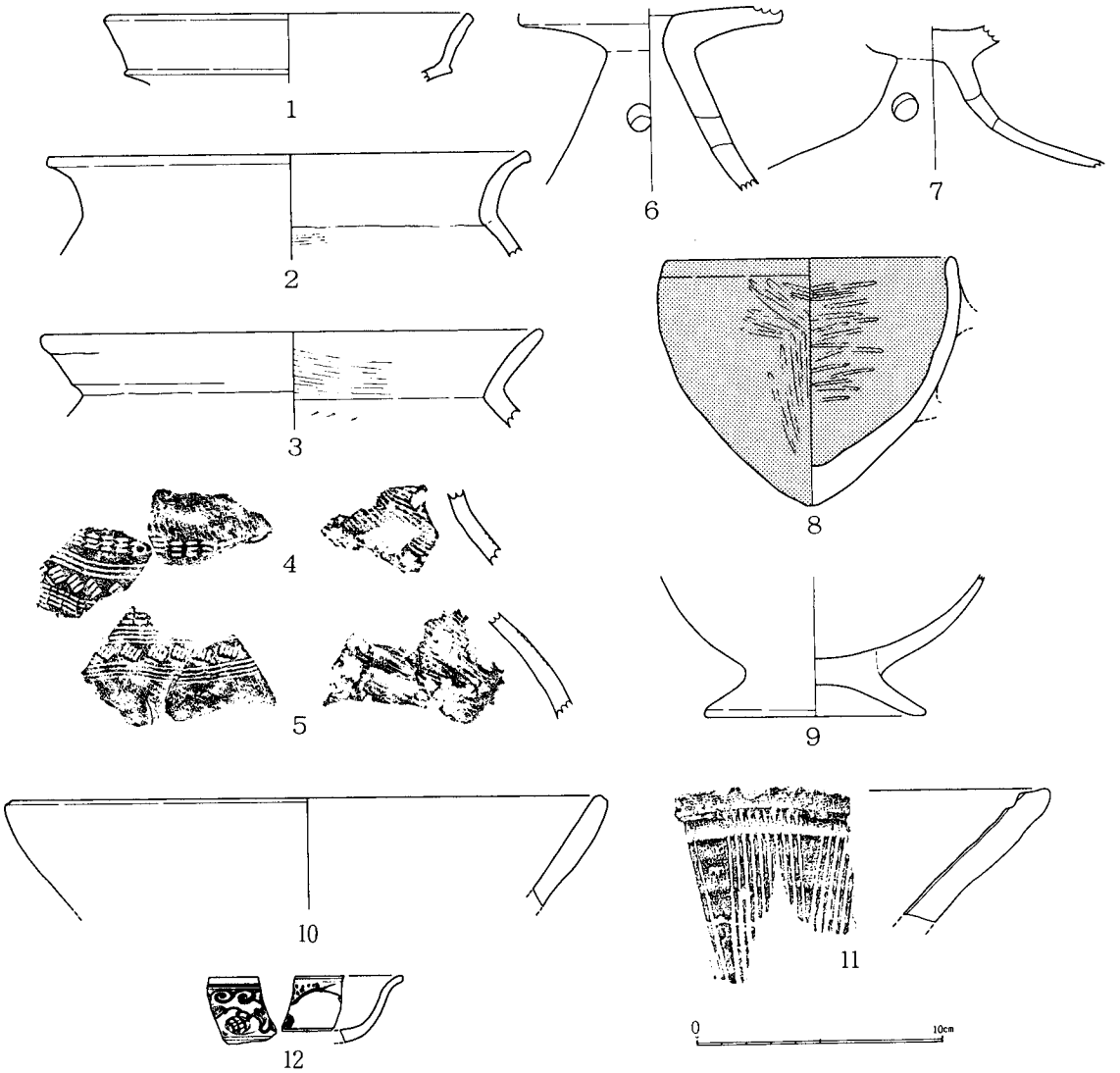
第30、31図1～20は中層から出土している。1は口縁部下端に稜を持つ山陰系の甕である。口縁端部は丸くおさめ、外面には煤が付着する。2も同器種であり、外面はタテハケ調整後、胴部を中心にヨコハケ調整が施され、内面にはヘラケズリ調整が認められる。口縁端部には弱い面を持ち、外面には多量の煤が付着している。3は緩やかに外反する長めの口縁を持つ。頸部内面には接合の際の指頭圧痕が並び、その下方は強いヘラケズリ調整のために段ができてい



第35図　C区落ち込み上層出土土器実測図(S＝1/3)

る。4の口縁は直線的に伸び、口縁端部は丸くおさめる。器壁は厚く、口縁部内面にはヨコハケ調整が見られる。5は口縁部上方に粘土紐の継ぎ跡を残している。外面には顕著なハケ調整が右下がりに入り、鋭角的な稜を持つ内面頸部以下にはヘラケズリ調整が見られる。6は小型の甕である。外面は右下がりに、内面は不規則にハケ調整が入り、胎土には少量の海綿骨片が含まれる。7は直立した頸部とやや外反気味に直立する有段口縁を持つ壺である。口縁端部は面取りされている。8～10は屈曲が弱く、短い口縁を持つ壺。口縁端部は面取りするものから丸くおさめるものまで形態差が認められる。11はやや細めの口縁を持つ壺と思われる。調整は不明であるが外面には赤彩痕が残り、胴部との接合部分には漆が付着している。中世の陶磁器に見られるような補修痕なのであろうか。12は外傾する口縁と直立した頸部を持つ壺であろう。頸部と体部の境で接合してある様子がよく分かる。13は小型器台の受け部。受け端部は先細り気味に面取りされ、内面には赤彩痕が残る。14は小型高杯である。内湾して開く杯部を持ち、内外面共に赤彩が施されている。胎土は精選され、砂粒の含みは非常に少ない。15～17は器台の脚部である。17は裾部が大きく広がる形態をとるが、残存部が僅かなため確定はできない。18は小型の鉢か。口唇部をやや欠くが、ほとんど完形に近い。外面はヘラミガキ調整に赤彩、内面は体部がハケ調整、底部には指頭圧痕が見られる。また胎土には海綿骨片が含まれている。19、20は底部片であるがほとんど底面を持っていない。20は胎土に多量のシャーモットを含む特異な土器片である。なお中層からは他に580点余りの土師器片が出土しているが、擬凹線を持つ在地系有段口縁甕の口縁部片は確認されていない。

第31図21～26は下層から出土している。21は口縁帯下方に四条の擬凹線を巡らす有段口縁甕である。砂粒を多く含み、外面には煤が付着する。22は受け口状口縁の甕と思われる。口唇部は凹状に面取りされ、口縁部下端には弱い稜を持つ。外面はタテハケの上にヨコハケ調整、内



第36図　C区包含層出土土器実測図(S＝1/3)

面は頸部以下へラケズリ調整を施す。23、24は「く」の字口縁甕。外面はハケ調整され、煤の付着が見られる。25は小型器台の受け部。受け端部はつまみ上げ気味に面取りされる。胎土には多量の海綿骨片が含まれる。26は外面にハケ調整、内面に指頭圧痕を残す底部片である。外面には煤が付着する。21、23は住居跡南側の周溝内、22は床面からの出土である。また実測はされていないが、床面レベルから緑色凝灰岩質の管玉形割未成品を1点確認している。なお下層から出土した土師器片は300点以上を数えるが、布留系甕の共伴は認められない。上～下層出土遺物の様相から見ると、1号住居跡の時期は在地系土器が解体し外来系土器が在地に定着する漆・6群土器近くに位置付けることが可能であろう。

2号住居跡（第24、32図・図版27、42）

C－18区～D－1区に位置する。調査区内でほぼ直角に曲がるコーナー部分を検出しているため、方形の住居跡と推測される。床面レベルは23号溝底と同レベルであり、1号住居跡よりも約20cm高い。住居跡の中央と予想される部分には炉跡と思われる焼土が残っており、その周辺には炭層の拡がりが見られる。ピットは幾つか検出されたが、主柱穴等の区別はできない。1号住居跡との前後関係は23'号溝の切り込みにより、平断面からは確実な判断はできない。1は有段口縁の甕である。全体に破損度が大きいため弱々しい図になっているが、口縁部下端に稜を持つ山陰系の土器と思われる。器壁は薄く、外面には煤が付着する。2は布留系甕である。口唇部の肥厚度は小さく丸く、端面を持たない。3は器台受け部か。上端には明瞭な面取りが認められ、有段部の下端にはキザミ目が入る。内外面共にヘラミガキ調整が見られる。4は直線的に伸びる短い口縁を持つ。器壁は厚く、口縁端部は丸くおさめる。5は頸部が細くしまる小型の壷か。器壁は薄く、口縁部は内湾気味に開く。6は浅い受け部を持つ小型器台であろう。赤彩が奇麗に残っている。7は緩やかに内湾する杯部を持つ高杯。脚部は八の字状に開くと思われる。作りは丁寧で、内外面にヘラミガキ調整を残している。1、5は床面直上からの出土である。住居跡の時期は2の布留系甕の存在を重視するならば、漆・7群土器に近いと思われ、23号溝の底面から出土した1、2が2号住居跡に付くとなれば、それを裏付けることにもなろう。なお他には220点余りの土師器細片が確認されている。

落ち込み・包含層（第35、36図・図版29、43）

C区最南端の25区に落ち込みは位置する。調査区が途切れるため、遺構の性格は不明。1は短く内湾する口縁を持つ。口縁端部は面取りされ、外面には煤が付着する。2は肩の張り出しの弱い甕か。口縁端部はつまみ上げ気味に面を取る。器壁は厚く、胎土には多量の砂粒と少量の海綿骨片を含む。他に土師器片247点が出土しているが、弥生時代後期後半の甕の口縁部片を数点確認している。

C区包含層からは弥生～古墳時代、中近世の遺物が主に出土している。須恵器はほとんどない。1は口縁部下端に断面三角形の鋭い稜を持つ甕。口端面は外傾し、胎土には多くの海綿骨片を含む。2はやや直立気味の頸部を持つ。口縁端部は僅かに肥厚している。3の頸部は直線的に折れる。口縁部外面上方には粘土紐の継ぎ痕が見られる。4、5は同一個体の壷片と思われる。文様は頸部から順に廉状文、直線文、斜行短線文、廉状文、直線文、斜行短線文、直線文が施されているようである。内外面共にハケ調整である。弥生時代中期の製品である。6は受け部下端に幅の広い水平面を持つ器台である。屈曲部には上方へ伸びる口縁部との剝離面が見られる。7は透かし穴部分から大きく屈曲する脚部を持つ高杯。器壁は比較的薄い。8は把手の付く尖底の鉢である。内外面共に赤彩が施され、胎土には多量の海綿骨片が含まれる。9は短めでやや偏平な脚台を持つ底部である。くびれ部より上方には煤の付着が認められる。10、11はそれぞれ加賀焼、越前焼の鉢である。12は胴部外面に唐草文を描く染付皿。15世紀後半～

16世紀にかけて多く見られる器種である。

Ｄ区の遺構と遺物

10号土坑・30号溝（第37、40図・図版34、44）

Ｄ－３区に位置する。形状は円形を呈し、径1.5m近くを測る。上位にある30号溝とは同一遺構である可能性が高い。覆土内には土師器皿の細片が多量に混入している。完形品はなく、実測できた１、２は形の残っている数少ない例である。１は内湾する口縁を持ち、端部を僅かにつまみ上げている。２は口縁上部を横ナデにより直立させる。両者共に復元口径は10cm大である。他に900点近くの土師器皿片と２点の珠洲焼鉢片が出土している。時期的には14世紀後半以降と思われるが、それ以上の特定はできない。

11号土坑（第38図）

36号溝と37号溝に挟まれた深さ10cm足らずの遺構である。器種不明の17点の土師器細片が出土している。

26号溝・27号溝（第37図・図版32、33）

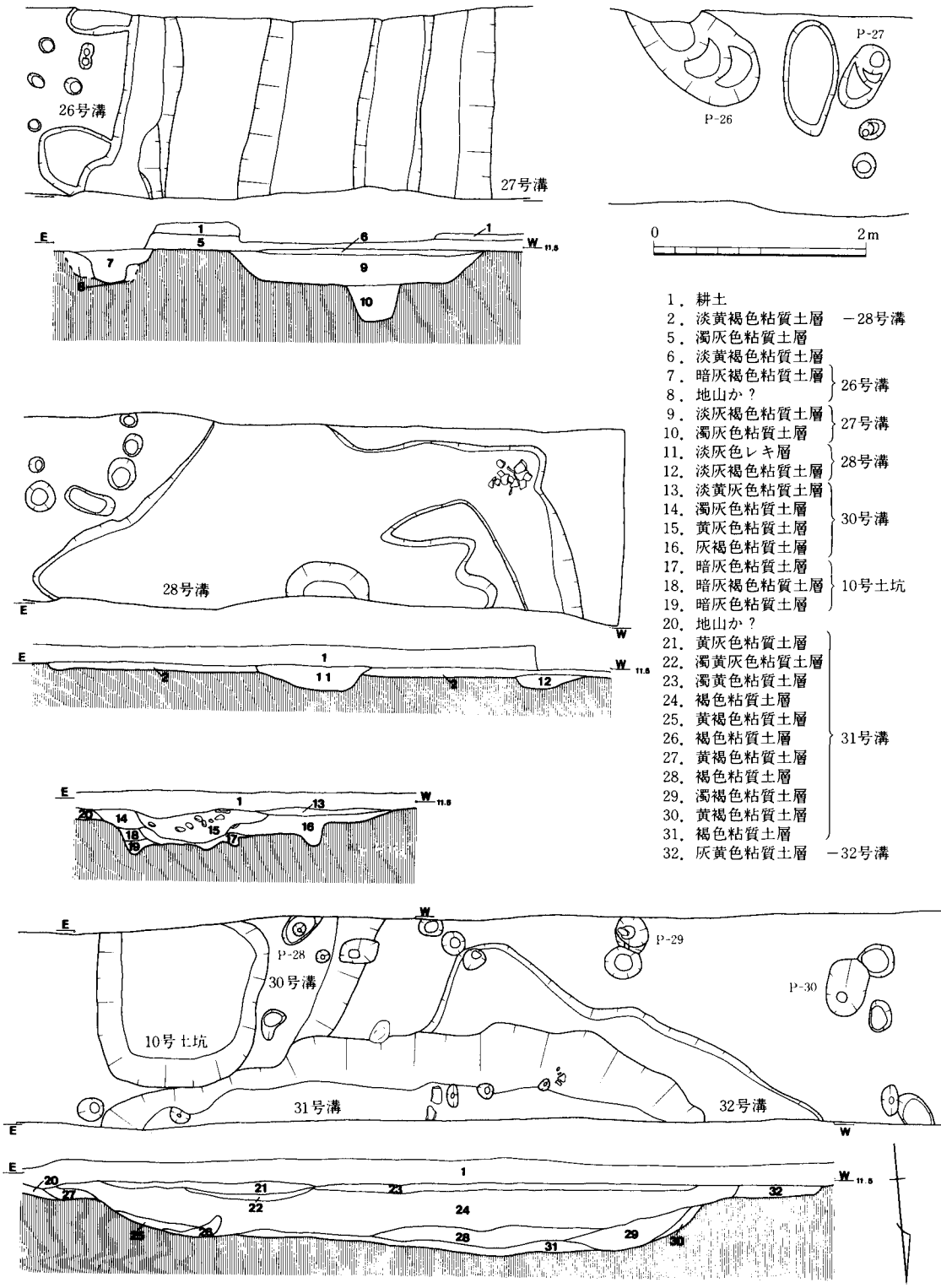
平行して南北に伸びる溝である。形状は異なるが両溝共に灰褐色粘質土の基本覆土を持つ。27号溝からは30点の土師器皿片を含む計57点の土師器片と瀬戸系陶器の細片１点、26号溝からは２点の土師器片が出土している。実測はできなかったが、土師器皿は器高が低く口縁が外反し、底部が丸みを帯びるなど14世紀後半の特徴を有している。

28号溝（第37、39－５～９図・図版43）

Ｄ－２区に位置する深さ10cm前後の不定形遺構である。５は遺構西側のコーナー部分から一括して検出された深鉢形土器である。外面の口縁部分には横方向、体部には縦方向の条痕が施されている。内面はナデ調整であるが、横方向の砂粒の動きが観察される。口唇部にはナデによる肥厚が見られる。内面下端には煤が、また外面の大部分と内面の口縁部付近には薄い褐色の顔料のようなものが付着している。胎土には１～３mm大の砂粒と赤色粒そして海綿骨片を多量に含んでいる。弥生時代前期の所産である。６は「く」の字口縁甕。口縁部内外面にハケ調整が見られる。７は小型壷か。上方でやや外反する直立気味の口縁を持つ。８は非常に薄い底部を持つ土師器大皿である。土が柔らかく摩耗が著しいため、調整は観察できない。９は軽石である。他に59点の土器片が出土しているが、遺構の時期の特定はできない。

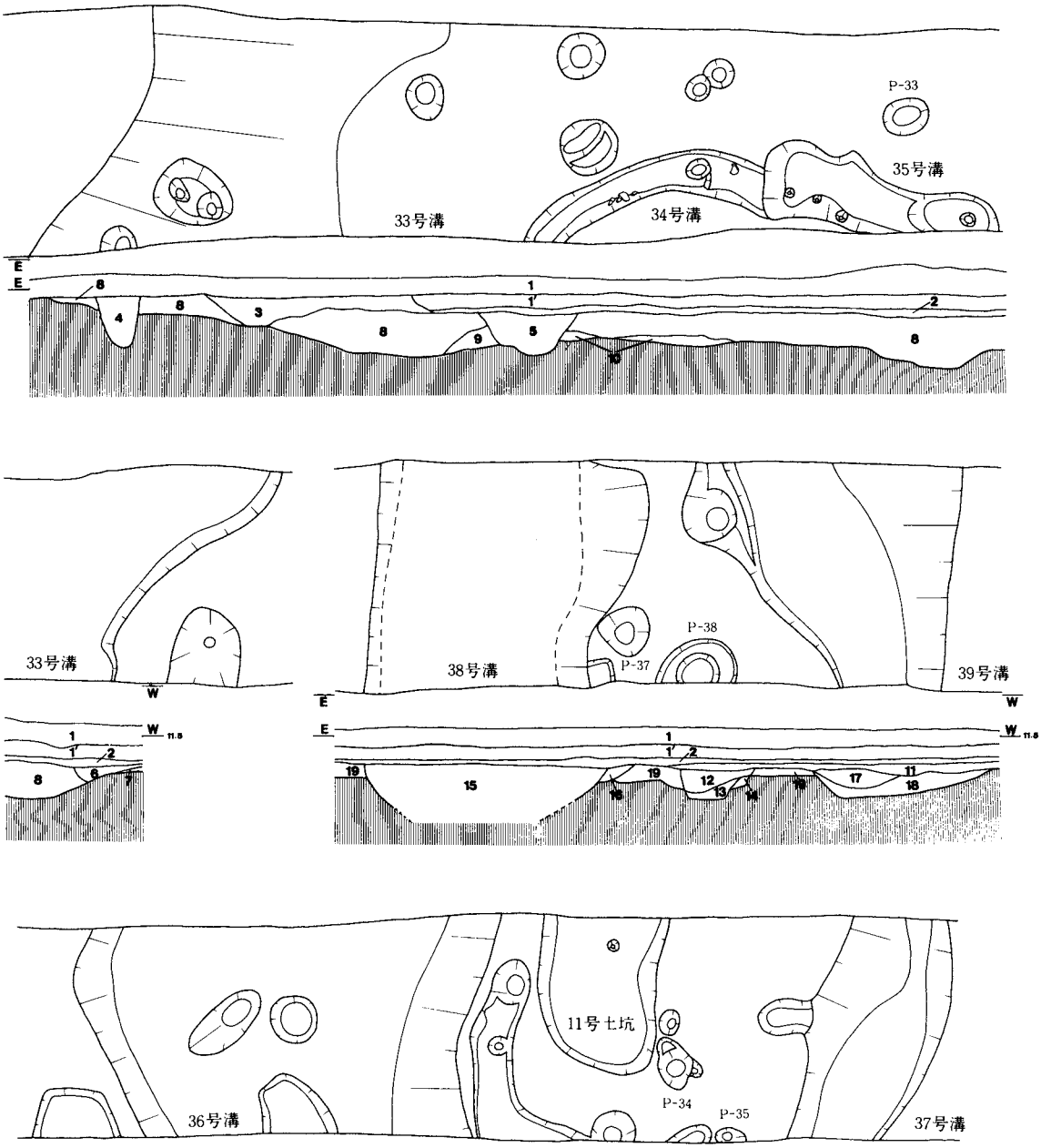
31号溝（第37、41－１、２図・図版34、44）

10号土坑、30号溝に接する。溝としての機能を果たしているかは定かでなく、調査区北壁の断面で見られる長さは6.5m、深さは70cmを測る。覆土は単質な褐色を呈している。１の口縁部はやや短く、端部には横ナデによる弱い面を持つ。２は脚部を欠くが、杯部が内湾気味に開く高杯と思われる。遺物量は多く他にも320点余りの土師器片が出土しており、口縁部下端に稜を持つ山陰系の甕や口縁端部を肥厚させる布留系甕の細片なども数点確認されている。なお



1．耕土
2．淡黄褐色粘質土層　－28号溝
5．濁灰色粘質土層
6．淡黄褐色粘質土層
7．暗灰褐色粘質土層
8．地山か？　} 26号溝
9．淡灰褐色粘質土層
10．濁灰色粘質土層　} 27号溝
11．淡灰色レキ層
12．淡灰褐色粘質土層　} 28号溝
13．淡黄灰色粘質土層
14．濁灰色粘質土層
15．黄灰色粘質土層
16．灰褐色粘質土層　} 30号溝
17．暗灰色粘質土層
18．暗灰褐色粘質土層
19．暗灰色粘質土層　} 10号土坑
20．地山か？
21．黄灰色粘質土層
22．濁黄灰色粘質土層
23．濁黄色粘質土層
24．褐色粘質土層
25．黄褐色粘質土層
26．褐色粘質土層
27．黄褐色粘質土層
28．褐色粘質土層
29．濁褐色粘質土層
30．黄褐色粘質土層
31．褐色粘質土層　} 31号溝
32．灰黄色粘質土層　－32号溝

第37図　D区遺構実測図1（S＝1/60）

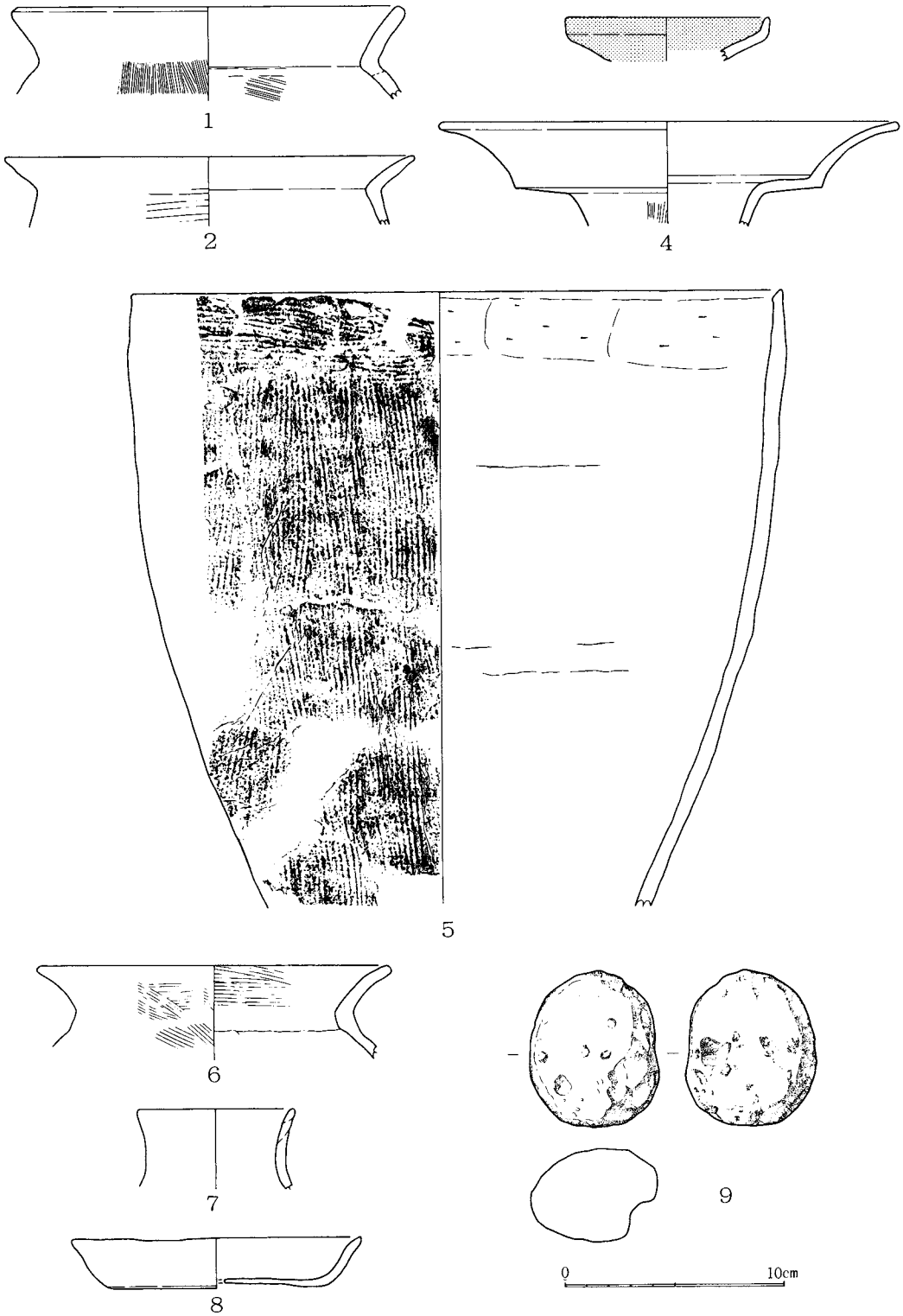


1．耕土
1′．淡黄灰色粘質土層
2．床土
3．灰黄色粘質土層
4．暗褐色粘質土層
5．褐色粘質土層　－34号溝
6．淡褐色粘質土層
7．褐灰色粘質土層
8．濁褐色粘質砂層
9．黄褐色粘質土層　33、35号溝
10．９と同層か

11．濁灰色粘質土層
12．褐色粘質土層
13．黄褐色粘質土層　Ｐ－38
14．濁黄色粘質土層
15．暗褐色礫層　－38号溝
16．褐色粘質土層
17．明黄色地山土層
18．黄褐色粘質土層　39号溝

0　2m

第38図　Ｄ区遺構実測図２（Ｓ＝1/60）

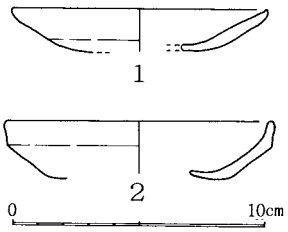


第39図　D区2号住居跡(1～4)、28号溝(5～9) 出土遺物実測図(S＝1/3)

隣接する32号溝からも65点の土師器片が出土しているが、特徴的な遺物はない。

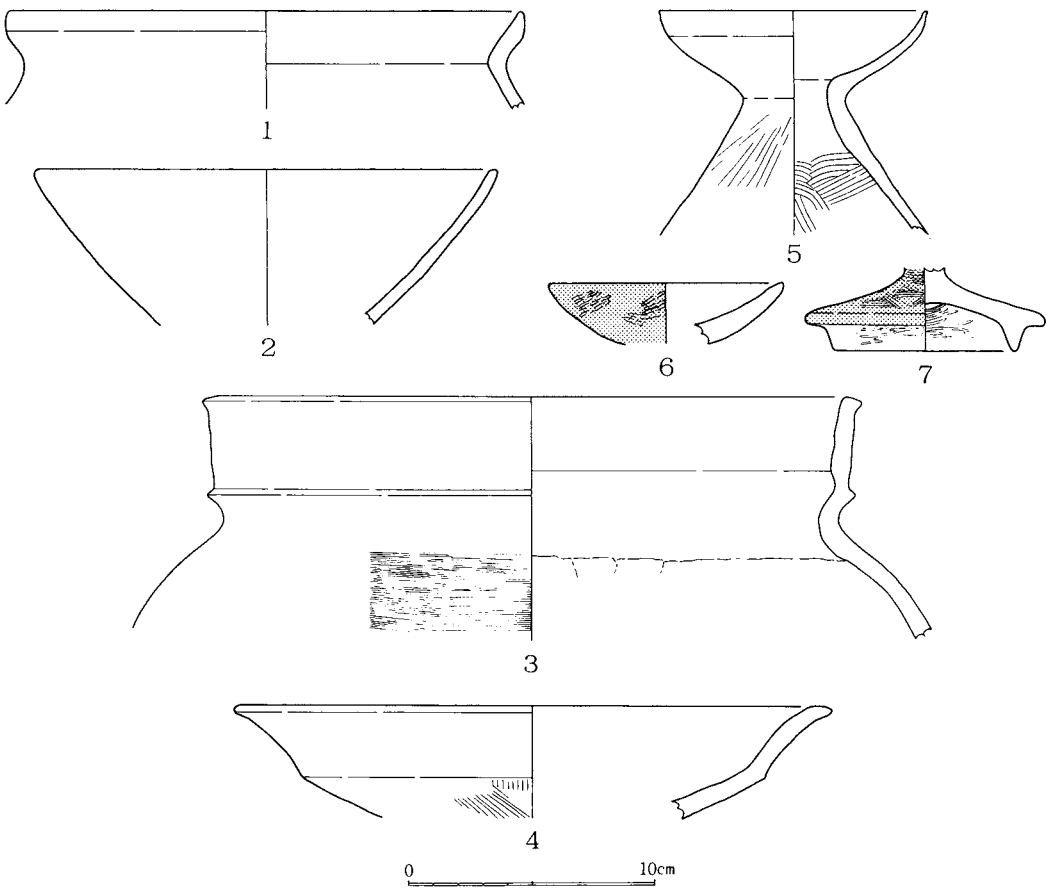
33号溝（第38、41－3、4図・図版44）

D－4、5区に位置する幅9.5m、深さ30cm前後の溝である。覆土は褐色粘質砂の単一層に近い。3は山陰系の大型の甕である。口縁は直立し、口唇部は面取りのためにやや肥厚する。外面には煤が付着する。

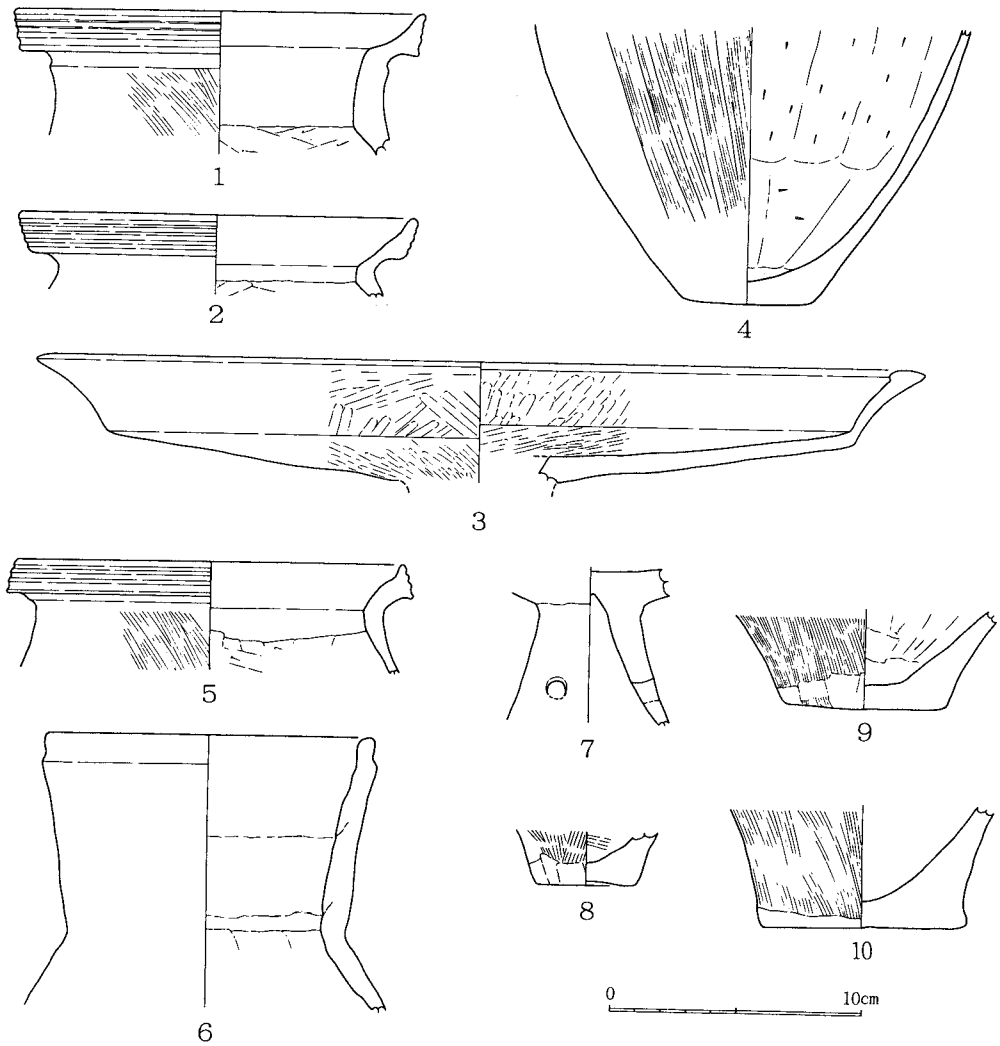


第40図　D区10号土坑出土土器実測図（S＝1/3）

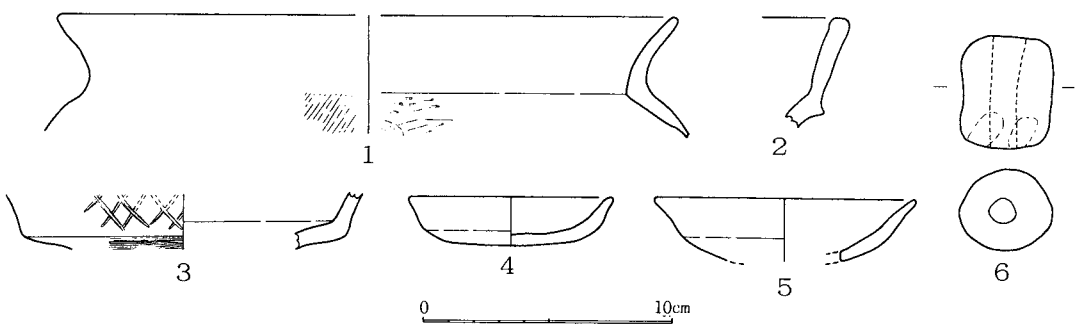
4は杯部途中で屈曲し、外反して開く口唇部内面には微かな面取りが施されている。砂粒の含みは少ない。4は弥生時代後期後半に属する高杯と思われ、出土した180点近くの土師器片の中にも同時期の甕口縁部片が数点認められる。その他3に付くような小型器台、山陰系甕なども見られるが、その時期的相違は34号溝などからの遺物の混入と理解しておきたい。



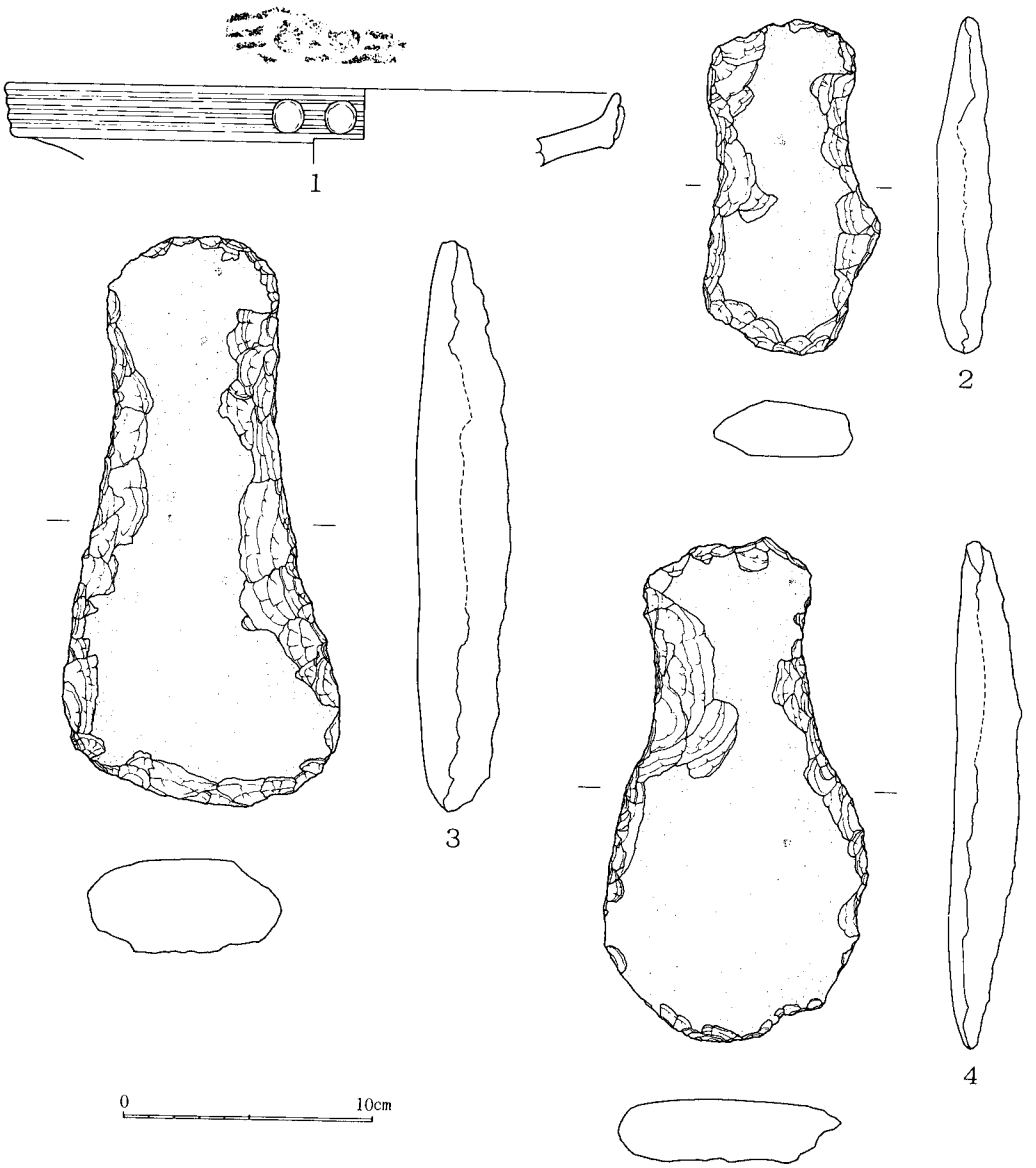
第41図　D区31号溝(1、2)、33号溝(3、4)、34号溝(5～7)出土土器実測図（S＝1/3）



第42図　D区38号溝(2)、39号溝(5～10)、包含層(1、3、4)出土土器実測図(S＝1/3)



第43図　D区ピット出土土器実測図(S＝1/3)



第44図　D区包含層他出土遺物実測図（S＝1/3）

34号溝・35号溝（第38、41－5～7図・図版44）

33号溝内に位置し、同溝が完全に機能を失った後に掘り込まれている。弧を描いており、周溝状になる可能性もあろう。5は深い受け部を持つ小型器台である。受け端部はつまみ上げ気味に先細りとなる。外面はヘラミガキ、脚部内面には粗いハケ調整が見られる。6も同器種である。器壁は厚く、受け端部は丸くおさめる。7は頭頂部につまみを持つ蓋である。内面には断面三角形の反りが付く。外面はヘラミガキ調整で赤彩が施されている。両溝からは他に50点程の土師器片が出土している。

38号溝（第38、42－２図・図版44）

幅２ｍを測る暗褐色の礫層であり、完掘されていない。遺物は上層でのみ確認されている。２は短めの縁帯に四条の擬凹線が巡る有段口縁甕。胎土には黒色で透明感のある輝石が目立つ。他に底部１点を含む計41点の土師器片が出ているが、周辺からの混入の可能性もある。

39号溝（第38、42－５～10図・図版44）

Ｄ－６区、38号溝の西隣に位置する。他の溝と同様南北に流れを持ち、調査区内での最大幅２ｍ、深さ25cmを測る。遺物量は17点とそう多くないが、形を残しているものがほとんどである。５は内傾する幅狭の口縁帯を持つ甕。肩部外面にはハケ調整、内面にはヘラケズリ調整が施されている。６は直線的に開く頸部を持つ壷。口縁部には横ナデにより段を設けている。内面に二ヶ所粘土の継ぎ痕が見られる。７は八の字状に開く脚部を持つ高杯。杯部上面には剝離面が認められる。８～10は底面のしっかりした、器壁の厚い底部である。外面にはタテハケ調整が見られる。溝の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

２号住居跡（第24、39－１～４図・図版43）

Ｃ、Ｄ区のＴ字型になった交点に位置しており、Ｄ区では周溝と床面の一部を検出している。１は口唇部に弱い凹線状の筋を持つ。肩部外面には細かいハケ調整が入り、煤の付着も見られる。２も「く」の字口縁甕であるが、器壁は薄く口縁端部は先細り気味となる。３は小型器台の受け部と思われる。端部を直立気味に強く屈曲させ、内外面には赤彩痕を残している。４は直立する頸部が特徴的な有段口縁壷である。口縁部は大きく外反し、有段部下端は水平面を持つ。他に240点の土師器片を確認しているが、その中には山陰系甕の口縁部片も１点含まれている。

ピット（第37、38、43図・図版44）

１は肩部外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。内面の屈曲部は鋭角的である。２は口縁部下端に稜を持つ。上端部はやや肥厚気味に面取りしている。３は口縁部外面に格子状のキザミの入る壷である。４は平面形が楕円を呈する土師器皿。器壁は厚く、口縁部は僅かに外反する。５は丸底に近くなると思われる土師器皿。口縁の開き具合は大きい。６は中央部がやや締まる土錘である。作りは雑である。１、２はＰ－26、３はＰ－34、４、５、６はそれぞれＰ－29、30、31から出土している。

包含層（第42、44図・図版44、45）

Ｄ区出土の包含層遺物は、ほとんどが弥生時代中後期～古墳時代前期に属すると思われる土師器片である。他には中世の土師器皿片が少量確認されている。第42図１は頸部が直立的に伸びる有段口縁の壷である。頸部上方は強い横ナデのために窪みを残している。３は内外面に丁寧なヘラミガキ調整が施された高杯。杯部上方で強く屈曲し、外反した口縁部の上端は肥厚面取りされる。４は外面に煤が付着する底部である。なお三点共に39号溝（弥生時代後期後半）の所在するＤ－６区から出土している。第44図１は口縁部外面に二個の円形浮文を配した装飾

壷。2～4は火山礫凝灰岩質の打製石斧である。

第2表は打製石斧の計測表である。これを見ると当遺跡の資料は縄文時代後～晩期の資料よりも大型であり、弥生時代前期～中期初頭に位置付けられる松任市八田中遺跡の資料に近い数値を示している。しかし手取扇状地上に立地する遺跡では古墳時代前期まで打製石斧が使用されているため、弥生時代前期～古墳時代前期の中での時期の特定は難しいと言える。

第2表　打製石斧計測表

資料＼cm	長さ	刃部幅	くびれ部幅	頭部幅	厚さ
後～晩期	9.0～17.0	4.0	～	7.0	1.5
八田中遺跡	15.8～20.5	6.6～11.0	5.6～7.1	6.0～7.5	2.1～4.1
宮永坊の森遺跡	13.6～22.6	5.7～11.0	5.4～7.0	5.8～7.7	2.2～3.8

参考文献

北村市英他　1979『旭郷土誌』旭郷土誌編纂委員会

田島明人他　1986『漆町遺跡』Ⅰ　石川県立埋蔵文化財センター

Ⅳ まとめ

当遺跡は弥生時代前期、中期、後期、古墳時代前期、鎌倉、室町時代の遺物を出土する複合遺跡である。遺構として確認できるものは中世期が最も多く、次に古墳時代前期、弥生時代中・後期と続いて行く。また遺物は出土するが時期を特定できない遺構も数は多い。ここでは調査区内での各期の遺構の拡がりを再確認することで簡単なまとめとしたい。

弥生時代中期

A区1号土坑、3、4号溝、B区4号土坑が挙げられる。宮永の集落に隣接した調査区北東側に位置する。遺物量も少なく詳細は不明であるが、3、4号溝はその遺構配置から方形周溝状を呈する可能性もある。遺構の拡がりはA・B区コーナー部分を中心とした調査区の東側を予想できよう。また上記遺構よりやや新しいものとしてB区5号土坑が挙げられるが単発的である。

弥生時代後期

C区落ち込み、D区33、38、39号溝が挙げられる。特に39号溝の位置するD－6区からは包含層資料も含めて、ある程度まとまった数の遺物が出土している。法仏式期に属すると思われ、現在は弥生時代後期後半近くに比定されている。該期の遺構は調査区南側の宮永市方面への拡がりが予想される。

古墳時代前期

当遺跡での遺物量が最も多い時期である。遺構はC区に集中するが、布留傾向甕の出現を境とする漆・5、6群土器と漆・7、8群土器を出土する遺構に分かれる。前者の遺構としてはC区21、22、24号溝、1号住居跡などが挙げられる。21号溝の性格は不明であるが、平地式住居跡に伴う浅い不整形な周溝状遺構になる可能性も考えられよう。また後者の遺構としてはC区8号土坑、C・D区2号住居跡などが挙げられる。なお1、2号住居跡共に平面形は定かではなく、その間にどれだけの時間差があるのかも不明であるが、住居を設置する場所へのこだわりは両者間の時間的継続性を感じさせる。

中　世

遺構としてはA、B、D区で確認されており最も数が多いが、時期を特定できる遺構は少ない。A区では3号土坑、6～8号溝、1号井戸、P－1、B区では10～12号溝、15号溝、2号井戸、D区では10号土坑、26～28号溝、30号溝、P－29～31などが挙げられる。遺物は全体に中世後半期のものが多く、周知の遺跡と時期的には合致するが「坊の森寺跡」と言われるような“寺”の存在を確認することはできなかった。なおB区2号井戸からは12世紀後半近くまで上る遺物も出土しており、面的に調査すれば、より時期幅の広い中世遺跡になる可能性もある。

松任では広範囲において圃場整備に伴う点、線的な発掘調査が実施されている。近い将来その成果が集積されて、面的な結果が生み出されることを切に期待したい。

第3表　遺物観察表　（1）

挿図番号	出土地点	器種等	法量（cm）	色調〔外内〕	備考
13－1	1号井戸	おろし皿	底径9.2	淡黄橙色	瀬戸系陶器
13－2	1号井戸	甕	底径15.6	灰色系	加賀焼
13－3	1号井戸	甕		灰色系	珠洲焼
13－4	1号井戸	砥石	長12.6 幅7.8 厚4.3	淡緑色	
13－5	1号土坑	底部	底径4.6	褐色系 灰色系	
13－6	包含層	行火蓋		黄灰色系	A区
14－1	4号溝	底部	底径7.2	黄色系	内外面黒斑
14－2	7号溝	石臼	径29.5 高7.2	黄灰色	粉挽臼、上臼
14－3	7号溝	石臼	径29.5 高6.0	黄灰色	粉挽臼、下臼
15－1	P－1	石臼	径31.0 高8.2	黄灰色	粉挽臼、上臼
18－1	4号土坑	壺	口径18.4	淡橙色系	
18－2	4号土坑	壺	口径15.0	褐色系 灰色系	
18－3	4号土坑	壺		黄色系	
18－4	4号土坑	壺		褐色系 橙色系	海綿骨片少量含む
18－5	4号土坑	底部	底径7.2	黄色系 灰色系	海綿骨片少量含む
18－6	4号土坑	底部	底径6.3	褐色系	
19－1	11号溝	碗		明緑灰色	青磁
19－2	11号溝	甕		灰色系	珠洲焼
19－3	12号溝	甕		暗褐色	越前焼
19－4	12号溝	石臼	径23.3 高4.6	黄灰色	粉挽臼、下臼
19－5	15号溝	石臼	径32.5 高7.8	黄灰色	粉挽臼、下臼
19－6	5号土坑	甕	口径18.2	橙色系	海綿骨片含む
20－1	2号井戸	碗		オリーブ灰色	青磁
20－2	2号井戸	碗	底径4.5	淡灰色	白磁
20－3	2号井戸	甕		灰色系	珠洲焼
20－4	2号井戸	鉢	口径37.8 底径15.0 高11.5	橙色系	越前焼
20－5	2号井戸	石臼	径(33.6) 高11.4	黄灰色	粉挽臼、下臼
21－1	包含層	壺	口径25.6	黄色系	B区、海綿骨片含む
21－2	包含層	甕	口径14.0	橙色系	B区

挿図番号	出土地点	器種等	法量（cm）	色調〔外内〕	備考
21－3	包含層	土錘	長3.9 幅3.3	橙色	B区、30.4g
21－4	包含層	打製石斧	長17.9 刃部幅9.0 厚3.5	黄灰色	B区
25－1	22号溝	甕	口径18.0	橙色系	
25－2	22号溝	高杯	杯径16.2	黄色系	
25－3	19号溝	底部	底径7.7	橙色系	P－12 出土
25－4	19号溝	底部	底径3.6	褐色系	海綿骨片含む
25－5	19号溝	打製石斧	長16.8 刃部幅11.0 厚3.5	黄灰色	
26－1	21号溝	甕	口径17.3	黄色系	第27図P－1・2
26－2	21号溝	底部	底径3.2	黄色系	第27図P－1・2
26－3	21号溝	壺	口径13.3 底径4.0 高26.7	黄色系 灰色系	第27図P－3
26－4	21号溝	器台	受径9.2 脚径13.0 高9.5	橙色系	第27図P－4 海綿骨片含む
26－5	21号溝	器台	受径20.9 脚径15.6 高13.6	白色系	第27図P－5 内外面赤彩
26－6	21号溝	鉢	口径9.2 底径3.8 高5.4	白色系	第27図P－6
28－1	8号土坑	甕	口径18.0	褐色系	海綿骨片含む
28－2	8号土坑	甕	口径19.2	褐色系	
28－3	8号土坑	壺	口径16.0	黄色系	海綿骨片含む
29－1	1号住	甕		橙色系	上層
29－2	1号住	甕	口径19.8	橙色系	上層
29－3	1号住	甕	口径19.7	橙色系	上層
29－4	1号住	甕	口径15.2	黄色系	上層
29－5	1号住	壺	口径24.5	黄色系	上層、内外面赤彩
29－6	1号住	壺	口径25.9	白色系	上層
29－7	1号住	壺	口径8.1	橙色系	上層
29－8	1号住	高杯	杯径13.0	黄色系	上層、外面赤彩
29－9	1号住	高杯		橙色系	上層、海綿骨片含む
29－10	1号住	器台		橙色系	上層
29－11	1号住	器台		橙色系	上層
29－12	1号住	高杯		褐色系	上層
29－13	1号住	不明	長12.5 幅9.7 厚2.8	黄灰色	上層

挿図番号	出土地点	器種等	法量（cm）	色調〔外内〕	備考
30－1	1号住	甕	口径17.6	橙色系	中層
30－2	1号住	甕	口径18.6	橙色系	中層
30－3	1号住	甕	口径(17.0)	黄色系 橙色系	中層
30－4	1号住	甕	口径19.4	橙色系	中層
30－5	1号住	甕	口径20.0	黄色系	中層
30－6	1号住	甕	口径13.4	橙色系	中層、海綿骨片少量含む
30－7	1号住	壺	口径16.4	橙色系	中層
30－8	1号住	壺	口径12.2	黄色系	中層、海綿骨片少量含む
30－9	1号住	壺	口径14.0	褐色系	中層、海綿骨片少量含む
30－10	1号住	壺	口径13.0	橙色系	中層、海綿骨片含む
30－11	1号住	壺	口径(9.4)	橙色系	中層、外面赤彩
30－12	1号住	壺		黄色系	中層
31－13	1号住	器台	受径10.6	黄色系	中層、内面赤彩
31－14	1号住	高杯	杯径12.8	白色系	中層、内外面赤彩
31－15	1号住	器台	脚径12.8	橙色系	中層、内外面赤彩
31－16	1号住	脚部	脚径15.4	橙色系	中層
31－17	1号住	脚部	脚径18.4	橙色系	中層、海綿骨片含む
31－18	1号住	鉢		橙色系	中層、外面赤彩、海綿骨片含む
31－19	1号住	底部	底径5.5	褐色系 黒色系	中層
31－20	1号住	底部	底径2.4	黄色系 暗灰色系	中層、シャーモット多量含む
31－21	1号住	甕	口径(24.0)	褐色系	周溝内、海綿骨片少量含む
31－22	1号住	甕	口径19.5	褐色系	床面
31－23	1号住	甕	口径15.0	黄色系	周溝内
31－24	1号住	甕	口径17.4	褐色系	下層
31－25	1号住	器台	受径9.2	褐色系	下層、海綿骨片多量含む
31－26	1号住	底部	底径2.4	橙色系	下層
32－1	2号住	甕	口径13.0	褐色系 橙色系	P－18出土
32－2	2号住	甕	口径16.4	褐色系	
32－3	2号住	壺	口径12.4	橙色系	

挿図番号	出土地点	器種等	法量（cm）	色調〔外内〕	備考
32－4	2号住	甕	口径14.4	橙色系	
32－5	2号住	壺	口径9.6	白色系	床面
32－6	2号住	器台		黄色系	内外面赤彩
32－7	2号住	高杯	杯径20.8	橙色系	
33－1	23号溝	甕	口径17.4	橙色系	
33－2	23号溝	器台	受径8.1 脚径11.0 器高7.7	橙色系	
33－3	23号溝	底部	底径0.8	橙色系	底部穿孔
34－1	24号溝	甕	口径16.3	橙色系	海綿骨片少量含む
34－2	24号溝	甕	口径16.8	橙色系	
34－3	24号溝	甕	口径(17.6)	褐色系	
34－4	24号溝	甕	口径15.2	褐色系	
34－5	24号溝	甕	口径17.6	橙色系	海綿骨片少量含む
34－6	24号溝	甕	口径18.2	黄色系	海綿骨片少量含む
34－7	24号溝	壺	口径13.8	橙色系	
34－8	24号溝	壺	口径19.0	橙色系	
34－9	24号溝	器台	受径9.0	橙色系	
34－10	24号溝	高杯	脚径9.5	橙色系	
34－11	24号溝	底部	底径3.0	橙色系	
35－1	落ち込み	甕	口径16.0	橙色系	上層、海綿骨片少量含む
35－2	落ち込み	甕	口径29.4	橙色系	上層、海綿骨片少量含む
36－1	包含層	甕	口径14.6	橙色系	C区、海綿骨片含む
36－2	包含層	甕	口径19.0	橙色系	C区
36－3	包含層	甕	口径20.0	橙色系	C区
36－4	包含層	壺		黄色系	C区
36－5	包含層	壺		黄色系	C区、4と同一個体か
36－6	包含層	器台		橙色系	C区
36－7	包含層	高杯		橙色系	C区
36－8	包含層	鉢	口径11.4 器高10.0	褐色系	C区、内外面赤彩、海綿骨片含む
36－9	包含層	脚台部	脚径8.8	橙色系	C区、海綿骨片少量含む

挿図番号	出土地点	器種等	法量（cm）	色調〔外内〕	備考
36－10	包含層	鉢	口径20.0	黄色系	C区、加賀焼
36－11	包含層	鉢		橙色系	C区、越前焼
36－12	包含層	皿		白色系	C区、染付
39－1	2号住	甕	口径17.4	褐色系	
39－2	2号住	甕	口径18.8	褐色系	
39－3	2号住	器台	受径9.2	黄色系	内外面赤彩
39－4	2号住	壺	口径20.6	橙色系	
39－5	28号溝	深鉢	口径29.6	褐色系	海綿骨片多量含む
39－6	28号溝	甕	口径15.3	橙色系	
39－7	28号溝	壺	口径7.0	黄色系	
39－8	28号溝	皿	口径13.2 底径10.1 高2.3	橙色系	
39－9	28号溝	軽石	最長7.2 幅5.7	黄灰色	
40－1	10号土坑	皿	口径10.1	橙色系	
40－2	10号土坑	皿	口径10.6	橙色系	
41－1	31号溝	甕	口径20.2	橙色系	
41－2	31号溝	高杯	杯径17.6	褐色系	
41－3	33号溝	甕	口径26.2	橙色系	
41－4	33号溝	高杯	杯径23.8	褐色系	
41－5	34号溝	器台	受径10.6	褐色系	
41－6	34号溝	器台	受径9.4	橙色系	外面赤彩
41－7	34号溝	蓋	口径7.2	橙色系	外面赤彩
42－1	包含層	壺	口径16.0	橙色系	D区
42－2	38号溝	甕	口径15.5	褐色系	
42－3	包含層	高杯	杯径35.0	褐色系	D区
42－4	包含層	底部	底径5.2	白色系 灰色系	D区
42－5	39号溝	甕	口径15.4	黄色系	
42－6	39号溝	壺	口径12.7	黄色系	
42－7	39号溝	高杯		黄色系	
42－8	39号溝	底部	底径4.0	白色系 褐色系	

挿図番号	出土地点	器種等	法量（cm）	色調〔外 内〕	備考
42－9	39号溝	底部	底径6.2	黄色系	
42－10	39号溝	底部	底径7.8	黄色系	
43－1	P－26	甕	口径24.2	褐色系	
43－2	P－26	甕		橙色系	
43－3	P－34	壺		白色系 灰色系	海綿骨片少量含む
43－4	P－29	皿	口径8.0 器高2.0	褐色系	
43－5	P－30	皿	口径10.2	橙色系	
43－6	P－31	土錘	長4.5 幅3.5	橙色系	49.5g
44－1	包含層	壺	口径24.3	橙色系	D区
44－2	包含層	打製石斧	長13.6 刃部幅5.7 厚2.2	黄灰色	D区
44－3	包含層	打製石斧	長22.6 刃部幅11.0 厚3.8	黄灰色	D区
44－4	包含層	打製石斧	長20.0 刃部幅10.5 厚2.5	黄灰色	D区

図版1

調査区周辺の航空写真（S＝1/4,000）

図版2

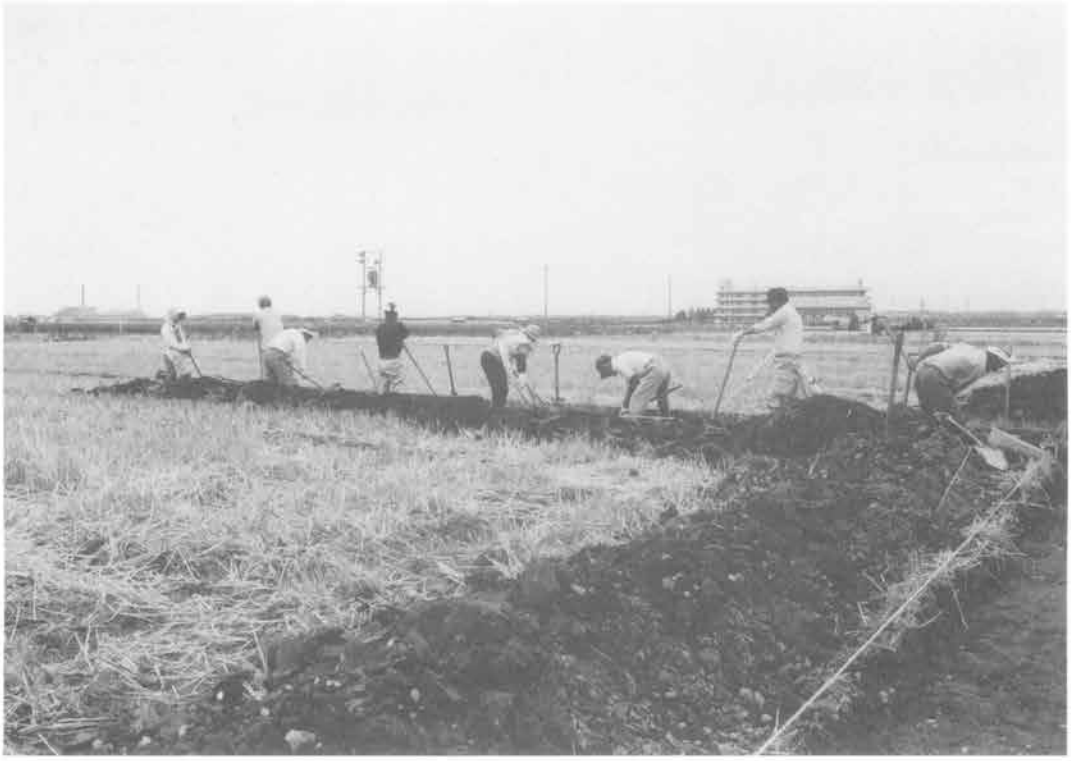
遺構完掘状況（C区）

遺物出土状況（C区・21号溝内）

遺跡周辺の航空写真(S＝1/12,500)

図版4

調査前状況(西から)



田面部分布調査作業状況(南から)

A区掘り下げ状況 1（北から）

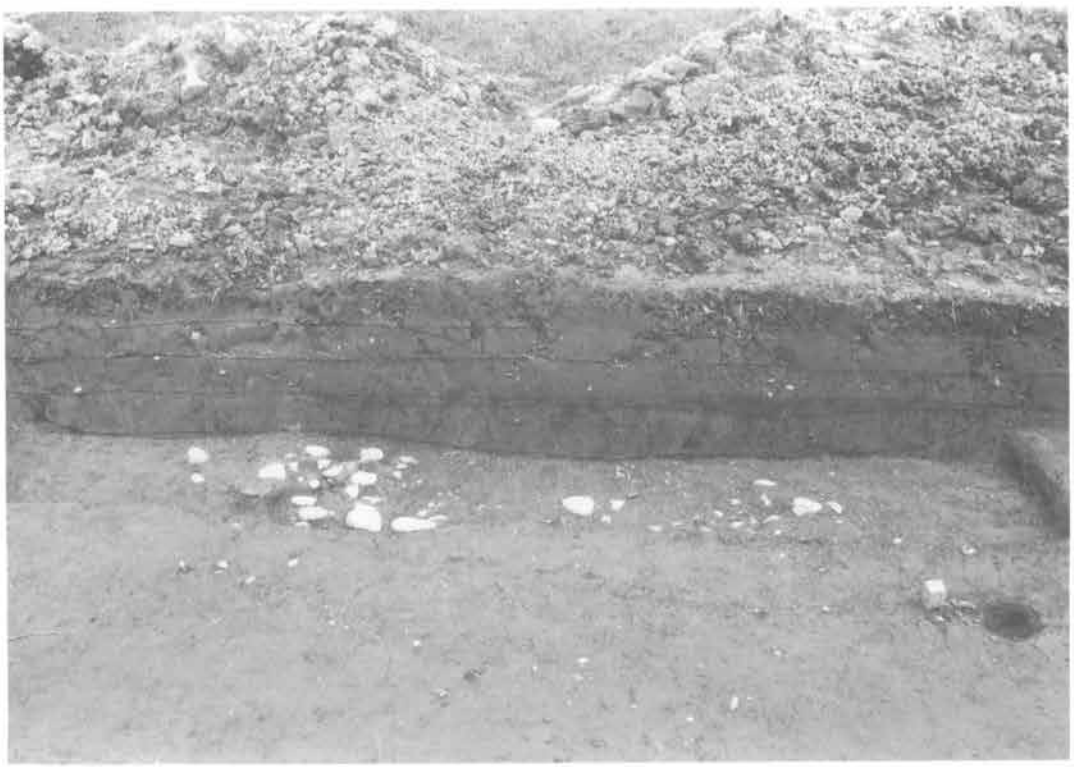
A区遺構完掘状況3（南から）

A区遺構完掘状況2（南から）

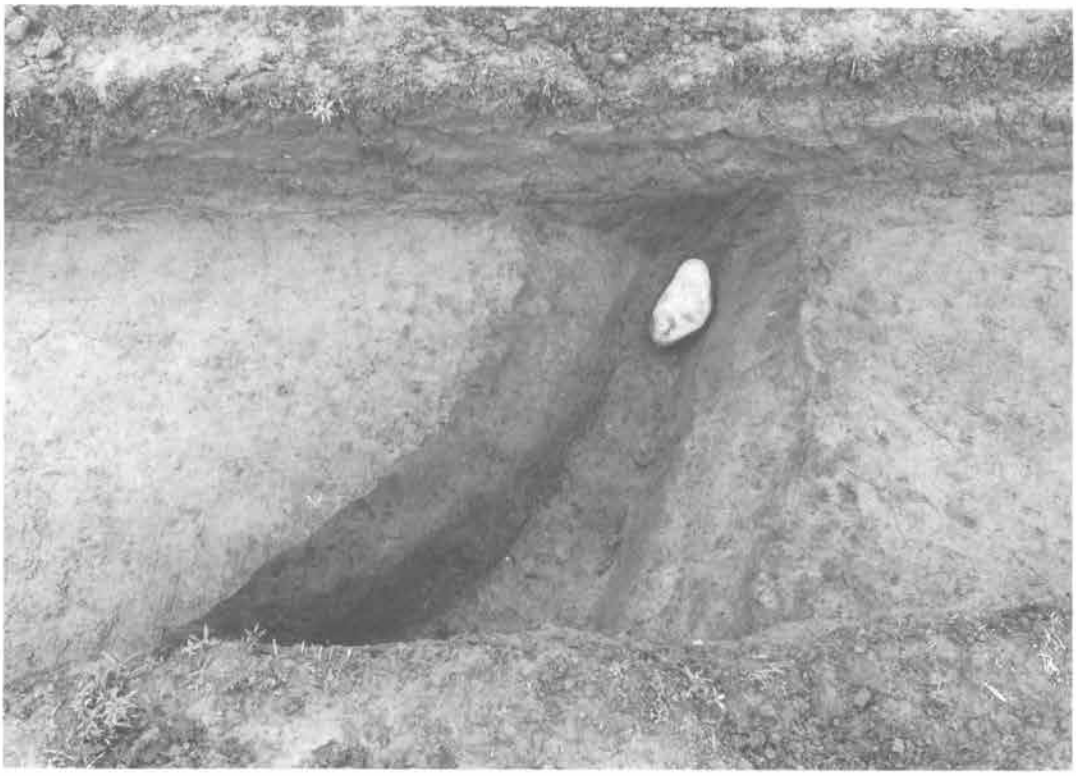
A区調査作業状況(北から）

図版6

A区1号土坑完掘状況(北から)



A区1号土坑土層断面(西から)



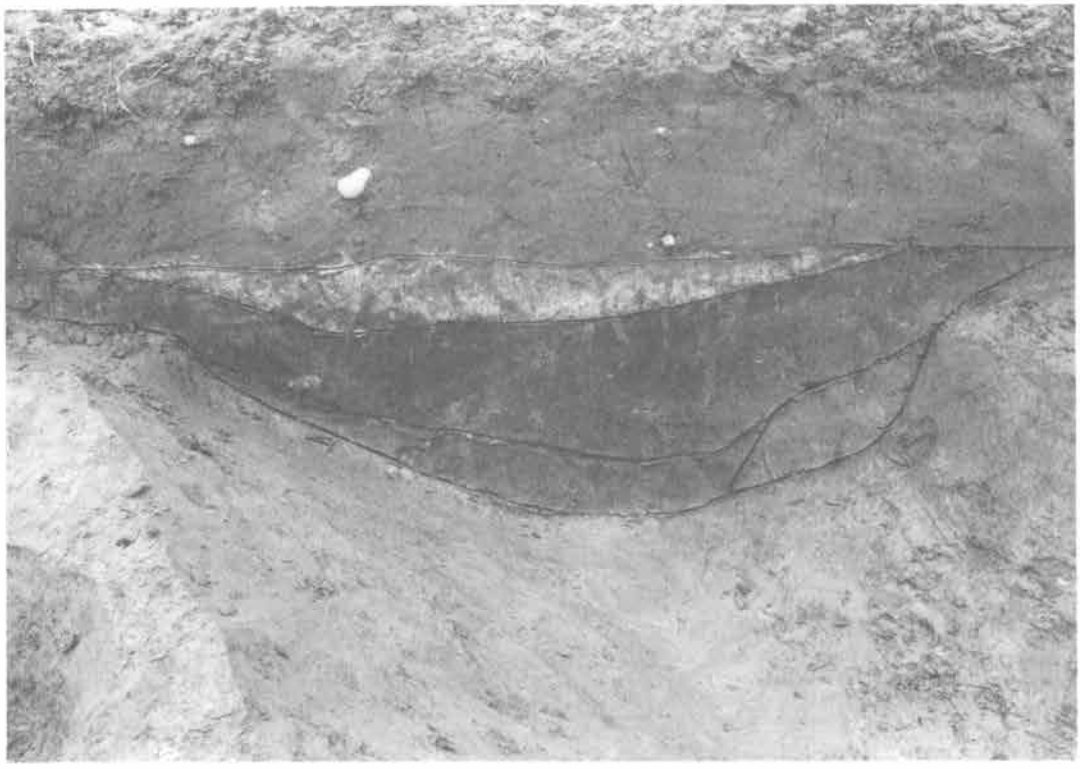
A区1号溝完掘状況(西から)

A区1号溝土層断面(西から)

A区1号井戸掘り下げ状況1（南から）

A区1号井戸掘り下げ状況2（西から）

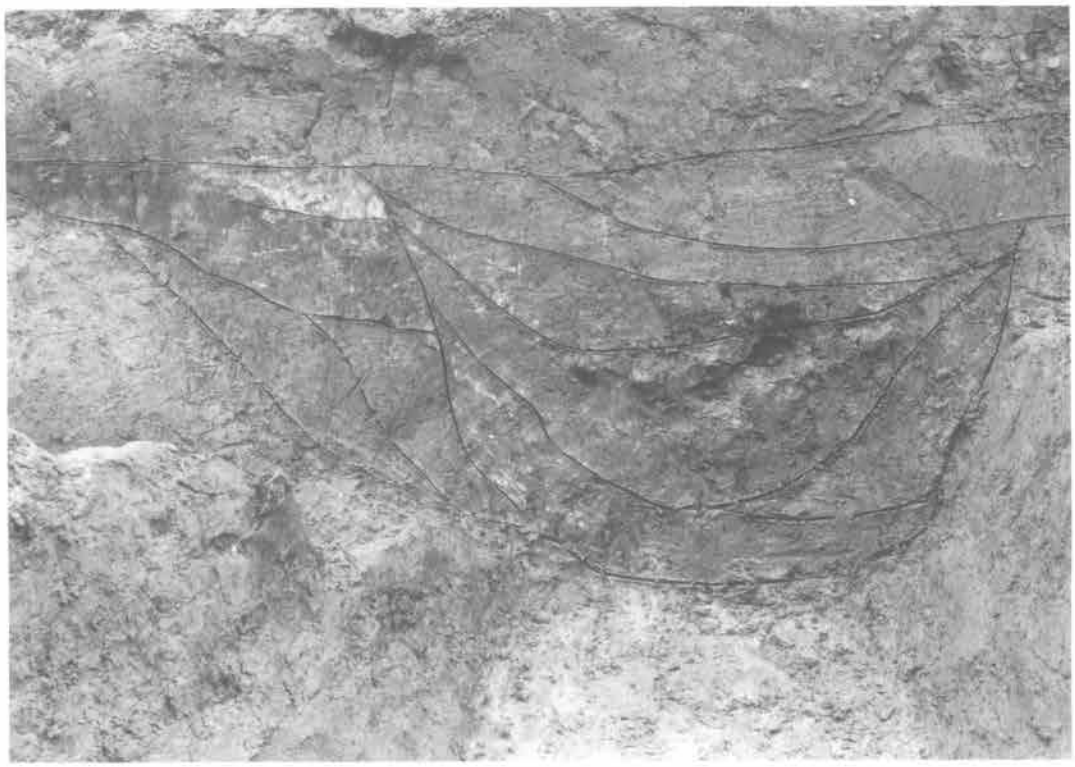
A区3号溝完掘状況(西から)



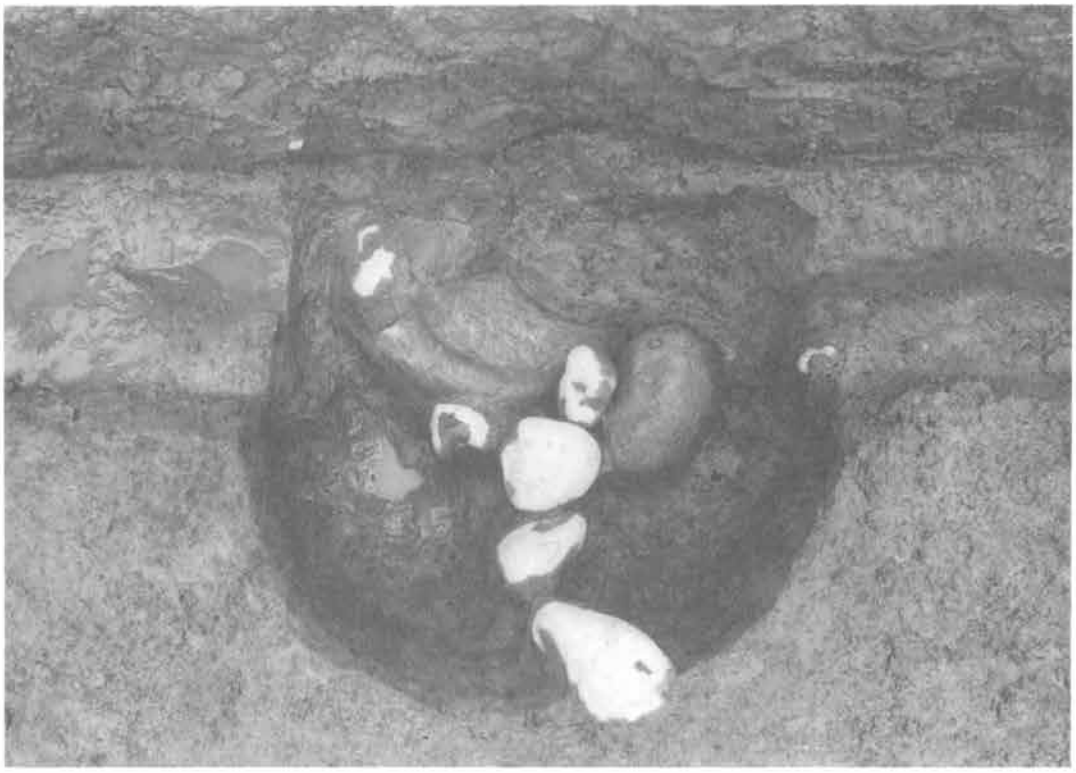
A区3号溝土層断面(西から)

図版10

A区4・5号溝完掘状況(西から)



A区4・5号溝土層断面(西から)



A区P-1石白出土状況(西から)

A区2・3号土坑完掘状況(南から)

図版12

A区8号溝完掘状況(西から)

A区8号溝土層断面(西から)

A区9号溝完掘状況(西から)

A区9号溝土層断面(西から)

図版14

B区4号土坑完掘状況(東から)

B区遺構完掘状況2(東から)

B区遺構完掘状況1(東から)

B区調査作業状況(西から)

B区遺構完掘状況3（西から）

B区遺構完掘状況4（東から）

B区15号溝石白出土状況(西から）

B区完掘状況5（西から）

図版16

B区10号溝完掘状況（西から）

B区10号溝土層断面（南から）

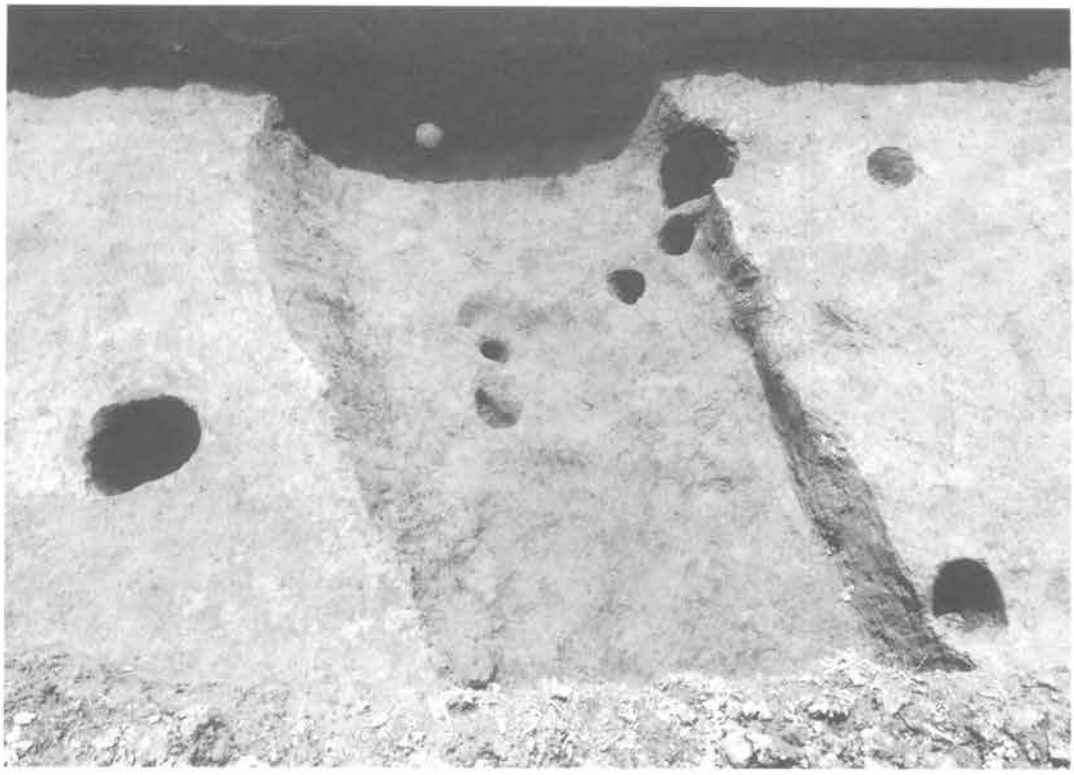
B区13・14号溝完掘状況(南から)

B区13・14号溝土層断面(南から)

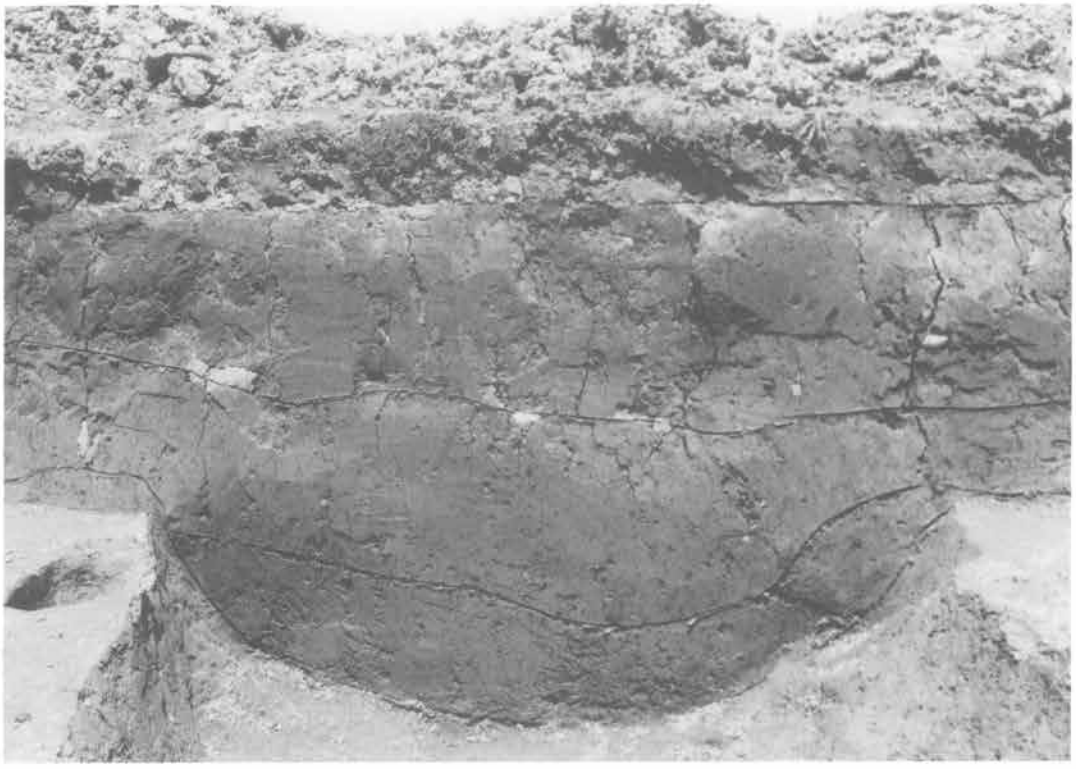
図版18

B区2号井戸完掘状況(南から)

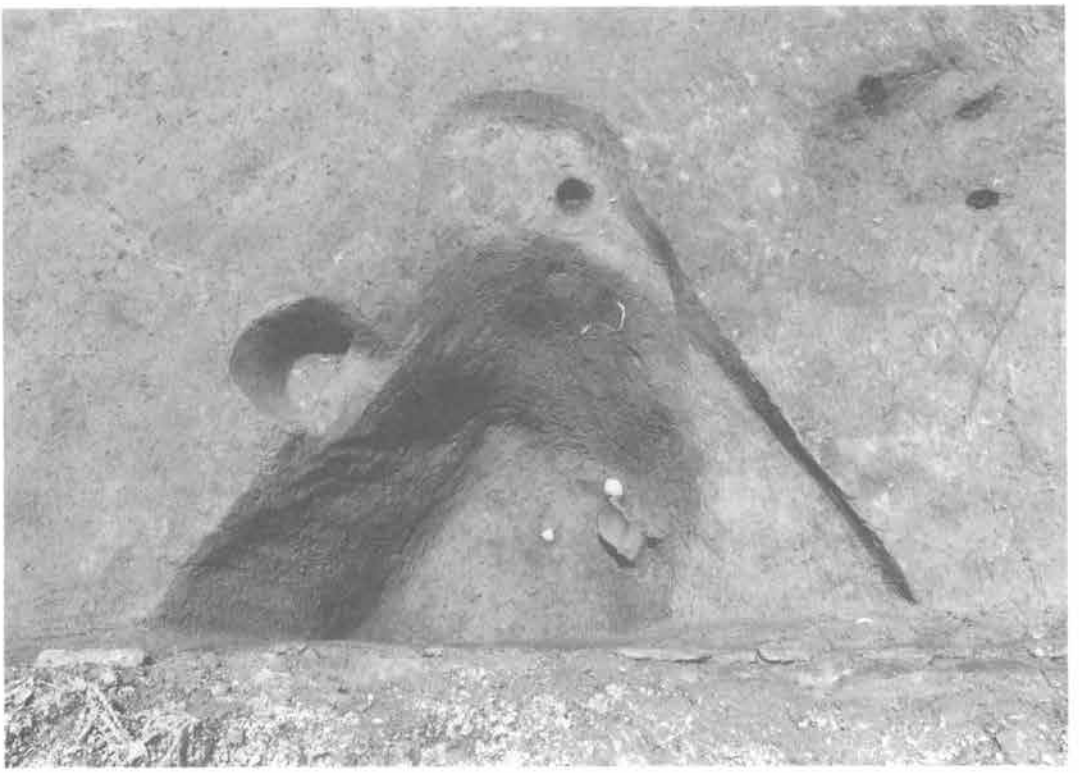
B区2号井戸土層断面(北から)



B区18号溝完掘状況(北から)



B区18号溝土層断面(南から)



B区5号土坑完掘状況(北から)

B区5号土坑土層断面(南から)

C区遺構完掘状況１（北から）

C区遺構完掘状況２（北から）

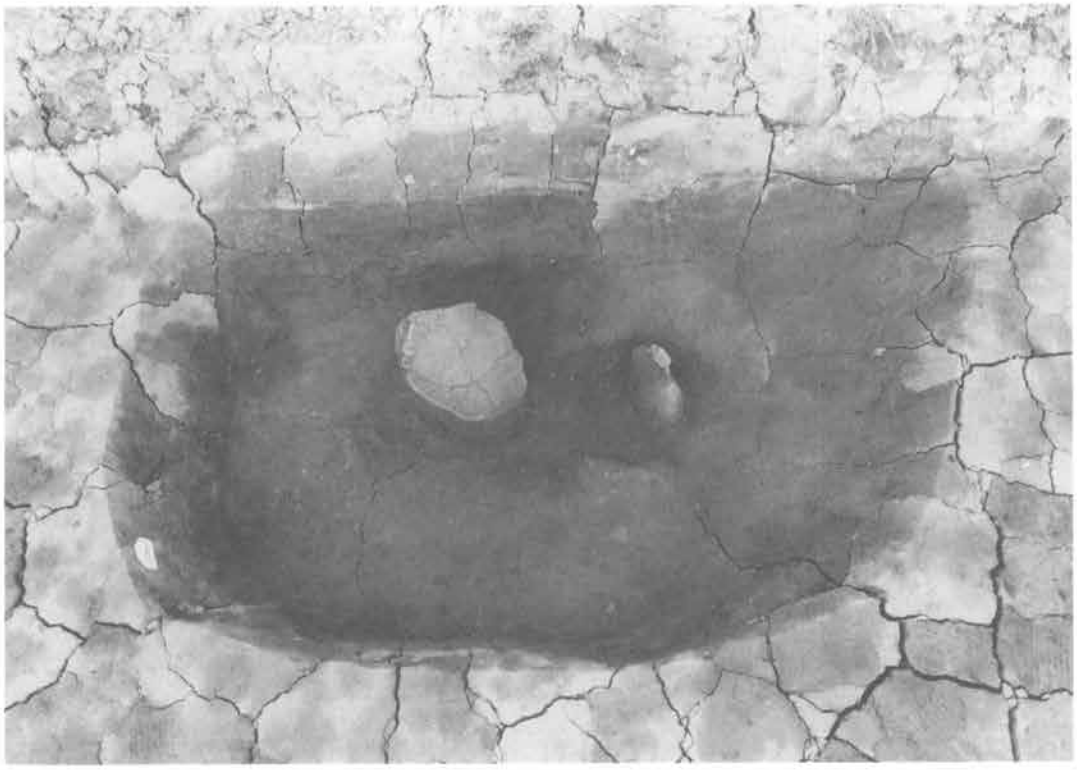
C区20～22号溝完掘状況（南から）

C区１・２号住居跡完掘状況（南から）

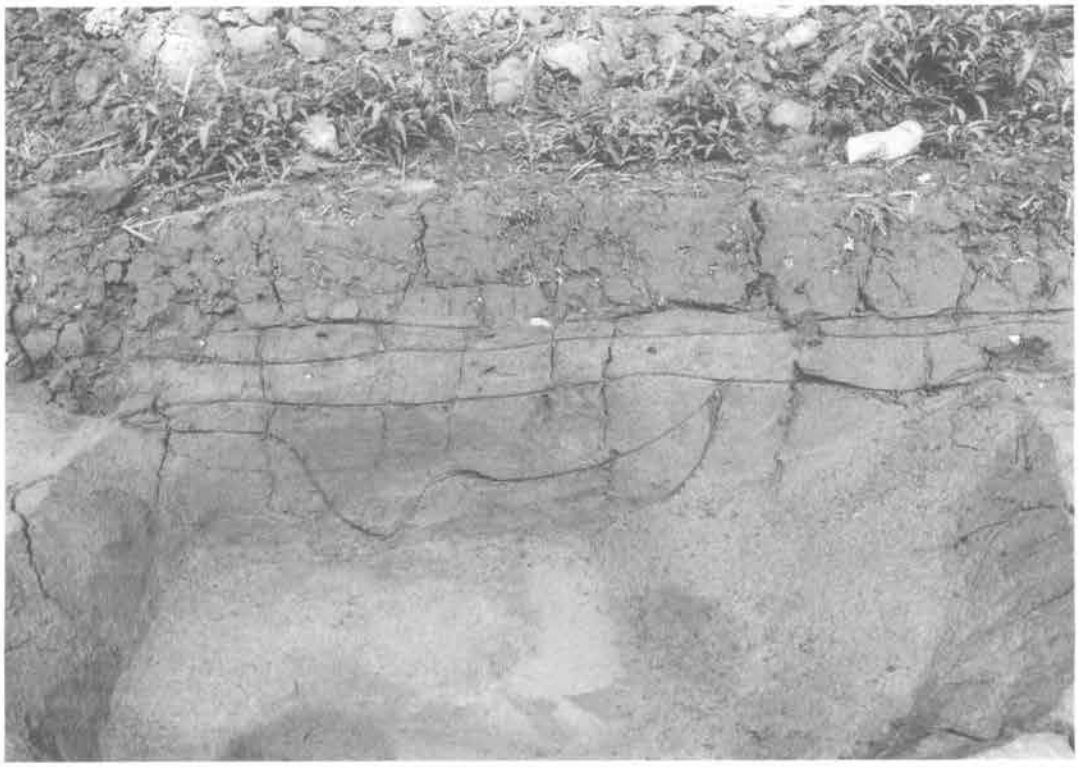
図版22

C区遺構完掘状況3（南から）

C区遺構完掘状況4（北から）

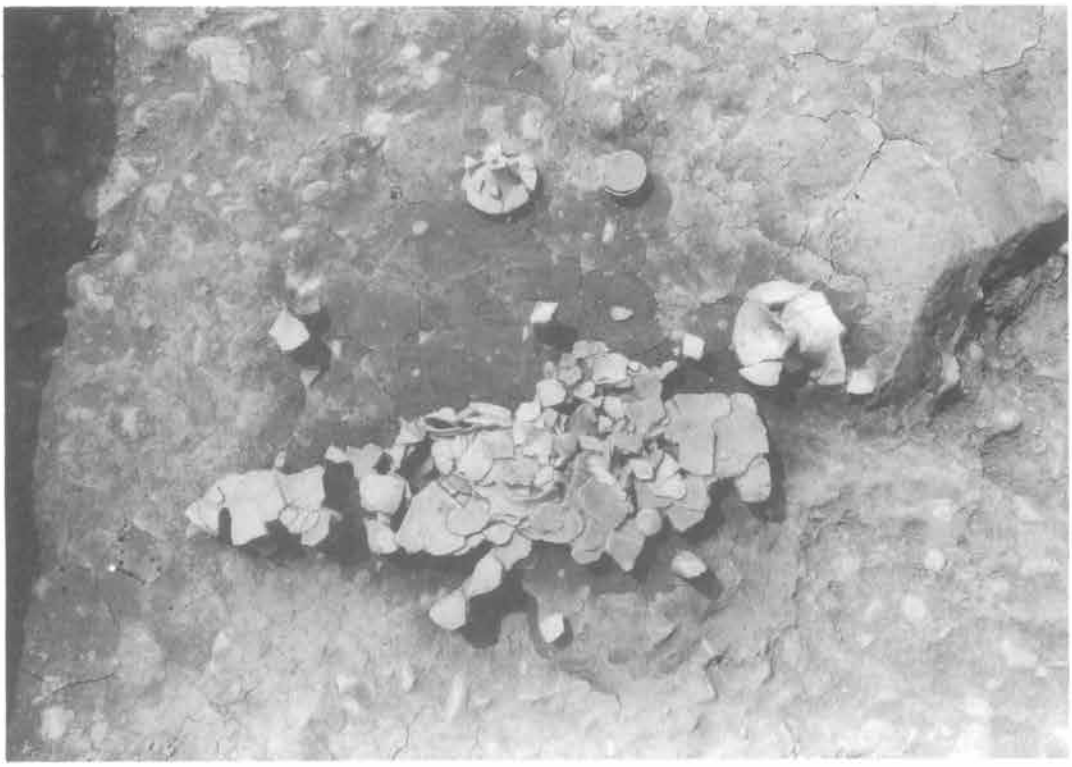


C区6号土坑完掘状況(西から)



C区6号土坑土層断面(西から)

C区21号溝遺物検出状況(西から)



C区21号溝遺物出土状況(北から)

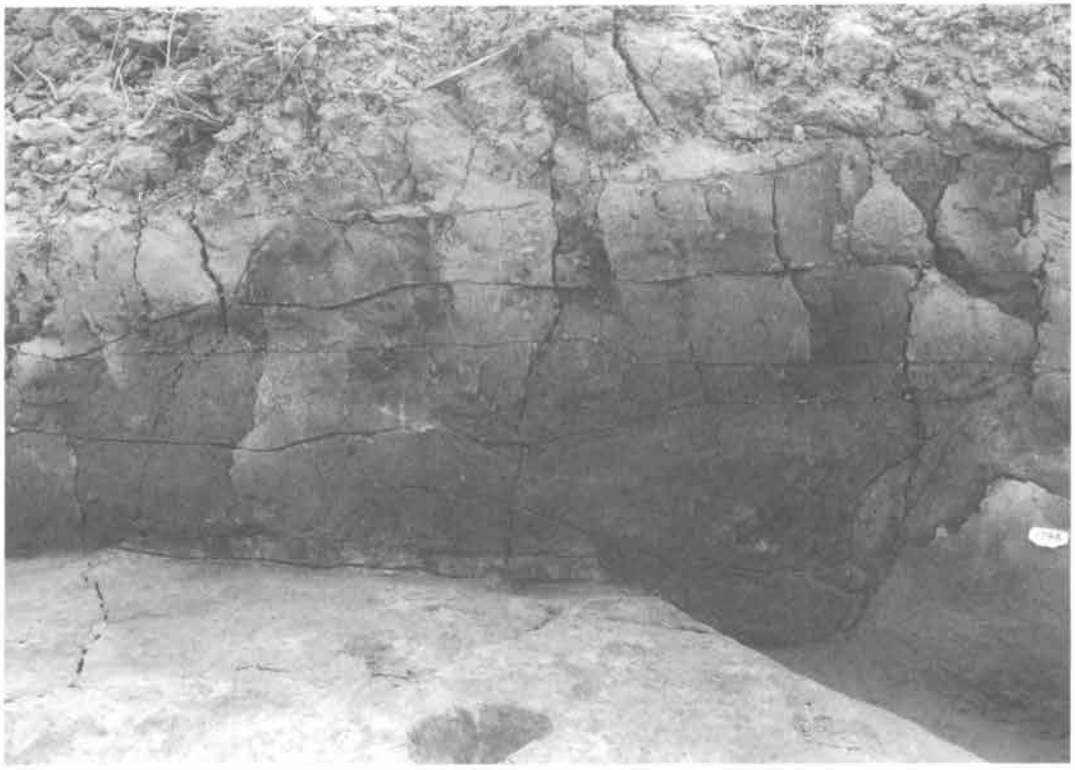
C区21号溝遺物実測作業状況(北から)

C区22号溝土層断面(北から)

C区1号住居跡完掘状況(北から)

C区1号住居跡土層断面(西から)

C・D区2号住居跡完掘状況(東から)



C区2号住居跡土層断面(西から)

C区24号溝完掘状況(南から)

C区24号溝遺物出土状況(西から)

C区ピット群完掘状況(西から)

C区落ち込み完掘状況(西から)

D区遺構完掘状況1（東から）

D区遺構完掘状況2（西から）

D区遺構完掘状況3（東から）

D区遺構完掘状況4（西から）

D区遺構完掘状況5（西から）

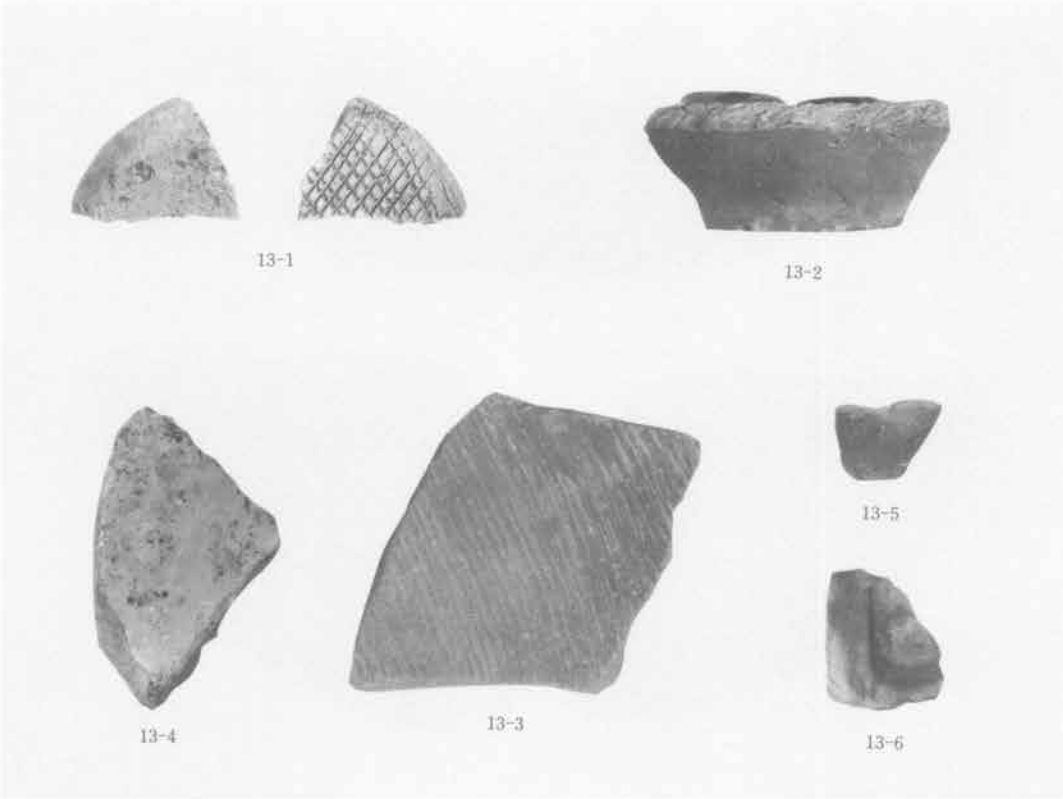
D区26号溝完掘状況（北から）

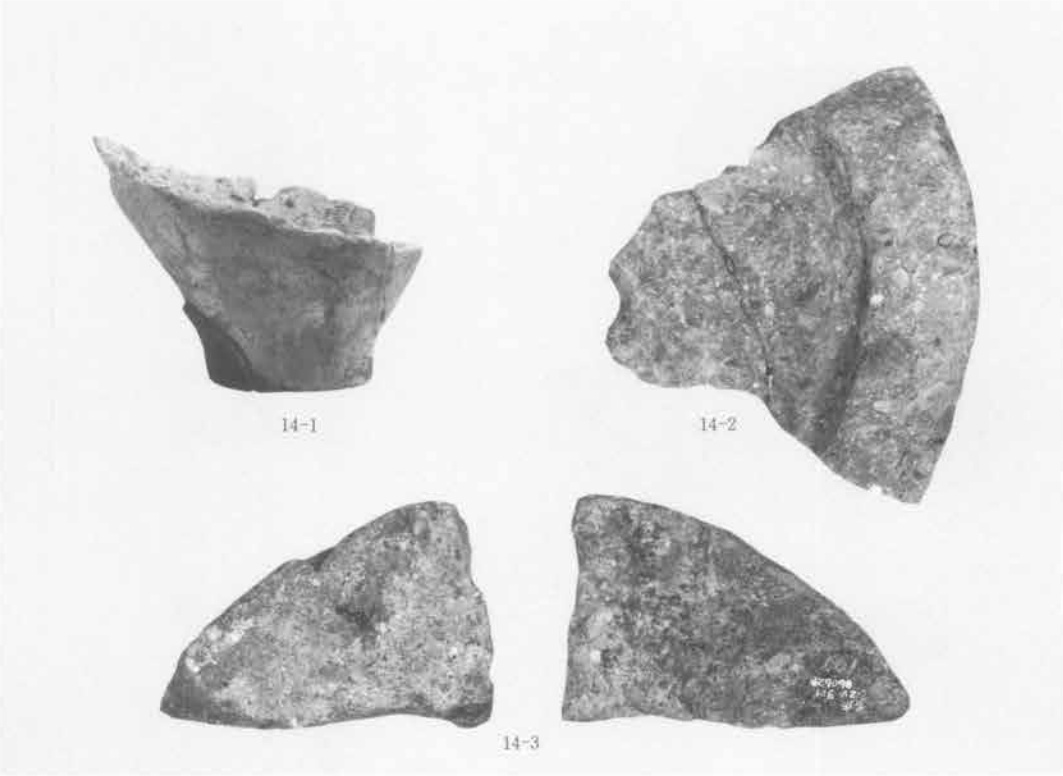
D区27号溝完掘状況(北から)

D区27号溝土層断面(南から)

D区10号土坑、30～32号溝完掘状況(南から)

D区10号土坑、30号溝土層断面(北から)





A区出土遺物（第13・14図）

15-1

18-1

18-4

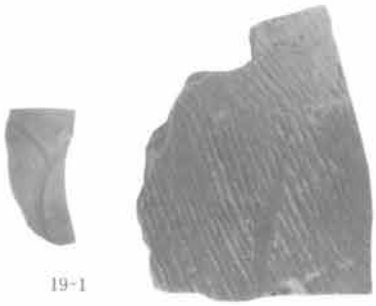
18-2

18-5

18-3

18-6

A・B区出土遺物（第15・18図）


19-1

19-2

19-3

19-4

19-5

19-6

20-1

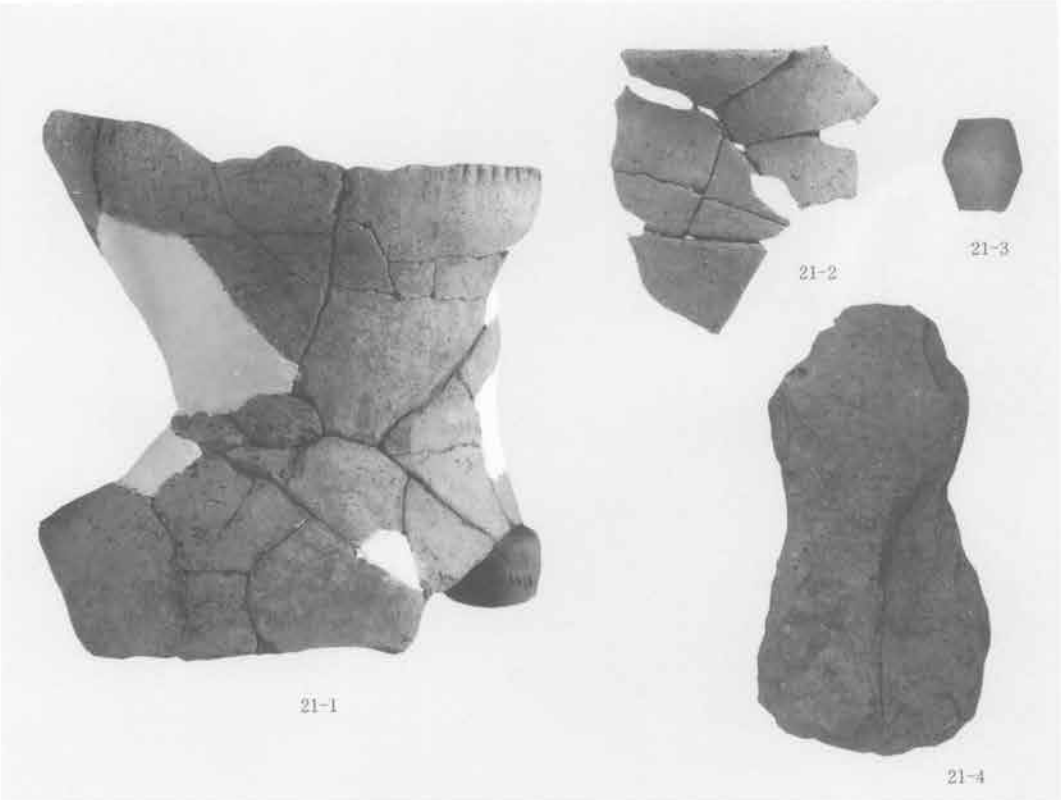
20-2

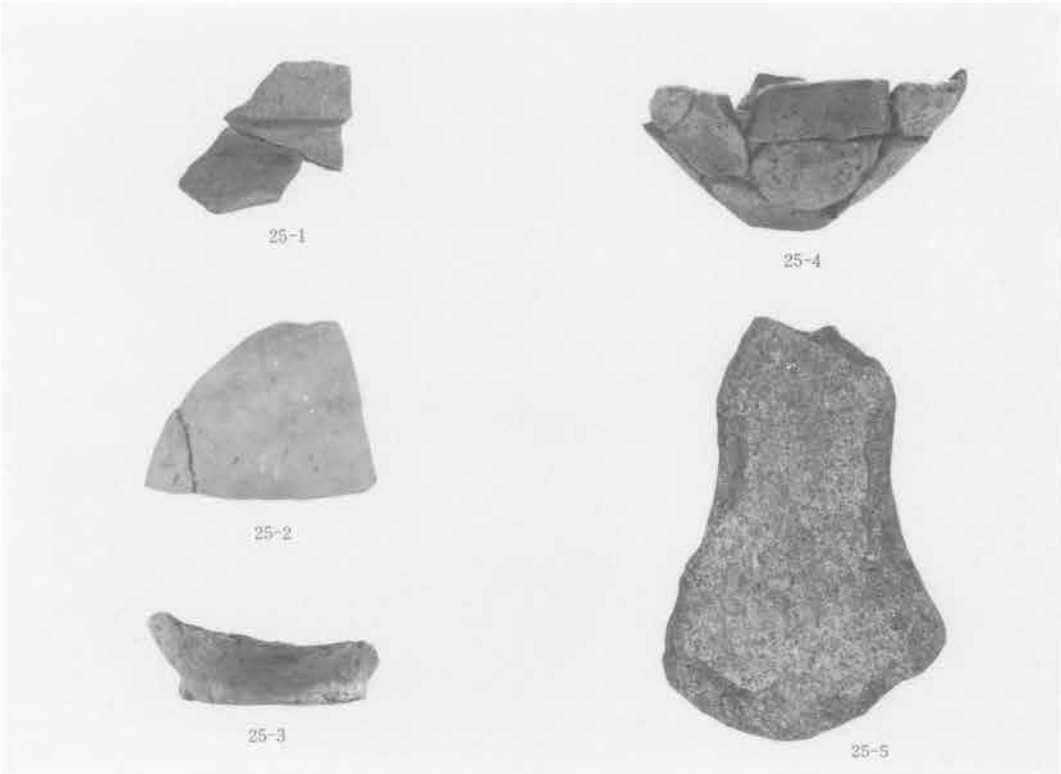
20-4

20-3

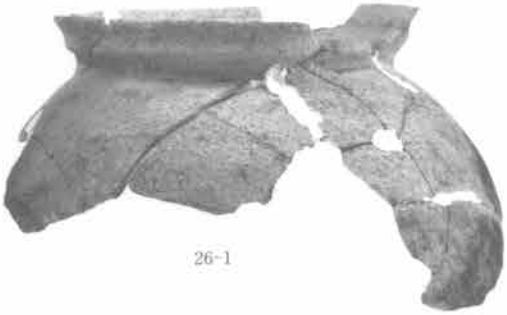
20-5

B区出土遺物（第19・20図）





B・C区出土遺物（第21・25図）



26-1

26-4

26-3

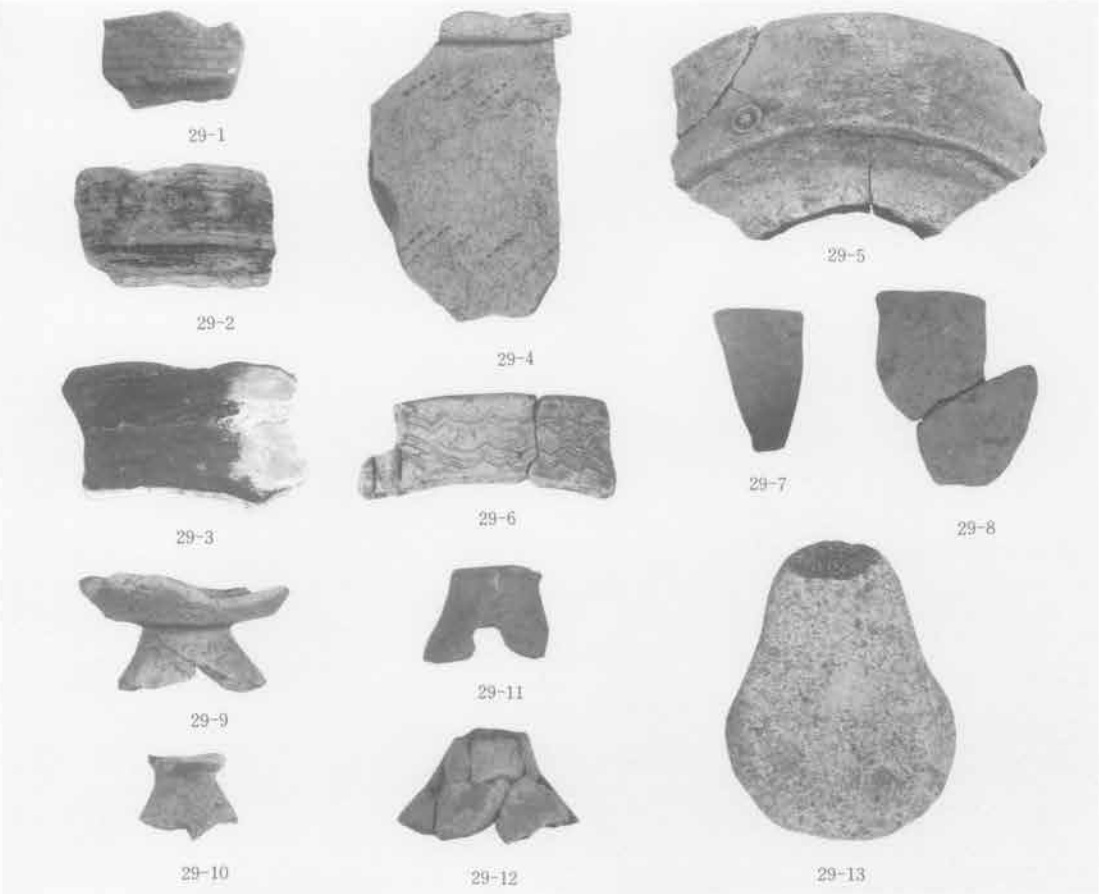
26-5

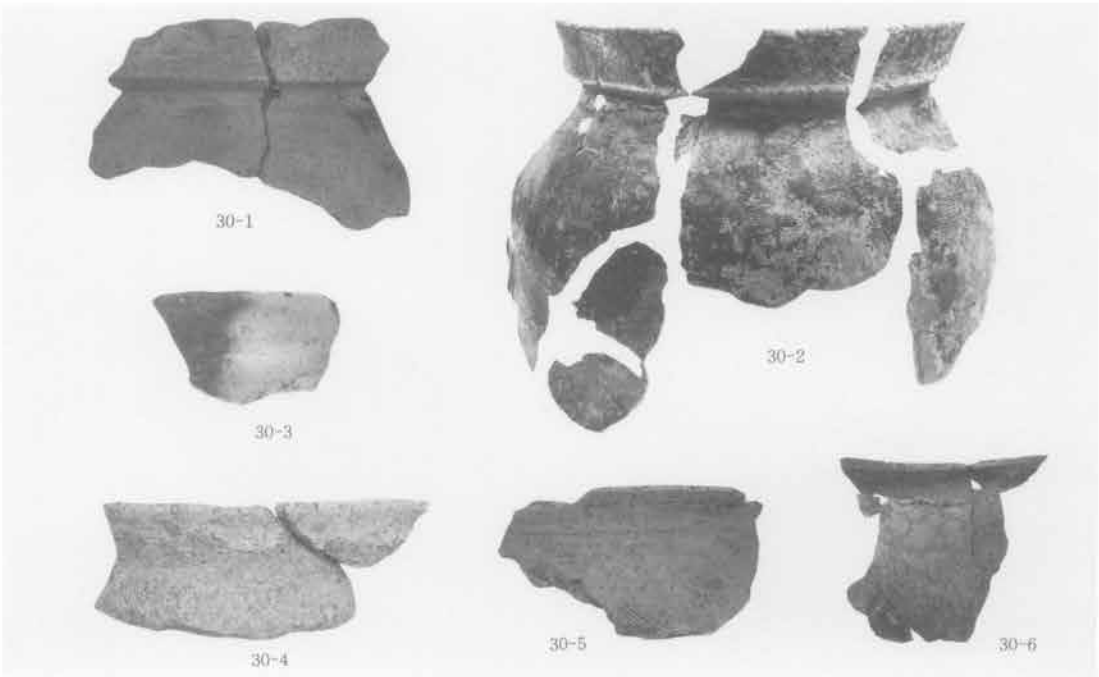
26-6

28-1

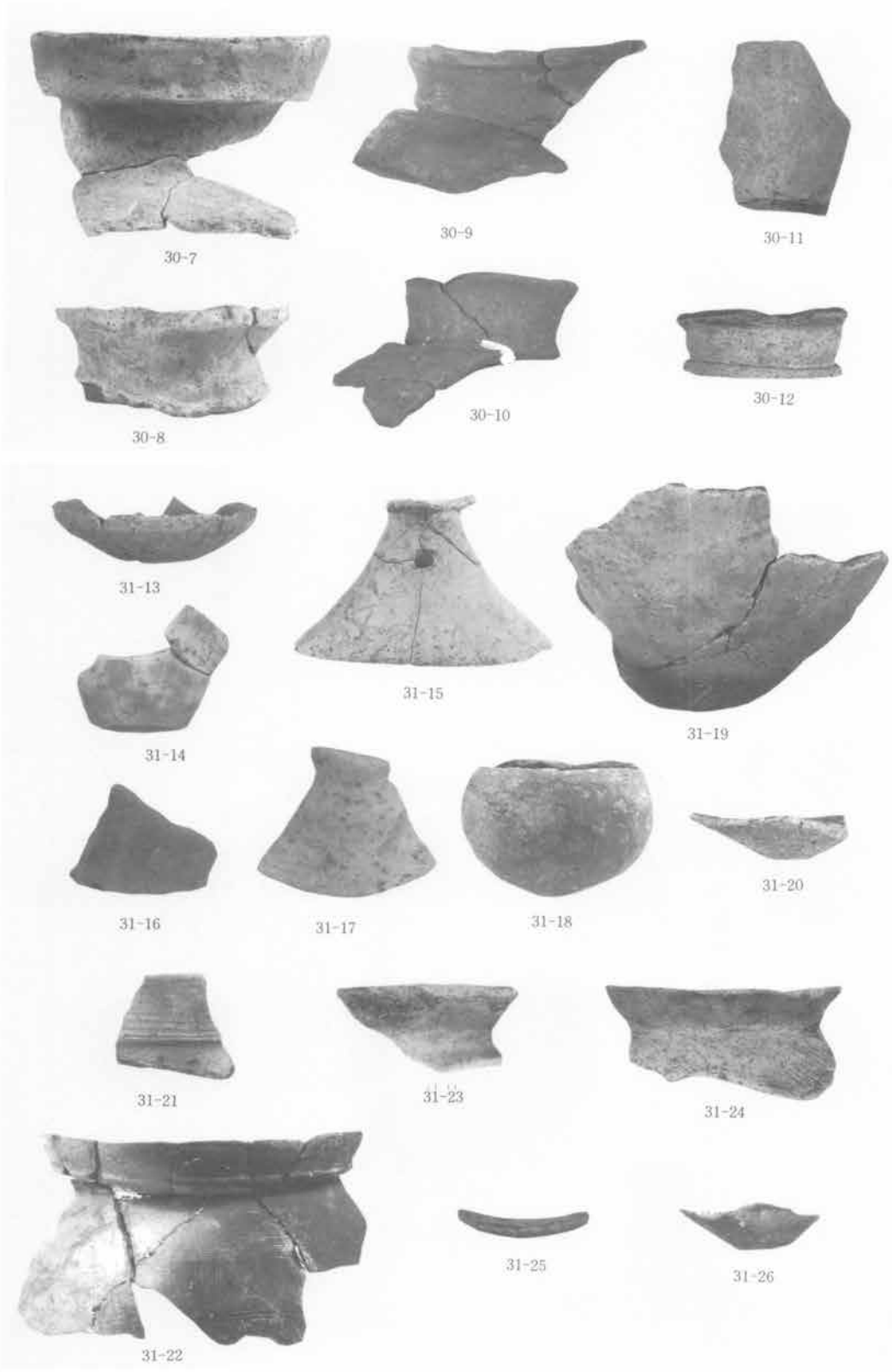
28-3

C区出土遺物（第26・28図）

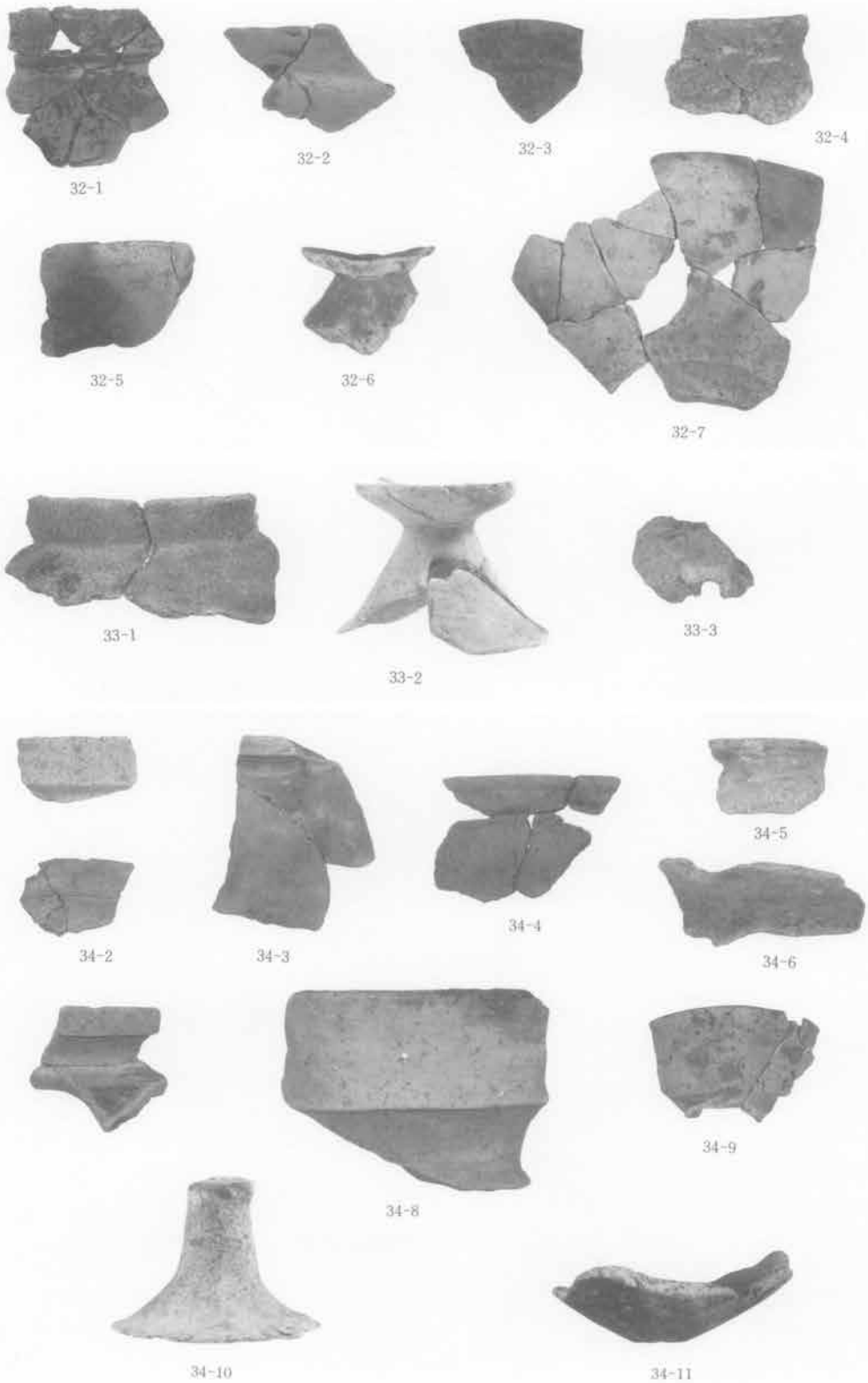




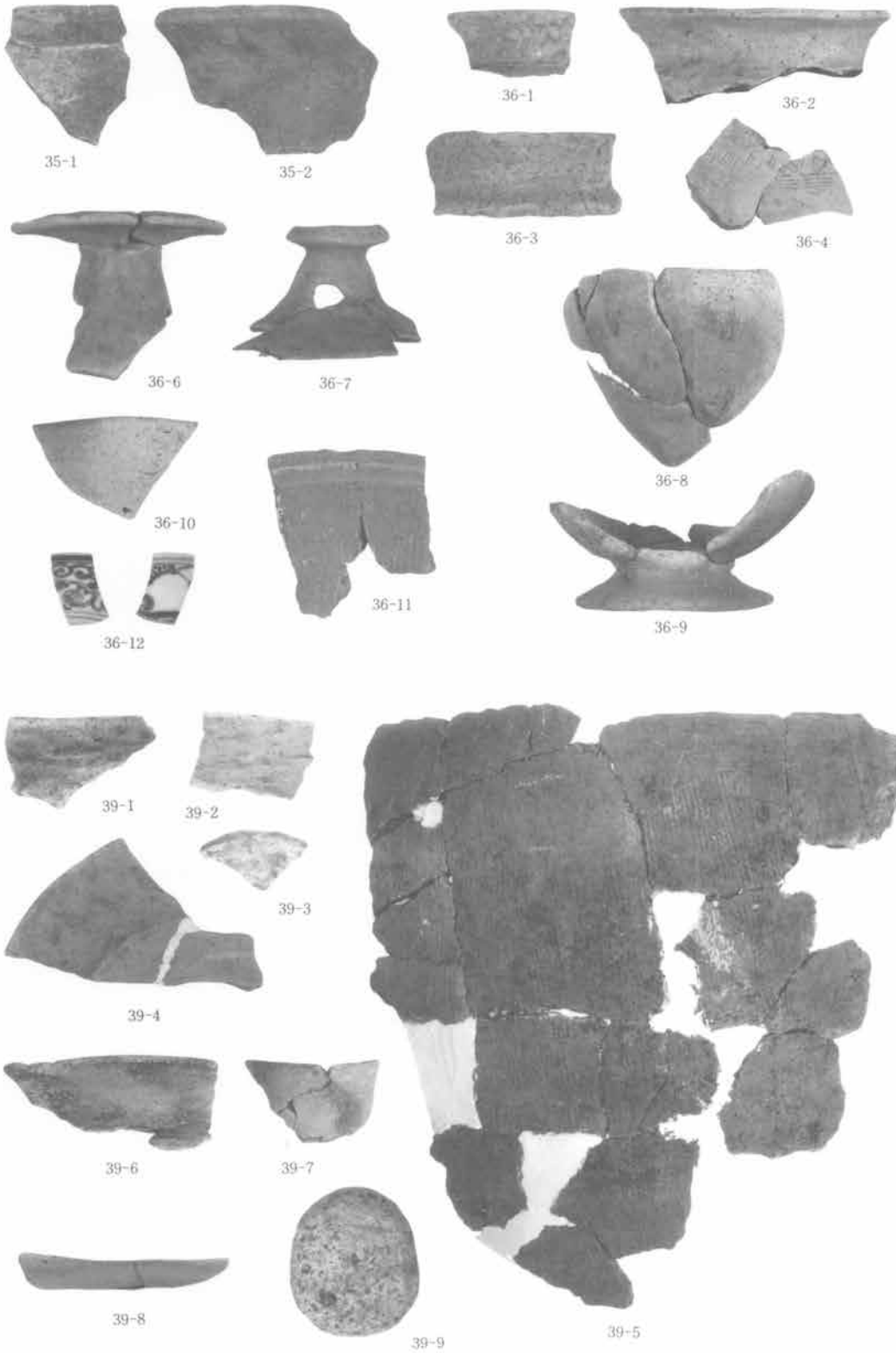
C区出土遺物（第29・30図）



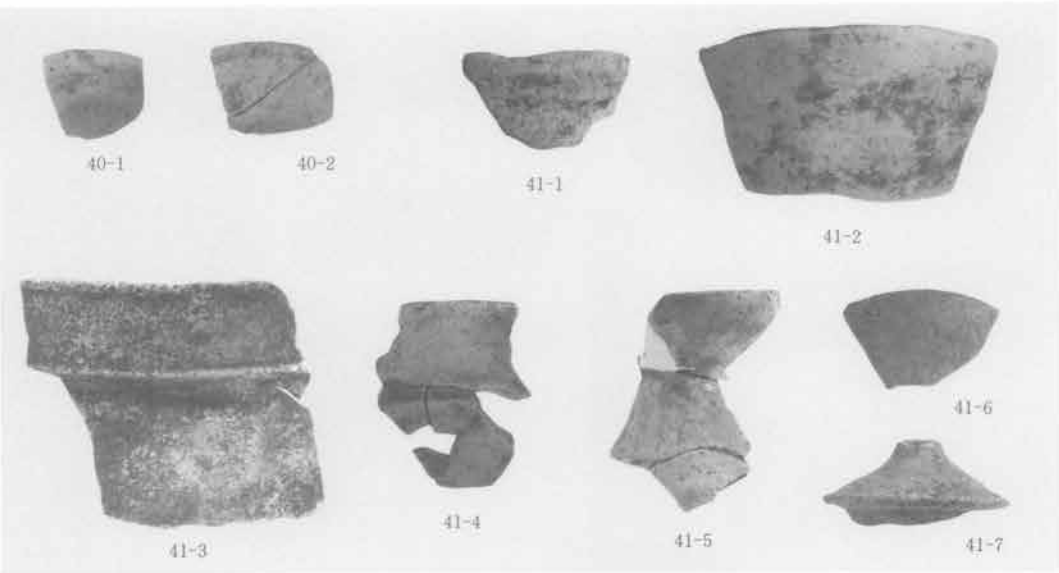
C区出土遺物（第30・31図）

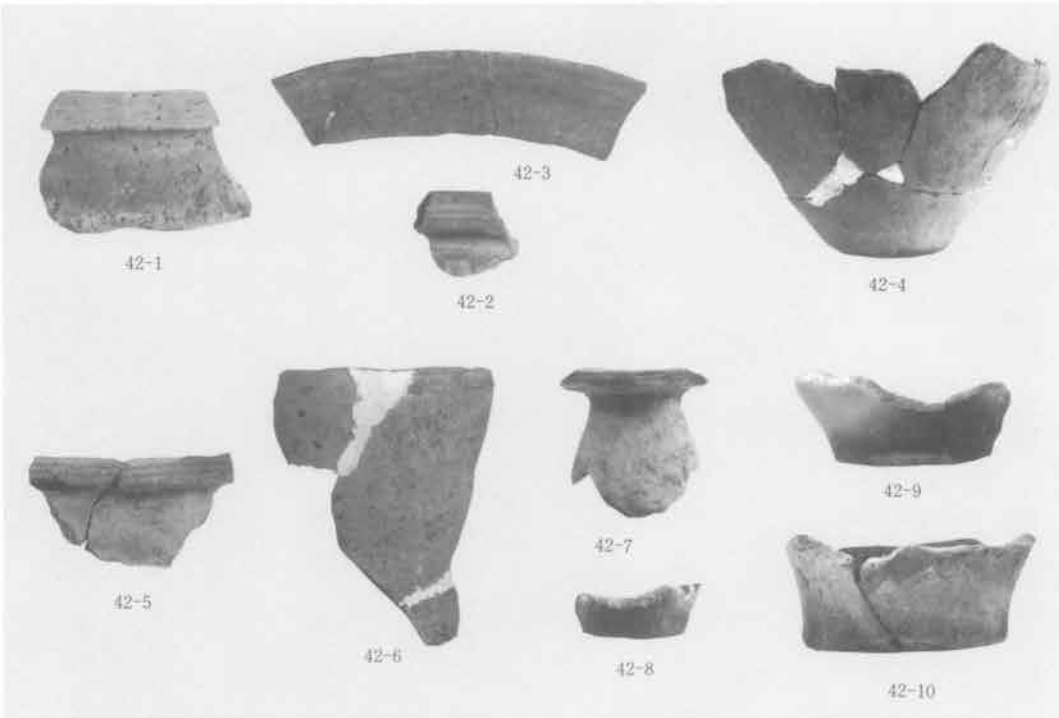


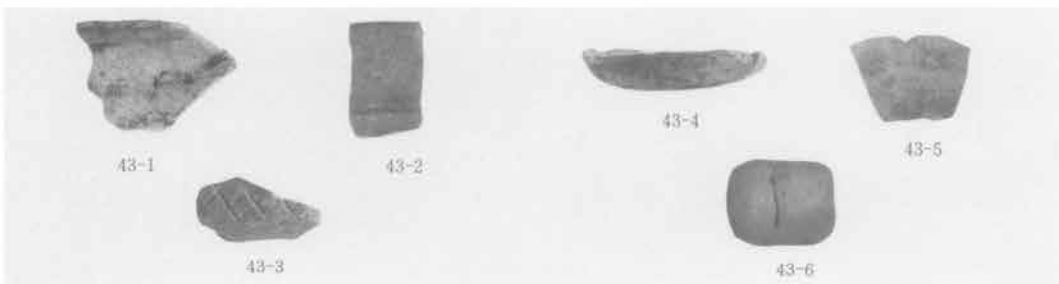
C区出土遺物（第32～34図）



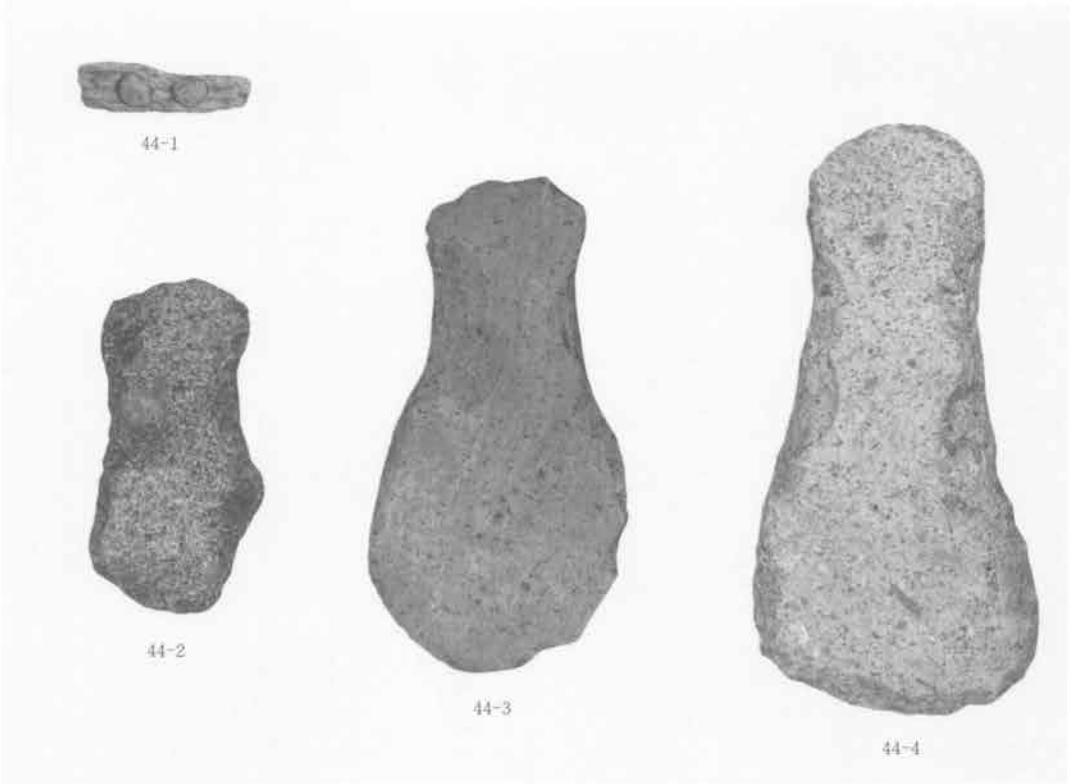
C・D区出土遺物（第35・36・39図）







D区出土遺物（第40～43図）



D区他出土遺物（第44図）

宮永坊の森遺跡

印刷・発行　1989年3月

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター

〒921　石川県金沢市米泉町4丁目133番地
☎（0762）43－7692

印　　刷　ヨシダ印刷株式会社

〒921　石川県金沢市御影町19番1号